

SENDプログラム 2016年度受入実施報告書
京都サマープログラム二〇一六アジア研究教育ユニット (KUASU)
国際高等教育院 (ILAS)

SEND プログラム 2016 年度受入実施報告書 「京都サマープログラム二〇一六」

アジア研究教育ユニット (KUASU)
国際高等教育院 (ILAS)

目次

はじめに	iii
1 SEND プログラム	1
1.1 概要	1
1.2 SEND 準備	1
1.2.1 全学共通科目「日本語・日本文化演習」の開講	1
1.2.2 情報共有	3
2 実施状況	4

第一部

1 東アジア諸大学学生のための「京都サマープログラム二〇一六」	6
1.1 設立の経緯と目的	6
1.2 「京都サマープログラム二〇一六」概要	7
1.2.1 プログラム内容	7
1.2.2 実施体制・教員確保と京都大学学生アシスタントの関与	8
1.2.3 カリキュラムの特徴	8
1.2.4 使用言語	8
1.3 今後の展望	8
2 実施体制	10
3 参加学生一覧	11
4 研修日程	12
5 参加学生報告	15

第二部

1	アセアン諸大学「京都サマープログラム二〇一六」	46
1.1	設立の経緯と目的	46
1.2	「京都サマープログラム二〇一六」概要	46
1.2.1	プログラム内容	46
1.2.2	実施体制と教員確保	48
1.2.3	京都大学学生アシスタント（チューター）	48
1.2.4	カリキュラムの特徴	50
1.2.5	実施時期および期間	52
1.3	今後の課題	52
2	実施体制	53
3	参加学生一覧	54
4	研修日程	56
4.1	日本語Ⅰ	61
4.2	日本語Ⅱ	63
4.3	日本語Ⅲ	65
4.4	書道	67
4.5	京都府庁	69
4.6	科学講義（松沢哲郎）	70
4.7	人文学講義（湯川志貴子）	71
4.8	人文学講義（ニールス ファン ステンパール）	72
4.9	人文学講義（河合淳子）	73
4.10	人文学講義（パリハワダナ ルチラ）	74
4.11	学外研修	75
4.12	学外研修	76
4.13	SEND共同発表	77
4.14	修了式	78
5	参加学生報告	79

はじめに

周知のように、現在、大学の国際化のなかで様々な取り組みが急速に広がりつつあります。京都大学においても、大学の国際化は、必須の課題になっています。特に、海外からの学生や研究者の受け入れ体制の拡充は、現在、きわめて重要な課題であり、また多くの海外の大学から本学に強く期待されていることでもあります。



2016年夏、私たち京都大学アジア研究教育ユニットを軸に、アセアン諸大学学生と東アジア諸大学学生の受け入れ事業として「京都サマープログラム2016」が実施されました。本報告書は、この事業の実施内容や実施体制についてまとめたものです。今後の受け入れ事業実施にとって参考になればと思います。

もともとアセアン諸大学の学生受け入れと東アジア諸大学（北京大学を中心に開始されました）の受け入れ事業は、別個に展開されてきました。アセアン諸大学学生の受け入れプログラムは、本年度で3回目、また東アジア諸大学（もともとは北京大学）の受け入れプログラムは5度目になります。また、アセアン諸大学学生向けのプログラムは日本語をベースに、東アジア諸大学学生向けのものは英語ベースでそれぞれ行われています。

今回は、アセアン諸大学からは、インドネシア5名、シンガポール2名、タイ5名、ベトナム6名の計18名が、東アジアからは、中国15名、台湾5名、香港3名、韓国2名の計25名が参加されました。

今回は、新たな試みとして、いくつかのイベントをこの二つのプログラム合同で実施しました。具体的には、京都府庁訪問（8月1日）、科学の講義（同日）、人文学講義（8月3、4日）、および8月12日の歓送会などです。特に最後の歓送会では、二つのプログラム参加の学生が混じり合い、楽しい時間を過ごすことができました。

参加された学生には、京都大学の短期交流学生の身分が与えられ、インターネット接続や図書館利用などの便宜をはかってきました。2週間という短い期間ですが、日本という彼ら彼女らにとって「異文化」のなかで生活し学んだことの意味は大きいものだと考えています。今後は、この短期の滞在経験を契機に長期的な日本への留学を希望される方が次々とでてくることを心より期待しています。

既に述べたように、本年度の受け入れプログラムは、アセアンと東アジアの合同の機会を設定するという新たな試みを含んだものであったにもかかわらず、大きな問題もなく終了することができました。その背景には、多くの方々のさまざまなご協力がありました。国際高等教育院の諸先生方、アジア研究教育ユニットの先生方、京都大学各部局の諸先生、教育推進・学生支援部国際教育交流課交流支援掛とアジア研究教育ユニットの事務担当者、京都府の国際課・政策企画部計画推進課・議会事務局総務課、京都府国際センターの皆様、連携諸大学の教職員の方々、短期交流学生の講義や日本語授業を担当していただいた講師の方々、また、サポート役を務めていただいた京都大学の学生、院生たち。こうした方達のご支援ご

協力なしには、今回の事業は成り立たなかったのではないかと考えています。ここに心より感謝したいと思います。

2017（平成29）年3月

京都大学アジア研究教育ユニット
ユニット長 伊藤 公雄

1 SEND プログラム

1.1 概要

京都大学アジア研究教育ユニット (KUASU) は、平成 24 年度から開始された文部科学省による大学の世界展開力強化事業のプロジェクト (『開かれた ASEAN+6』による日本再発見—SEND を核とした国際連携人材育成) を推進する母体となっている。KUASU は、京都大学の文学、経済学、農学、教育学、アジア・アフリカ地域研究の各研究科と、国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センター (旧国際交流センター)、東南アジア地域研究研究所 (旧東南アジア研究所)、人文科学研究所、経営管理研究部で構成される。

“SEND” は、*Student Exchange - Nippon Discovery* の頭文字をつなげたものである。これは、京都大学アジア研究教育ユニット (KUASU) が提供するプログラムの一つであり、日本文化、日本社会を「外」の視点から捉えなおすことによって、アジア (および世界各国) と日本のあいだの相互理解の促進と、互いに共通する課題の発見・解決を目指すことを主眼としている。

本報告書は、平成 28 年度の SEND プログラムにおける受入事業について報告するものである。この受入事業とは、短期の留学生 (=「短期交流学生」) を受け入れる短期プログラム (表 1 参照) のことである。本報告書では、このプログラムの概要・教育的実践・課題について報告する。

表 1 本報告書で扱う短期受入プログラム

形態	プログラム名称 (実施期間)	対象の国/地域
受入	「京都サマープログラム二〇一六」 (平成 28 年 7 月 31 日 ~ 8 月 13 日)	東アジア：中国、韓国、台湾、香港 アセアン：インドネシア、タイ、 ベトナム、シンガポール

1.2 SEND 準備

1.2.1 全学共通科目「日本語・日本文化演習」の開講

SEND プログラムに参加する京都大学の学部生・大学院生は、プログラム内で日本語・日本文化についての説明や考察をおこなうことになっている。派遣プログラムでは、京都大学学生が主体となって派遣先大学でそれを実践する。受入プログラムでは、短期交流学生 (=短期留学生) が主体となって京都大学で説明・考察をおこなう。これらは、派遣/受入のどちらにおいても、日本人学生と外国人学生との共学を基盤として実践される。その実践能力を養成するため、平成 25 年度から、京都大学国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センターの教員が中心となってリレー式に担当する「日本語・日本文化演習」(全学共通科目：キャリア群) が毎年度開講されている。その概要は、以下の表 2 にしめすシラバスの通りである。

表2 平成28年度「日本語・日本文化演習」シラバス

授業科目名、英訳	日本語・日本文化演習 Japanese Language & Culture		担当者所属 職名・氏名	国際高等教育院 教授 河合 淳子 教授 長山 浩章 准教授 家本 太郎 環境安全保健機構 准教授 阪上 優 学際融合教育研究推進センター 特定助教 稲垣 和也	
群	キャリア群	分野分類	その他キャリア形成	使用言語	日本語／英語
単位数	1単位	週コマ数	1コマ	授業形態	演習
開講年度	2016 前期／後期	配当学年	全回生	対象学生	全学向
曜日時限	火5／火2	教室	1 共22／吉田国際交流会館 南講義室1		
授業の概要・目的					
日本人学生、特に海外大学に短期留学を計画している学生が、留学先大学において日本語を教え、日本文化を紹介するなどの経験とその準備を通して、日本文化を再発見し、その過程を通してグローバルな視野に立った物の見方・考え方を養うことを目的とする。					
到達目標					
<ul style="list-style-type: none"> 日本語、日本文化を捉える多様な視点を理解すること。 本講義で学んだことを生かして、まずは授業内で、日本語や日本文化を実際に紹介する経験をする。 					
授業計画と内容					
多様な文化を有する人たちとの交流の中で、自国文化を多面的に理解し紹介できることが要請される場面は多い。日本人であっても日本語や日本文化について深い理解をもって解説するためには、言語・文化に意識的に向き合わなければならない。本授業は、日本語や日本文化を意識的に捉え、深い理解に立って外国人と見方や考え方を共有できるよう、講義・実習・討議を交えて進めていく。					
1回目 オリエンテーション <講義担当：河合、長山、家本、阪上、稲垣>					
2～7回目 <前期担当：稲垣> <後期担当：長山>					
<ul style="list-style-type: none"> 非母語話者に対する日本語教授法解説 日本文化・社会の何をどう伝えるかー (講義) 日本語教授法実習 日本文化・日本社会に関するプレゼンテーション準備及び討議 (実習) 講義内で随時発表の機会を設ける 中間プレゼンテーション 					
8回目 日本文化とメンタルヘルス<講義担当：阪上>					
9～14回目 <前期担当：河合> <後期担当：家本>					
<ul style="list-style-type: none"> 多文化の中の日本文化 一何をどう伝えるかー (講義) 非母語話者に対する日本語教授法解説 日本文化に関するプレゼンテーション準備及び討議 (実習) 日本語、日本語教授に関するプレゼンテーション準備及び討議 (実習) プレゼンテーション 期末プレゼンテーション 					
海外留学を考える学生を優先するが、これまでとは異なる新しい視点で日本語・日本文化を考えてみようとする学生や留学生の受講も歓迎する。なお、本授業は現在実施されている海外派遣推進プログラム (SEND: Student Exchange Nippon Discovery)の推奨科目となっている。					
成績評価の方法・観点及び達成度					
積極的参加態度、課題提出、発表、プレゼンテーションを総合して評価する。 配点の割合は講義において示す。					
教科書／参考書等					
プリントを配布する／授業中に紹介する					
授業外学習 (予習・復習) 等					
実習、発表、プレゼンテーションの準備として、段階を追って随時課題が出される。各自、積極的に準備を行うことが求められる。					

1.2.2 情報共有

SEND プログラムの実施に先立って、以下の図 1 にしめすような連絡体制を活用した（図中の矢印は情報の行き来をあらわす：太線は教職員が関わる場合、細線は学生からの情報の流れをあらわす）。この連絡体制は、プログラム実施期間中および期間後も活用した。

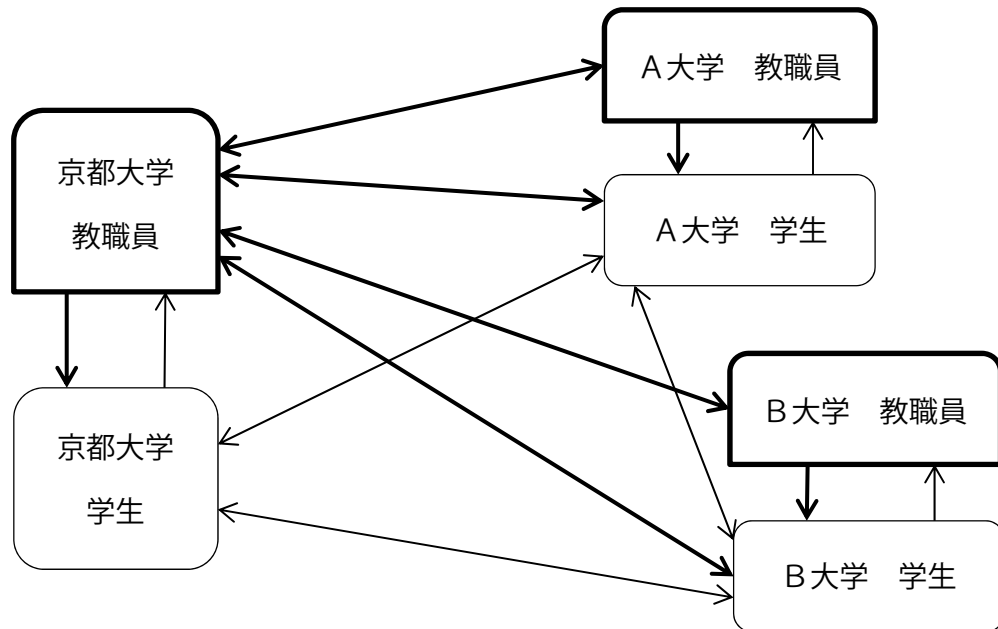


図 1 連絡体制の概要

共有した情報の内容は以下の通りである。

- 教職員－教職員間： プログラムの運営に関する教務・事務的な情報
- 教職員－学生間： プログラム内容に関する教務・事務的情報
- 学生－学生間： 共同学習に関する情報、プログラム内容に関する事務的情報

情報共有のためのツールとしては、以下のものがあげられる。

- 電話： 教職員・学生を問わず、幅広く使用
- Eメール： おもに教職員－教職員、教職員－学生間で使用
- クラウドストレージサービス： ファイル共有のために幅広く利用
- LINE： おもに学生－学生間で使用（一部、教職員－学生間でも使用）
- 他のSNS： おもに学生－学生間で使用
学生間の情報共有の環（図 1 参照）の形成に適している

また、緊急連絡網を作成し、教職員間での危機管理体制の整備に努めた。緊急連絡網には、i) プログラムの日程表、ii) 各参加者の利用フライト情報、iii) 参加者名のリスト、iv) 各大学の緊急時連絡窓口、v) 参加者の宿泊施設情報、vi) 大使館・領事館情報等を載せた。

2 実施状況

ここでは、「京都サマープログラム二〇一六」における費用補助状況と学生参加状況の概要について述べる。

短期交流学生（＝短期留学生）の修学を費用面から支援するものとして、平成28年度の実施においては以下の四項目を挙げることができる。

- ① 大学の世界展開力強化事業～ASEAN 諸国等との大学間交流形成支援～《「開かれた ASEAN+6」による日本再発見－SEND を核とした国際連携人材育成》（文部科学省）
- ② 平成 28 年度ワイルド&ワイズ共学教育受入れプログラム事業（京都大学）
- ③ JASSO 奨学金（UGT1614301002：大学の世界展開力強化事業Ⅱ（「開かれた ASEAN + 6」による日本再発見）（日本学生支援機構）
- ④ 京都府庁（国際課）と公益財団法人京都府国際センター提供のプログラム

以下の表3では、東アジア諸大学とアセアン諸大学の2つについて、基本情報と、費目別の費用補助該当者数（学内／学外研修費・渡航費・宿泊費・交通費・雑費・チューター費）、奨学金受給者数（JASSO 奨学金）、各項目の合計人数を、上記①～④による費用補助の該当是非と合わせて示す。

表3 京都サマープログラム二〇一六の実施状況概要

	東アジア 中国、韓国、台湾、香港	アセアン インドネシア、タイ、 ベトナム、シンガポール	計
実施期間	平成28年7月31～8月13日		
参加学生数	25名	18名	43名
学内研修費補助	①② 25名	①② 18名	43名
学外研修費補助	②④ 25名	①②③④ 18名	43名
渡航費補助	0名	② 18名	18名
宿泊費補助	② 25名	② 18名	43名
交通・雑費補助	0名	③ 18名	18名
チューター費	(チューター数：12名)	① (チューター数：18名)	
JASSO 奨学金	③ 10名	③ 18名	28名

第一部

東アジア諸大学

「京都サマープログラム二〇一六」

《主催》



京都大学
国際高等教育院

《共催》



KYOTO UNIVERSITY ASIAN STUDIES UNIT
京都大学アジア研究教育ユニット

《共催》

京都府庁

《共催》

公益財団法人 京都府国際センター

1 東アジア諸大学学生のための「京都サマープログラム二〇一六」

1.1 設立の経緯と目的

今年度（2016年度）、本プログラムは五回目の実施を迎えた。第一回は、2012年8月中旬に北京大学の学生15名を受け入れたことに遡る。これまで、本プログラムは一貫して北京大学で最も人気がある短期留学プログラムの一つとして位置づけられてきた。こうした実績を生かし、より充実したプログラムを実現すべく、今年度は、募集先を拡大し、北京大学と同じ大学間学生交流協定校である延世大学（韓国）、国立台湾大学、香港中文大学からの学生を合わせて25名を受け入れることとなった。第一回から第五回の今年度まで、合計83名が本プログラムに参加したことになる。

2012年に北京大学を対象にした第一回プログラムを設立した当初、担当者には次の問題意識があった。「日本と中国は、歴史的・文化的に深く交流してきた大切な隣国であるとともに、経済的にも補完し合う相互依存度の高い関係を築いてきた。しかし、近年は・・・（中略）・・・日中の人的な相互交流が十分に行われず、互いの差異への理解の乏しさ、対話の基礎となる、国を超えた個々人の信頼関係の希薄さが見え隠れする。一方で、隣国である日本に対する関心は必ずしも低いものではない。本稿の報告者らが中国のトップ大学で行った調査においても、日本留学に関心を持つ学生が一定数存在することが分かっている。しかし、彼らの多くは奨学金、学費、言葉などの問題から、最終的に日本への長期留学を選択肢から外してしまうことが多い¹。こうした現状から、両国関係を永く維持・発展させるために、将来を担う中国の若い世代に少しでも日本の実像に関する理解を深めてもらいたいと考え、まずは短期受入れプログラムを実施するようになった。²」

上記の引用に見られる状況は、国と国の一時的な関係に左右されない、人的な相互交流の必要性そして個々人の信頼関係の構築の重要性を示している。そのような中で、第一回～第四回までの北京大学を対象としたサマープログラムは大きな成功を収めていた。参加学生たちは、日本への理解を深めると共に、ソーシャルネットワーキングサービス（SNS）等を通じて、周りの人々にもその情報を発信し、参加学生や彼らの情報に触れた学生の中から、日本への長期留学を志す学生が出てきている。こうした状況を東アジア圏、そして広くアジア圏に広げていきたいと考えた。今回、アセアン諸国の学生を対象としたプログラム（本報告書第二部に掲載）との同時開催に踏み切ったのはこのような経緯による。こうして多様な文化的背景を持つ学生が集うことにより、来日学生はもちろんのこと、本学学生にとっても一層豊かな教育環境の実現を目指す。このことは、将来、京都大学が国際的な短期留学の拠点、ないしはアジアの文化、社会に通じ、その発展に寄与できる人材の育成拠点としての存在感を高めることにも繋がるであろう。

¹ 韓立友・河合淳子（2012）「日本の大学における留学生受入れ体制の問題点及び解決策の探索：京都大学におけるアドミッション支援オフィス導入の背景と効果」『京都大学国際交流センター論攷』第2号：37-55.

² SENDプログラム 2015年度受入実施報告書「京都サマープログラム二〇一五」p.6.

最後に、本プログラムの特徴の一つに京都府との連携がある。第一回プログラム開始前の2011年に京都府に対し、短期留学生受入れ事業を京都大学と協働で行うプログラムの提案を行った。その時点から、すなわち本プログラムの企画段階から京都府と協議を重ね、5年以上に渡る緊密な協力体制の下で、共同でプログラムを実施してきている。京都府の協力により、大学単独では実施が難しい地域での文化体験や京都府の政策に関する講座、議会場見学等が可能となっている。

1.2 「京都サマープログラム二〇一六」概要

1.2.1 プログラム内容

本プログラムの内容は、以下の四つの部分に分けられる。

一つ目は、京都大学での講義である。毎年講義している教員は変わるが、基本的に国際関係、歴史、文学、農学、社会学など、各部署の教員に専門の講義をしてもらっている。教授言語は英語である。今年度は、高等研究院 松沢哲郎教授の「チンパンジーが教えてくれた人間の心」/ Human mind viewed from the study of chimpanzees、農学研究科 近藤直教授の「食料・環境・生命に関わる技術と研究の現状と将来展望」/ Current situation and prospects of researches and technologies on food, environment, and life in the world、国際高等教育院 湯川志貴子准教授の「日本古典文学に見る日本人の美意識」/ The Aesthetics and Sensitivities of the Japanese as seen through Classical Japanese Literature を提供した。また日本の地方政府、政治の運営を理解するために、京都府庁政策企画部計画推進課の岩田高明課長（明日の京都担当）から京都府総合計画「明日の京都」による府政マネジメント/ The lecture of Kyoto prefectural administration に関する講義を行った。

二つ目は、日本語を教える講義の提供である。本プログラムは、募集の段階では日本語能力を要求しておらず、すべて英語で受講できるようになっている。しかし、以前のプログラム参加者から、日本語学習を希望する学生が少なくなかった。そのため、今年度より、国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センターに講師紹介を依頼し、基礎日本語のクラスを提供した（担当：赤桐 敦）。日本語レベルが高い学生 3 名は、同時期に開催された「京都サマープログラム二〇一六」アセアンの中級、上級日本語クラスに編入した。

三つ目は、日本文化および京都への理解を深める体験実習である。京都府北部の京丹波町での京野菜収穫、調理体験、美山かやぶきの里での散策や餅つき、七條甘春堂では和菓子作り体験など、府内各地域の視察や見学を行った。

四つ目は、学生交流である。京都大学からは 12 名の学生がサポーターとして積極的に参加した。サポーター学生たちは参加学生とともに講義を受講し、キャンパスの案内、生活相談を行った。本年度は、サポーター学生によって、サントリービール工場、株式会社ナベルなどいくつかの企業見学も企画・実施した。企業との事前交渉、日程調整、当日の引率、翻訳などを含め、教員の指導の元、すべての業務を自ら行った。また日本人学生とサマープログラム学生との交流に限らず、中国、韓国、台湾、香港の学生同士も互い交流を深めた。学生たちは、自主的にお互いのきずなを深め、プログラム終了後も SNS で交流を続けている。

このプログラムは留学生に限らず、サポーターとして参加した京都大学生にとっても、異文化理解能力を養い、外国語コミュニケーション能力を高め、国際性を涵養する貴重な体験となっている。

1.2.2 実施体制・教員確保と京都大学学生アシスタントの関与

現段階では、国際高等教育院の教授・准教授等の教員 4 名、国際教育交流課の事務スタッフ数名、京都府職員数名を中心として、カリキュラムの開発、企画及び実施を行っている。講義は基本的に京都大学各学部・研究科等の教員に依頼しており、ボランティアとしての講義提供を受けている。また、京都大学の学生も 12 名ほどがコアメンバーとして参加し、京都大学の講義及び京都府のプログラム以外に、イベントを企画したり、サマープログラムの学生を案内したりしている。これらコアメンバーには一定の謝金を支払っている。これ以外にも数名の学生がボランティアとして参加し、コアメンバーをサポートしている。

1.2.3 カリキュラムの特徴

本プログラムは、日本の政治、文化・伝統、歴史、社会、環境・農業問題などを理解してもらう以外に、海外における日本の大学のプレゼンスの向上、参加後の日本への長期留学へ繋げる足掛りとしての役割を目的としている。したがって国際関係、歴史、文学、農学、社会学など各分野の教員による教養的講義を受けること、日本の文化を体験すること、日本の企業の見学、日本人学生と交流することを特に意識したプログラム構成となっている。

1.2.4 使用言語

本プログラムでは、参加者を広く募るため、延世大学、北京大学、香港中文大学、国立台湾大学の学生であれば誰でも応募できるよう、参加にあたって日本語能力を問わない。本プログラムにおける講義は基本的に英語で行った。企業への見学、学生交流の際には、英語、日本語、中国語、韓国語などが使われていた。

1.3 今後の展望

今年度より対象大学を拡大し、本プログラムは新たな段階に入った。また「京都サマープログラム二〇一六」アセアンプログラムと同時に開催することにより、講義の充実とより多様な学生の交流を可能にできたことは、今後のプログラムの目指すべき方向を示すものでもあった。

京都が持つ日本の伝統文化・歴史、京都大学が持つ世界最先端の独創的な研究資源は、世界中の人々を惹きつける魅力がある。本プログラムのような短期留学プログラムを世界のトップ大学の学生に提供することで、日本の政治、経済、文化、歴史などについて発信できるとともに、優秀な留学生の誘致、世界における日本の大学のプレゼンスを高めることが期待できる。また、京都大学でも欧米の一部の大学と「交流協定に関する不均衡」問題が存在することから、こうしたプログラムは日本人学生の欧米への派遣を拡大し、「不均衡」を解

消す対策の一つとしても考えられる。現在の対象校をさらに拡大し、世界のトップ大学の学生を広く受け入れる必要がある。

今後の課題として、京都大学が提供する講義の講師に関する問題がある。現在は、京都大学の教育及び研究特色を生かせるよう、カリキュラムの内容によって、基本的に京都大学の各研究科・研究所の教員にボランティアでの講義を依頼している。しかし今後、規模が拡大していくにつれて講師の負担が増えることが予想される。講師に対する謝金など、質の高い講義を続けていく体制の構築が急がれる。現在、本学国際高等教育院では英語による全学共通科目の講義群の充実が図られている。こうした実績と人材との連携を進めることを検討する。さらには必要に応じ、一部の講義を他大学、さらには海外の教員に依頼するといったケースも検討すべきである。

また、本プログラムあるいは本プログラム内の学習活動についての成績評価に関しても整備が必要である。現在は、京都大学からの単位付与は行っていない。ただし、プログラム内での活動状況、最終プレゼンテーション、最終レポートにより、参考となる成績を素点で提示している。その情報を元に派遣元大学が単位認定を行っている場合がある。現在、北京大学において 1 単位、延世大学においては選択制で学生が希望すれば UIC Global Research という名の科目の 1 単位が付与されている。

また、京都大学の学生アシスタントのさらなる関与が期待される。学生アシスタントに対し、一定の費用を支払う前提で、現在教職員が行っている業務を担当してもらう。具体的には、国立台湾大学が行っているように、サマースクール参加者との事前連絡（必要情報の提供、質問への回答）、空港送迎、宿舎とキャンパスの案内、歓送迎会の企画・実施、文化活動等の実施、来日中の生活上のアドバイス、プログラムに対するアンケート調査の実施・統計が対象となるだろう。教職員のプログラム実施面での負担を減らすとともに、京都大学の学生の国際化、企画能力などの向上にも繋がると考えられる。

現在は北京大学、韓国延世大学、香港中文大学、国立台湾大学の 25 名の参加者全員に申請費用や学費の免除を行っているが、今後希望者が増加すれば、講師への謝金、プログラムの企画に関与する京都大学の学生への謝金も増加する。国立台湾大学、香港中文大学で実施されているように、一定の学費免除枠外の参加希望者には学費を支払う形での参加を受け入れるということも検討に値する。学生交流の実態に基づき、参加大学毎に学費免除枠を計算したうえで、予算を超過する場合は学生に学費を要求する必要性が生じることもあるだろう。

(文責：韓 立友・河合 淳子)

2 実施体制

京都大学

実施責任者

国際高等教育院長／教授 村中 孝史 (MURANAKA Takashi)

担当教職員

国際高等教育院・教授 河合 淳子 (KAWAI Junko)

国際高等教育院・准教授 韓 立友 (HAN Liyou)

国際高等教育院・准教授 家本 太郎 (IEMOTO Taro)

国際高等教育院・准教授 湯川 志貴子 (YUKAWA Shikiko)

教育推進・学生支援部国際教育交流課交流支援掛・掛長 廣瀬 泰子 (HIROSE Yasuko)

協力教職員

国際高等教育院・副教育院長／教授 喜多 一 (KITA Hajime)

国際高等教育院・副教育院長／教授 金 哲佑 (Kim Chul-woo)

高等研究院・特別教授 松沢 哲郎 (MATSUZAWA Tetsuro)

大学院農学研究科・教授 近藤 直 (KONDO Naoshi)

大学院教育学研究科・准教授 ニールス ファン ステーンパール (Niels van Steenpaal)

大学院法学研究科・教授 奈良岡 聰智 (NARAOKA Souchi)

アジア研究教育ユニット・特定職員 浜 亜希 (HAMA Aki)

京都府

国際課・課長 高橋 和男 (TAKAHASHI Kazuo)

留学生政策担当・課長 石塚 健一 (ISHIZUKA Kenichi)

企画・留学生担当・副課長 玉木 千絵 (TAMAKI Chie)

企画・留学生担当 伊達 圭子 (DATE Keiko)

政策企画部計画推進課・課長 岩田 高明 (IWATA Takaaki)

議会事務局総務課・主事 渡邊 康之 (WATANABE Yasushi)

公益財団法人 京都府国際センター・常務理事 三田 康明 (MITA Yasuaki)

3 参加学生一覧

東アジア 短期交流学生/ Short-Term International Students

氏名 (Name)	大学 (University)	専攻 (Major)	学年 (Year)
CHOI, EUICHIN	延世大学校 Yonsei University	政治学と国際関係	B
CHEW, SHANNON		アジア研究	B
CHU, LIANG	北京大学 Peking University	行政管理	M
FAN, PENGYANG		薬学	B
HUANG, LEI		ジャーナリズムとコミュニケーション	B
LI, ZHUOER		国際関係学	M
LIANG, XULIN		国際関係学	B
LIU, CHANG		Yenching Academy	M
LIU, XIANGJUN		医学	B
MENG, SHUOYANG		教育	M
MIAO, SHUJIN		Yenching Academy	M
SHAO, YILIN		国際関係学	B
XIE, YUCHEN		外国語	B
ZHANG, YIXUAN		外国語	B
ZHAO, TONG		法学	M
ZHENG, JIARUI		環境学	B
ZHENG, YUAN		中国語と中国文学	B
SIT, MAN		香港中文大学 The Chinese University of Hong Kong	歴史学
CHAU, HOI CHING	歴史学		B
KWOK, KA MAN	歴史学		B
CHANG, SHIH-LIN	国立台湾大学/ National Taiwan University	会計学	B
CHEN, CHIN-KANG		歴史学	B
CHOU, KUAN-CHENG		農芸学	B
LIN, FAN		医学	B
LU, XIAO TING		食品科技研究	M

4 研修日程

日程 Date	プログラム内容 Contents	場所 Place	担当 Responsibility
7/31 (日)	来日/Arrival in Japan	関西国際空港	
	ホテル到着/Hotel Check-in 18:30 京大生 サポーターがホテルロビーにて出迎え	アーバンホテル (7/31~8/4・8/7~12) 京都トラベラーズイン (8/5~6)	京大生/KU Students 小川、加藤、手代木、于、張
8/1 (月)	9:40-10:10 オープニングセレモニー及びオリエンテーション/ Opening Ceremony & Orientation	京都大学吉田国際交流会館 南講義室 1	河合教授、韓准教授 ILAS, Prof. Kawai, Prof. Han
	JASSO 奨学金在籍確認 (対象者のみ) / Enrollment Check (Only for JASSO scholarship candidates)	Yoshida Intl. House I-S1, Kyoto Univ.	経済学研究科国際連携推進室 浜 International Affairs Office Graduate School of Economics, Hama
	10:10-12:00 キャンパスツアー/Campus Tour	吉田本部構内/Main Campus	小川 (伸)、加藤、手代木、小 川 (慶)、川端、于、武部、張
	13:00- バスにて京都府庁へ移動/ Move to Kyoto Prefectural Office by Bus	京大正門前 The main entrance	
	13:30-14:00 京都府庁山内副知事表敬 / Making the Courtesy visit to the Kyoto Prefectural vice-governor Yamauchi at Kyoto Prefectural Government Office	京都府庁/ Kyoto Prefectural Office	京都府庁/ Kyoto Prefectural Office
	14:15-15:15 人文学講義/Lecture in the liberal arts Lecture I 京都府総合計画「明日の京都」による府政マネジメント/ The lecture of Kyoto prefectural administration	京都府庁/ Kyoto Prefectural Office	京都府政策企画部計画推進課 明日の京都担当課長 岩田高明/ Deputy Director of Planning and Promotion Division, Department of Policy Planning, Kyoto Prefectural Government, Takaaki Iwata
	15:30-16:15 京都府議場 見学/ Visit to the Kyoto Prefectural Assembly hall]	京都府庁/ Kyoto Prefectural Office	京都府議会事務局総務課広報 聴係主事 渡邊康之/Staff of General Affairs Division, Kyoto Prefectural Assembly Secretariat, Yasushi Watanabe
	16:15 バスで京都大学へ移動 Move to Kyoto University by Bus		
17:00-19:00 人文学講義/Lecture in the liberal arts Lecture II 「チンパンジーが教えてくれた人間の心」 Human mind viewed from the study of chimpanzees	吉田国際交流会館南講義室 5.6 / Yoshida Intl. House I-S5,6	高等研究院 松沢哲郎教授 手代木、于	
8/2 (火)	10:00-12:00 人文学講義/Lecture in the liberal arts Lecture III 「食料・環境・生命に関わる技術と研究の現状と将来展望」 Current situation and prospects of researches and technologies on food, environment, and life in the world	吉田国際交流会館南講義室 5/ Yoshida Intl. House I-S5	農学研究科 近藤直教授 手代木、于、東上
	15:00-16:00 Lecture IV 京都大学紹介/Educational and research activities in Kyoto University	吉田南総合館北棟 共北32 Yoshida-South Campus Academic Center Bldg. NorthWing 32	国際高等教育院 韓准教授 手代木、于
8/3 (水)	10:30-12:00 基礎日本語/Basic Japanese	国際高等教育院 演習室21/ ILAS Bldg. Seminar Room 21	京都大学 赤桐先生 小川 (伸)、手代木、于、武部
	13:00-14:30 人文学講義/Lecture in the liberal arts Lecture V 「日本古典文学に見る日本人の美意識」 The Aesthetics and Sensitivities of the Japanese as seen through Classical Japanese Literature	教育推進・学生支援部棟 KUINEP講義室/Education Promotion and Student Support Department KUINEP Lecture Hall	国際高等教育院 湯川志貴子准教授 川端、手代木、于
8/4 (木)	10:30-12:00 基礎日本語/Basic Japanese	国際高等教育院 演習室21/ ILAS Bldg. Seminar Room 21	京都大学 赤桐先生 手代木、于/

8/4 (木) (続き)	13:00-14:30 人文学講義/Lecture in the liberal arts Lecture VI 「京都の歴史と文化」 History and culture of Kyoto	教育推進・学生支援部棟 KUINEP講義室/Education Promotion and Student Support Department KUINEP Lecture Hall	教育学研究科 ニールス ファン ステーンパール准教授 川端、手代木、于
8/5 (金)	10:30-12:00 基礎日本語/Basic Japanese 14:00-15:30 人文学講義/Lecture in the liberal arts Lecture VII 「空間と政治：近代日本における政治家の別荘」 Space and Politics: Politician's Private Villas in modern Japan	吉田国際交流会館南講義室 5/Yoshida Intl. House I-S5 教育推進・学生支援部棟多 目的ホール / Education Promotion and Student Support Department Multipurpose hall	京都大学 赤桐先生 手代木、于、大南/ 法学研究科 奈良岡聰智教授 小川伸、手代木、于/
8/6 (土)	自由行動/Free Day		川端、手代木、于、大南、張、 武部、渡部
8/7 (日)	自由行動/Free Day		川端、手代木、于、大南、東上、 張
8/8 (月)	終日/All Day 京大学生の企画で学生交流及び企業見学 和菓子作り体験 / Cultural exchange activity and company tour with Japanese Students (Let's try making Japanese-style sweets!) 9:45 京阪七条駅 4 番出口集合/ Keihan Railway Shichijo St. No.4 Exit 10:00-11:00 七條甘春堂 (東山区七条通大和大路角) / At Shichijo- kanshundo (Higashiyama-ku, Shichijo-dori, Yamato Oji Kado) 修学旅行 コース/School trip course 13:20 近鉄十条駅出入り口 1 前/Kintetsu Railway Jujo St. No.1 Exit 13:30-15:00 株式会社ナベル見学/Nabel company field trip	七條甘春堂 (東山区七条通 大和大路角) / Shichijo- kanshundo (Higashiyama- ku, Shichijo-dori, Yamato Oji Kado) 株式会社ナベル/ Nabel company	小川 (伸)、小川 (慶)、于、川 端、手代木、張、大南、立花、 東上、武部
8/9 (火)	終日 体験プログラム/Activities 7:50 集合 (ホテルロビー/gather in the lobby of hotel) 8:00-10:30 バスにて京丹波町へ移動/Move to Kyotanba-cho by bus 収穫体験/ Harvesting Experience 10:30-12:10 バスで丹波自然運動公園へ移動/Move to Kyoto Tanba Sports Park by bus; 調理・昼食/Cooking・Lunch 12:15 バスにて美山へ移動/Move to Miyama by bus かやぶきの里散策ツアー・もちつき体験・買い物体験/Kayabuki- no-sato Tour, mocha (rice-cake) pounding experience, Shopping Experience 15:40 バスにて京都へ移動/Move to Kyoto by bus 17:40 到着/Arrival	京丹波町 美山 (かやぶきの里)	京都府庁/Kyoto Prefectural Office, 京都府国際センター /Kyoto Prefectural International Center 于、東上、立花、張
8/10 (水)	10:30-12:00 基礎日本語/Basic Japanese 14:30 JASSO 奨学金支給 及び 報告書提出 (受給者のみ)/ Payment of JASSO scholarship and submission of reports (Only for JASSO scholarship candidates) 15:00-17:30 研究内容発表等/Final Presentation	吉田国際交流会館南講義室 5/ Yoshida Intl. House I-S5 吉田国際交流会館南講義室 5,6 / Yoshida Intl. House I-S5,6 吉田国際交流会館南講義室 5,6 / Yoshida Intl. House I-S5,6	京都大学 赤桐先生 于、大南、加藤 経済学研究科国際連携推進室 浜 International Affairs Office Graduate School of Economics, Hama 国際高等教育院 湯川准教授、 河合教授、韓准教授 于、東上、張、立花
8/11 (木)	自由行動/Free Day		小川 (伸)、加藤、手代木、小川 (慶)、 川端、于、大南、東上、武部、立花
8/12 (金)	京大学生の企画で学生交流及び企業見学/Cultural exchange activity and company tour planned with Japanese students 10:50 シャトルバスの乗り場(西山天王山駅 東口二番乗り 場)/Gather in shuttle bus (Nishiyama Tennouzan station stop No.2) 11:30-12:40 サントリービール工場見学/Suntory Beer Factory tour	サントリービール工場/ Suntory Beer Factory	小川 (伸)、加藤、手代木、小川 (慶)、 川端、于、大南、東上、武部、立花

8/12 (金) (続き)	<u>17:30-18:00</u> 修了式/Completion ceremony	教育推進・学生支援部棟 KUINEP講義室/Education Promotion and Student Support Department KUINEP Lecture Hall	国際高等教育院 喜多副院長、 河合教授、韓准教授 小川（伸）、加藤、手代木、小川 （慶）、川端、于、大南、東上、 武部、立花
	<u>18:00-20:00</u> 送別会/Farewell Party	カンフォーラ/ Café Restaurant Camphora	国際高等教育院 金副院長、河 合教授、韓准教授、家本准教授 京都府国際課長 高橋和男 公益財団法人京都府国際センター 常務理事 三田康明 小川（伸）、加藤、手代木、小川 （慶）、川端、于、大南、東上、 武部、立花
8/13 (土)	帰国/Departure	関西国際空港/ Kansai Intl. Airport	空港見送り 加藤、手代木、于

5 参加学生報告

‘The Right People,’ ‘Spirit of Freedom,’ and ‘An Ironic Lesson’

Euichin Choi, Yonsei University

I can perceive myself as who I am from a neutral point of view. In that view, I have always been someone who is tremendously influenced by the people around him. That is undoubtedly a very vulnerable trait, but one other thing I know is how to set myself on the ‘right path,’ with that trait in mind. That’s why I’ve always had a strong desire as well as have dedicated huge amount of effort to be within a group of ‘right people.’ I enjoy and cherish the experiences I get by gradually increasing my standards and capabilities by working with those right people. On my yet another desperate search to find an opportunity that will lead me into that group of right people - with whom I will be inspired, challenged, and motivated - I came across the Kyoto Summer Program, and achieved the honor of being the first group of participants from my home university.

Upon arrival in Kyoto and commencement of the program, first thing I felt among the participating students was the atmosphere of pride and confidence. The students, although they all have very different backgrounds in life and they have all met for the first time, were never reluctant to open up to each other and voice up. They not only had the willingness to express their affection or opinions, but were able to fluently shift back and forth several languages. Speaking of languages, many participating students including the Kyoto University students could speak more than three languages, and yet they were so humble about it. I used to be proud of who I was and what I was capable of including my linguistic abilities, but as early as the ice-breaking session of this program I had a stunning epiphany that I was merely a frog in the pond. That sort of motivation and heartfelt learning was exactly what I was looking for, so I couldn’t have been more satisfied. The joy and excitement for being among all those great people and learning from them continued till the very end of this program.

The curriculum was very appropriately organized given the relatively limited time span of the program. Among all things, I was amazed that many of the field curriculums were organized entirely by the Kyoto University students. The visit to Nabel Corporation, which was planned as a first-hand experience session for understanding Japan’s SMEs, was one of them. I was very impressed in how the Kyoto University students arranged the visit to the company from start to finish. They have managed to contact the CEO, arrange a company tour, and even translated the CEO’s Japanese presentation into English for us. It struck me as something I, and the Korean higher education society in general should take into deep notice. It’s not just the superficial efforts of the Kyoto University students that struck me that way, but the fact that Kyoto University was confident and bold enough to actually delegate the entire procedure into their student’s own hands - for a program that may hold stake of reputation to many people, both domestic and international. The university’s subtle touch in the program’s curriculum like the above mentioned, definitely implanted a firm belief that Kyoto University’s standing values such as ‘Spirit of Freedom’ is something worthy of its reputation.

My future career goal is to become a diplomat of Republic of Korea. Interacting with various East Asian students with equivalent amount of passion and abilities has definitely showed me more than just a few guideposts on my way of achieving that goal. The first thing I learned, although a little ironical, was the need to get familiar with the Chinese language. As the program I was enrolled in was oriented for nations from East Asia in particular, I noticed that virtually everyone could interact and converse in Chinese, surprisingly even the Kyoto University students. As a native Korean who doesn’t have the faintest knowledge regarding Chinese, I was feeling very isolated when all the off-curricular conversation among students were being conducted in Chinese. I soon realized though, despite my still standing belief in English as the current lingua franca, I should never neglect the importance of learning Chinese in pursuing my future studies and career goals.

My position in this program was like a miniature version of Korea in the East Asian region – a small, yet an independent entity that has to desperately figure out ways of maintaining harmony among the several entities which are bound into one linguistic culture. I had a realization that it was imperative for me to become familiar with the Chinese language in order for me to actually contribute to the diplomatic or any kinds of relationship among the East Asian nations in the future. Through the person-to-person interactions during the program, I also learned that language is more than a mere tool for verbal and literal communication but also a direct link to the profound understanding of the people as well as their culture. Language is something that permeates into little gaps and cracks in our mindset which often gets overlooked, and I could sense that I was not able to thoroughly communicate with Chinese-speaking participants quite often. I do not only wish to have a successful career in the future, but first I want to appreciate a person as much as close as to who they really are. The personal interactions from Kyoto Summer Program taught me a way to achieve both.

I was able to absorb not only the vibrant energy from the students who were eager to pursue their visions, but also was reminded to always maintain a humble attitude. The ‘right people’ I have always been searching for were all there, and Kyoto University and its students have demonstrated what it is really is like to accommodate the so-called ‘Spirit of Freedom’ outside of its delicate set of words. My new perspective on Chinese language would not have been set if it was not for the close human-to-human interactions I was kindly led to during the program. I could not have been more thankful, and cannot be more excited of what I will do in the future - with all the precious memories that I was allowed to share with everyone in the beautiful summer of Kyoto.

Kyoto Summer Program

Shannon Chew, Yonsei University

This program has been the best of its kind I have ever attended and I enjoyed the two weeks in Kyoto, and my only regret is that the program ended too fast. It has a very good mix of students from East Asia, especially so since it involves masters and doctorate students from a wide array of majors. This allows me to be exposed to other areas of study from a foreign perspective. One of my most memorable moments at Kyoto was learning about Taiwanese politics (especially the Sunflower Movement in 2014) from an Agriculture-major student from Taiwan National University on the bus ride from Miyama back to Kyoto. Opportunities to learn first-hand from the natives outside the boundaries of the classroom are difficult to come by, and I am extremely grateful to experience them. More so than anything, two weeks in Kyoto has taught me how little of the world that I am aware of. Underwood International College (UIC) is a very small college with its pedagogical perspectives from the west, and my interactions with such accomplished students in East Asia broadened my understanding of East Asian education. After being in UIC for two years, I have become complacent, and the students from Peking, Taiwan and Hong Kong have humbled me. In UIC, we learn everything in English: from politics, to history, to culture. However, my encounters with the East Asian students who are not as proficient in English has gave me the opportunity to discuss these topics in Chinese and Japanese. Since I have an avid interest in Japanese law and policymaking, it is so much more liberating discussing it in Japanese. Despite my inadequate Japanese proficiency, the students have been very patient in helping me understand certain concepts. The same goes for Taiwanese politics, where I learnt so many new terminologies and concepts of modern Taiwanese politics. I feel that there is a strong connection between Taiwan and Japan’s shared history, and it is a relatively unexplored field. After this program, I am more determined and interested to pursue this field, and I will definitely continue to study these topics on a more tertiary level. I feel that learning about East Asia without learning its languages may be difficult for me to completely understand its contents, which is why I

personally place a lot of emphasis in learning languages that relate to my field of interest (Japanese and Traditional Chinese used in Taiwan, which is different from mainland Chinese). Overall, I am very happy that I have such an opportunity to meet such motivated and intelligent students during my trip in Kyoto.

After two weeks in Kyoto, I am convinced that Kyoto University is one of the most liberal and academically inclined institutions in the whole world. Many universities are run like capitalistic organizations and lack focus in its academic disciplines, but I feel that Kyoto University puts immense efforts in ensuring even the undergraduate students have the best education. That is to say, many undergraduate classes are taught by more elite researchers, such as Matsuzawa Tetsuro, whose class I enjoyed immensely despite not being interested in wildlife and environmental studies at all. The students at Kyoto are all immensely talented and motivated, which is not surprising as it is one of the most elite institutions in Japan. However, the diversity of the student body really helps in creating a more creative environment. Most of my friends at Kyoto University are not from Kyoto, and some of them are not even from the Kansai region. My best friend at Kyoto University happens to be from Sendai, and I also have met many people from Hyogo, Aichi and Tokyo. Unlike my previous experiences in Waseda University and the University of Tokyo, there is more Japanese diversity in the student body. Coming from different backgrounds, my friends at Kyoto University taught me about Japan more comprehensively. Prior to coming to Kyoto, my understanding of Japan was very narrow, with Tokyo as the center of it. It is very refreshing learning about other parts of Japan. My favorite part of interacting with them was learning about the different types of the Kansai dialect. The university also seems to have a more free 学風 (learning environment) for both the professors and students. Student protest posters are allowed, indicating a fair degree of freedom of speech in the campus. Professors are not pressurized to publish every semester, and they dedicate a lot more time for student interactions. One of the most impressive indicators for student independence is the Yoshida Dormitory, located in the South Campus. It is a student-run facility with little to no interference from the school whatsoever, a feat that will hardly be accomplished in South Korea or Singapore. I think this gives students more opportunities to display their own independence and creativity, as well as closer student-professor relationships. However, due to its lack of English-based programs, Kyoto University does not attract as much international students as the universities in Tokyo. While this may be problematic in some aspects, it forces foreign students to achieve a high level of Japanese in order to study. It would be ideal that in the future, Kyoto University would have more opportunities for international students to study, and also hire more foreign faculty members.

The contents are very disjointed and I think it may not be suitable for other majors. However, I think it suits me very well as I come from a liberal arts background. While the subjects may be irrelevant to our fields of interest, I think it was a good opportunity to be exposed to so many professors and their teaching styles. Many people have the common misconception that Japanese professors cannot teach in English, but based on the professors I have interacted at Kyoto University, they are all extremely proficient. While some professors (from Law department) may have some difficulty engaging with the students, I feel that they are still of exception caliber in their research fields.

Asian Universities tend to rank low on international ranking systems, but I do not necessarily think that this means that they're of lower quality. There are many outstanding research papers, but they are either in Japanese, Chinese or Korean, which makes it difficult for international audiences to understand the research materials. One of my future career plans is to bridge this gap and develop a greater understanding for such materials by improving my language capabilities and learning from these professors. This program is definitely a turning point for me. It has sharpened my research interests and helped me map out certain goals I should achieve. More than anything, it has strengthened my initial resolve of eventually working in academia in Japan in the future. As of now, I hope to work for Kyoto University's Institute of Liberal Arts and Sciences, with affiliation to KUNINEP and the Graduate School of Law. Many people have advised me against going to Japan to pursue tertiary studies, but I am determined to do so as I do not believe that the western education

system is a one-size-fit-all, encompassing system of education, and there are valuable traits of academia in Asia as well. I am interested in applying for Kyoto University Graduate School of Law, doctorate program after I have completed a master's degree and have JLPT N1 and above mastery of Japanese. I hope that following these steps I will be able to work towards my career in a more efficient way. Needless to say, this program has impacted me immensely in shaping my future career goals.

An Unforgettable Experience in Kyoto University

Chu Liang, Peking University

If only I could spend rest of my life in Kyoto. I cannot remember how many times that I said it to myself. In this summer program, I attended several inspiring lectures and Japanese course given by the faculties of Kyoto University. I could tell that every lecturer had fully prepared for their lectures and those lectures were really inspiring for us.

One of the reasons why Kyoto University has developed those outstanding scholars is they can enjoy freedom here. Professor Matsuzawa Tetsuro shared his moving story of academic research on chimpanzee with us. He told us that there had not been any form of difficulty for his study, because he loved chimpanzee and his research career. The love with all his heart formed the strongest motivation that has been supporting Professor Matsuzawa to conduct his study. The professor pointed out that his study might not come out with any practical result, but in Kyoto University, everyone could pursue what he or she really wanted. It inspired me a lot. I really appreciate the spirit of dedication of Professor Matsuzawa and I believe that whatever I choose to do for my future career, as long as I throw myself into it, I will come out with something in the end. The lectures did not manage to teach me any particular kind of knowledge but the lecturers showed us how their perseverance and enthusiasm made what they are today.

After daily lectures, we spent time hanging around Kyoto, the former capital city of Japan. This is the first time that I have come to Japan and it is lucky for me to come to Kyoto which is the center of the Japanese traditional culture. One of the best experiences was visiting Kiyomizu-dera wearing Kimono, even though it rained heavily upon my arrival at the temple. And Gion was another attractive spot for me. I could shop and had many kinds of Japanese foods there. And during Tanabata, we walked along the Kamogawa to appreciate the celebrating activities. I am looking forward to coming back to Japan in the future so that I can have better understanding of the Japanese history and culture.

As for my academic research, I am interested in the reform developed in the area of public management. Thanks to our program, we went to the Kyoto Prefecture and visited the government. This valuable experience gave me a great chance to observe how the Japanese government work by myself. I may try to conduct a comparative study of public government of China and Japan for my master thesis. However, in order to finish the thesis, I may need to study Japanese harder to read more literature.

The program really broadened my horizons and provided me with international vision. I communicated with the students of the program and I studied a lot related to their different cultural and educational background. In the future, I may consider visiting more places and experiencing more kinds of culture. At the end of this report, I want to extend my appreciation from the bottom of my heart to those people who helped make our program so perfect.

Final Report

Fan Pengyang Peking University

This summer we 15 Peking University students, along with other students from Taiwan, Hongkong, Koera, and Japan, spend about 14 days in Kyoto University, having some lectures and visits. During the time we stay in the university, we have visited the campus at the first glance, and we have meet some very famous professors in Kyoto University, including the professor focus on the cognization of chimpanzee and the professor major in the agriculture, which impress me most. Also we have attended some lectures about the culture of Japan and learned some basic Japanese which can make us able to have some daily conversation with the citizens in Kyoto. When we were in our free time, we have some sightseeing both in Kyoto and in the nearby of Kyoto to see the culture from our own eyes. I have spent quite a few days in the Kyoto, mostly near the river of Kyoto and many temples there. When I stayed near the Sanjo where people take shopping and visit temple, I can feel the combination of modern and tradition of Japan, in a very harmonious way. Wherever I was in Kyoto, I could find a temple very near, maybe not very big but elegant. Also when we visited those temples, students from Kyoto University have taught us how to make a prey. On the other hand, when it was weekend, we could go to some further place, so we went to Nara and Uji. In Nara, there was a grand temple, which is the biggest one I have ever seen, and many lovely deer. We tried some traditional Japanese suits. And in Uji, we have experienced the culture of the Matcha, a kind of green tea cooked in uniquely way. Student form Kyoto took us to learn the way it was made and also taste it.

After hearing the lectures given by the professors in Kyoto University, what impressed me most is the academic freedom in Kyoto University. There is a professor in the Kyoto University spending most of his life on the research of chimpanzee, which needs long time observation and uneasy to make a high influence factor publication. This kind of research is uneasy to continue in some other region due to fact that many of us use the IF to evaluate the outcomes of a researcher and what we pursue nowadays is the speed. However, the professor gets quite many supports from the university and become very famous. I have also heard that the president in Kyoto University does this kind of animal research as well and there is a lab observing the influence of the darkness on flies for more than 80 years. All the things told me that the professors there can do what interests them, not being worried about the pressure from the school and that make the academic freer. To be honest, I used to think the way we do scientific research have little concern about our interests and what I have been told is to follow the frontier in the world and to make the best publication. Also there are professors focusing on the hottest point in the world such as PT-1 and PT-1E, but they have chosen it by themselves, not the pressure. And after this tour in Japan I noticed that the most important thing the university should do is to protect their professors having the freedom to do what they want in academic field.

Besides, the tour also changed me a lot of the international understanding. We spent those 14 days not only with students in China and Japan but also other countries in Asia. During the talk with them, we have found that our cultures have a lot in common and there are some misunderstandings. The students here are all from their best university in their country and I also found that they all have a lot ability we should learn. For example, such as students from Korea have a great ability in oral speaking.

In the future, I think I will change my attitude towards the research and development and will have more focus on the interesting part. Also, I found myself loving the feeling of studying together with students from different culture, therefore maybe when I graduate from the university I will study in a foreign country for the further develop. As a result, this program also told me the importance to enhance the ability of foreign language as the other brilliant students there.

What I learned and what I will do

Huang Lei, Peking University

If I should choose one word to conclude this summer spent in Kyoto, I would choose “transformational” for three reasons which are what I experienced, what I gained and who I met. Thirteen days of the trip may be too short for my love for Kyoto and the friends here, but it was long enough for me to understand Japan, Kyoto University and so on.

Firstly, I would like to present my own understanding of the courses I took in Kyoto University. The course of Basic Japanese took most of the class hours, the professor is cute and warm-hearted. With his help, I have learned katakana and formed a basic understanding of Japanese. The other lectures are special and pointed. I learned about the history of Kyoto, the traditional arts and literature of Kyoto and the history of Japanese political diplomacy. The courses I took may be a rudimentary guide for me to the world of Japanese culture, but they did arouse my curiosity and interests about the history of Japan. And the lectures about the Chimpanzee Research and modern Japanese agriculture are impressionable. It would be complex to tell us, all were laymen, the deep mechanism in those researches. However, the attitude of professor towards researches affects me a lot. The attitude of patience, courage and innovation is important and indispensable for my future study and career. Studying on chimpanzee for a lifetime was the most amazing part of “Human Mind Viewed from the study of Chimpanzee”. It’s hard for me to imagine how deep the research is and how rigorous the result could be. One person only has one life. Even the cleverest use of time management techniques is powerless to augment sum of minutes in a person’s life, so we should squeeze as much as we could into each of them. The best way may be spending the whole life concentrating on one expertise. The whole trip imported a deep impression on me, and it changed me a lot. My major is advertising, which is far from the researches I learned through those lectures. After the lectures, I thought Japan is an excellent place for me to pursue further studies on it due to the rigorous scholarship of Kyoto University. In the future, I would choose one area in advertising to study deep.

To be frank, the days I spent in Kyoto make me happy, relaxed, stay away from the pressure of entrance examination. I met people here, who were cute, happy, warmhearted and close to each other. I felt the culture here, which was well-protected, local and international. I ate the food here, which was green, organic and healthy. The trip is fantastic due to what I experienced, who I met and what I gained. I will remember them in my whole life. I am at home now, but I recall the trip often. I miss the people and the culture here.

For my further study or even my future career, Japan would be an excellent nation. I could receive a good education in Kyoto University and cultivate the international attitude in the multicultural circumstances. For my major, advertising, Japan would be the Holy Land to learn more about the minimalism style. If I have the chance to work in Japan, I would take the chance without hesitation. Advertising is the career I choose now, so I would try my best to focus on it to make the best of me. I believe the attitude I learned from the rigorous researches could be enlightening for me. Becoming a useful person and making good use of time are my priority in this step. I will make unremitting efforts to achieve those goals. What I experienced, who I met and what I gained in this trip are so important and meaningful for me. I will spend my lifetime to understand them because they will have a lifetime influence on me.

In fact, it is hard for me to express all my feeling, show all my gains and describe all my experiences because of space limitation. But I will try my best to make what I want to express clear. What I experienced, who I met and what I gained could be concluded into one word which is “transformational”. After this trip, my attitude and impression on Japan changed, so did my future plan.

To sum up, my future plan would be related with Japan and Kyoto University. Given the sterling impression of Japan and the exhaustive nature of Kyoto University’s education, it would be unreasonable to gainsay my conclusion about my life at first glance. I would spare no efforts to complete their future planning and strive to do better.

Thank my alma mater and Kyoto University for giving me the chance to join in the program and change my life.

Pilgrim in Kyoto

Li Zhuoer, Peking University

As a graduate student, it's kind of hard to be touched or shocked by things or events in my life. I have never been to Kyoto, so I came here with expectation, enthusiasm and excitement. The program is over, and there were so many things happened that filled up in my mind. I feel really lucky to have the chance coming here and meet so many excellent partners and professors.

The biggest barrier for me in Japan is that I cannot speak Japanese. It's so hard for me to visit places alone, even to buy some food or do simple things on streets. I am so appreciated for the huge help from the volunteers in Kyoto University, without whom I could never find myself in Nakagyo, Higashiyama or Nara. Some of them just come here to help, and I even don't know their exact names. It might be the first and last time to meet them, which makes me grateful but sad, and reminds me to treasure the friends who help me and always stay by my side.

As we know, founded in 1897, Kyoto University has a long history and enduring traditions. It has been dedicated to furthering higher education and fostering an atmosphere of free academic exchange. Also as a beneficiary from this, I fully feel the enthusiasm of those world-famous professors, whose lectures make me learn a lot and think carefully for my academic career.

I can still remember a lecture clearly, which the topic is Human mind viewed from the study of chimpanzees. The professor, 松沢哲郎, loves the chimpanzees so much that he has a strong mind to study them and learn from them. I had never seen anyone who devoted himself so much as this professor did. He went to Africa and some other remote and dangerous places, just to observe the chimpanzees and do some researches on them. He even learns to make sounds like a chimpanzee does, which helps him easier make friends with those beloved animals. I am totally touched by his spirit and passion for chimpanzees, and I hope that one day I can find some field I am really interested in and devote all of myself to it till the end of my life.

When learning the Basic Japanese, I feel so encouraged by the Japanese professor 赤桐. Learning Japanese was so hard for me at first, however, the professor's patience and chariness finally help me overcome the fear of it.

I am interested in the Sino-Japanese relations, and I hope to understand more about that in a Japanese way. One thing that might be a pity for me is that there is no course or lecture for the relationship between China and Japan in an official way. However, it is a valuable opportunity that I can see by my own eyes and feel by my own heart about what is happening and changing between the people in Japan and China. I can learn a lot from my experience in Kyoto, even to compare the similarities and differences between these two countries.

I felt familiar and genial when I arrived at the airport of Osaka and took the first glimpse of this adorable place. I fell in love with this place and felt an irresistible impulse to live here some day. Kyoto has the magic that I can't stop imagine if I could live here and do some job I really like. I hope to do some academic researches between Japan and China, and make contributions to the Sino-Japanese friendship. This program just makes my target more specific and steadfast, that I can't wait to visit much more places in Japan and learn more knowledge and traditions here.

I am in Moscow now, and will go to Helsinki soon. I enjoy my life to feel the collisions of different cultures. Japanese politeness, Russian braveness, and Finnish restraint, different and distinctive characteristics make me think about the underlying reasons and potentials. There are many other great personalities of Japanese people, composing the unique beauty inside them and penetrating into their every life moment. However, there are still some misunderstandings about Japan and Japanese in China, because of communication deficiency and some other political factors. Some Chinese who have never come to Japan might have negative impression of Japanese, which reflects the importance of deepening the communication between Japan and China. It is of great significance to offer more opportunities for Japanese and Chinese to visit each other, understand more and correct the bias.

The life in Kyoto gave me the opportunity to realize the shining points of Japanese and encourage me to know more and deeper about Japan. I will always appreciate the experience in Kyoto and wish that I could make contributions to the relationship between Japan and China some day.

My experience and thoughts in Kyoto Summer Program

Liang Xulin, Peking University

In the 13 days of Kyoto summer program with KU students, I had a meaningful and colorful time. Kyoto University program offered us the both the chance to know Kyoto University and the chance to know more about Kyoto as well as Japan. During this program, we also had a lot of communication with students from other countries, mostly Kyoto University students, and got to explore Kyoto city and its neighborhood by ourselves, which is a precious cross-cultural experience for me.

During this program, we spent the majority of our time in Kyoto University (KU) so we became acquainted with its campus with elegant buildings and clean streets. We also got to know KU through its lectures, and our time spent with supporter students.

The introduction of KU stressed its spirit of freedom, and we did see it during our stay. Correspondingly, there is purity of academic pursuit here: we enjoyed the speech given by Prof. Tetsuro Matsuzawa very much, focusing on his decades' research on chimpanzees. Yet apparently it is not the kind of research that can be converted into economic benefits (at least in near future); its achievement is intellectual. But that this project and those similar ones are supported and appreciated illustrates this valuable attitude towards academic research. I believe this spirit and atmosphere are the ideals of many universities, including ours, and we truly admire its realization in Kyoto University.

Students of Kyoto University accompanied us in both classes and extracurricular activities, and communicated with us frequently. They impressed me as a group of well-informed, open-minded and quick-thinking fellow students. Our program covered a variety of topics, including politics, culture, science, and so on, of which KU students could usually give their own thoughts, ask acute questions and even strike a debate. One detail impressed me most is that all students are required to learn a second foreign language, and they expressed the wish to learn even more; their eagerness to learn and see inspires us to study from them.

Apart from providing knowledge about KU, more importantly, this 13 days' stay in Kyoto allowed us to have a glimpse of this country, either by lectures featuring different aspects of Kyoto and Japan, or by our own observation of it and our interaction with it while we lived here.

Kyoto summer program covered the introduction in the aspects of politics, culture and history by the lectures given by the Kyoto Prefecture and Kyoto University. From reading and seeing exhibitions I've also managed to learn basics in these areas, such as that Japan adopts a parliamentary system, that Shintoism and Buddhism are mixed here, and that Kyoto is the ancient capital where traditional architecture is well-preserved. Yet living in Kyoto, albeit for a short duration, illuminate these knowledge through shrines scattered in the city, time-honored buildings of Tang styles and other small facts.

There are a few things that strike me as what we thought we know but actually did not. One of these is Japan's state as a developed country. We usually equate it with good statistics of economy, achievements in scientific research, the power of Japanese cultural industry and so on. They are usually what we see outside the country; we do not see what is inside the country: how the city environment is managed, or how the transportation has developed. We'd known that Japanese technology is very advanced, but we did not know they've automated the distribution of fruits in 70s; we have yet to think of a system for egg-packing, but it has been a mature system in Japan. These are learnt by lectures and visits to companies. We've also seen the signs of excellent city management when we walked in the city every day. Although many streets and buildings are not new anymore, it is clean and well-kept, which implies a regular inspection and renewal. The transportation system is mature and sophisticated. A good number of lines of trains and buses covered the need of citizens, and made up a multi-dimensioned system. It is easy to attribute these to the consideration of Japanese, but we know this 'consideration' is supported by an effective administrative system and a set of advanced management ideas.

Another thing that interests me is the relationship between China and Japan. That Japan and China share a strong similarity especially in culture is a known fact. And we've certainly felt it during our stay: the Chinese characters in Japanese are extremely useful, with which we managed to know our way most of the time even if we learnt little Japanese; the ideas of etiquette and poems, albeit different from ours, are easy to understand from our viewpoint; etc. However, I've also paid attention to the difference between two cultures and I believe we've often deceived ourselves with the similarity on the surface (or the similarity advertised in our country). For example, the languages are of different origins, only characters are borrowed; the introduction of Confucianism and Buddhism does not change the cultural disparity underlying. It is common that Chinese people see Japanese as a like-minded nation, but Japanese people do not hold the same view. It is common that Chinese people pay a lot of attention to the rivalry between two countries, but Japanese people are not as interested in politics and their combativeness is imaginary. There are a lot of delusions and misunderstandings at least on the part of Chinese, either in culture or politics, which is certainly not beneficial to the Sino-Japanese relationship. Have we understood each other's beliefs, expectations and actions? Have we understood both our perception of ourselves and each other? How can the two nations build an equal, friendly, stable relationship on top of their conflicts and close connection in the past, and those in the future? These are all inspiring questions for me, and it's difficult to find the answers to them. But getting to know Kyoto and Japan is one of my original goals of participating in this program, and therefore I am glad to bring back more questions than answers because I managed to take a step toward the goal.

As I've written above, the participation in Kyoto Summer Program offered me a great chance to improve my knowledge about KU, Kyoto and Japan. I certainly had a better understanding of them, and this experience gave me more questions for further thinking. I am very interested in Japan, this close neighbor of our country, and as a student majoring in International Studies, I am very interested in the relationship between China and Japan; I would like to pay more attention to this area in my further study. If there are more chances, I am glad to visit Japan once more to further my knowledge of it.

Kyoto University Report

Liu Chang, Peking University

After this precious week, I must acknowledge that I am totally fascinated about Kyoto University and this ancient city. As a student who has already been here three times, Japan and its people can still always impress me in lots of aspects. According to the frame which has been given to us, I will conclude my report in the following four perspectives:

Kyoto University is famous for the academic spirit and high-quality of teaching. I can sincerely feel the tradition of doing research and cherish it from the depth of my heart. Before the lectures, I wonder if I will be interested in the topics because some are really distant from what I major in. For example, the study of chimpanzee for me is something I have never heard about before, also as for the food and environment issues are also an intangible field for so many complicated formations or experiments. However, being an art student learning Chinese literature, I myself enjoy the lecture so much. I am extremely motivated by the professor's enthusiasm on their research and informed of something called purity, the most important character for people who genuinely would like to delve into academia. And the property of seriousness is also one thing I cherish. When you ask questions, the professor never answer them causally but find every evidence or data or proof they can to enlighten you. From the condensed and superior lectures in KU, I really look forward there will be one day that I can study in this attractive school and do research with so many prestigious professors and students.

Here, in Kyoto University, firstly I must say that both the teachers and the students are really nice and kind to us. I want to my gratitude to all the teachers, the students and the staffs who help us not only in campus but the life in Kyoto, thanks for their sparing their time to make everything just perfect.

Talking about the daily life in Kyoto University, I am so shocked by the freedom of students and the emphasis on university. Slogans can be seen everywhere to express the willingness and inner world of students. One of them appealed me by its content which showing the protest of the local police system for an “invader” was caught by the students. Besides, the negotiation between students and school on the reconstruction is so interesting but in the meantime reflects the students’ right and the emphasis on the university.

It is really my honor to know Japanese friends here. Yu, Zikang and other people, we went to drinks, to mountains and we also caught in the rain together. The relationship of us is pretty like the heated weather in Kyoto. The international understanding has become deeper and deeper. Maybe sometimes we do not have mutual understanding but it is the same goal and enthusiasm that makes our bond tightly tied to each other.

What is more, I have a Japanese friend who was an undergraduate student in Kyoto University and right now in Yenching Academy of Peking University. I also went to his house in Kobe and had a really wonderful experience there. His house with the Japanese garden overwhelmed me but let me know the perseveration of heritage from the family. We had been to the 有馬 hot spring, climbed the 六甲 mountain and watched two hanabi together which iswas unbelievable. It was so thrilling to go across whirling circles at Naruto Strait and the sunset there leave me one of the best memories.

We really have a diverse program which make others jealous. It is really excited to go to Kyoto Government to have a meeting with officials there. The lectures are of totally different topics. We have lectures on chimpanzee, on food development, on Japanese Haikai (Literature), on the history of Kyoto University and Kyoto, on the private villas of politicians. This makes me know more about the school and the whole country. In the meantime, the Japanese courses here are really useful that for us who do not know Japanese convenient in this city. We also can have several field trips to company, to make Japanese sweets, to harvest which sounds fancy and I have a very expectation on this!

I assume the influence is quite significant for me. I was thinking about finding a job in China and got on the stable track like so many Chinese people, but after the experience here in Japan, I carefully start thinking about getting a master degree here and if it is possible, to find a job here and spend more time in Japan. I will also try to find the job opportunity here, especially the Japanese branch of Chinese companies.

To many things and feelings I really want to express, but I should stop here and finally I would again to show my thankfulness to Kyoto University and the unforgettable experience that you provide for us, thank you!

Kyoto: Laws, Legislations and Mutual Trust

Liu Xiangjun, Peking University

The most surprising and marvelous impression I have on Kyoto and Kyoto University is the reduction of laws and legislations. However, while laws and legislations seem fragile, mutual trust is likely to be the patch. Amazingly, without those limitations, it becomes a place with rational freedom, not relaxing chaos.

The most important thing for a university is not about knowledge, but about the heritage of the knowledge. The reason why people try hard to get enrolled in a well-known university is not only for its fame and reputation, but also for their thinking method and future. I smelt a great and rich sense of academic atmosphere in the campus of Kyoto University. Here in Kyoto University, people are fully

focused on the research and its heritage. That is why the research about fruit flies can last for over 60 years without interruption, even after the death of the initiator. That is why the university can raise so many Nobel Laureates. And that is why professors are willing to give lessons to students without thinking of salary. The professors' teaching in person makes the education in this university like a torch relay, which makes it possible to deliver both knowledge and thinking method to the next generation of researchers. What is more, while educational background is less important in finding a job for the ones who want to work in Japan, the few rules and regulations on academic progress make researchers more focused on their own study.

The second thing I have been surprised of is the atmosphere of freedom in this university.

The third thing in Kyoto should be the feeling of equality. The equality in the enrollment of university gives me the first impression of equality, but it is far more than that. The service can further indicate and explain the word equality. In the campus, there are emergency button and facilities to serve the disabled. When talking of equality, it does not mean the same facility for different people, but the same extent of consideration for different people. It may also be because of this contemporary understanding of equality that establishes a service society. From this point of view, equal consideration in turn affects people's thinking and contributes to a well-grounded service society. As laws are usually based on experience, when equality is rooted in people's mind, it can reflect in laws and legislations. That is why we can both see and hear the signal lamp when crossing the street in Japan.

I am deeply impressed by every lecture and company tour I took in Kyoto University, whether about food, beverage, literature, politics, history or packaging. The professors and hosts are so kind and amiable that gave us a long time of Q&A time. Those lessons are not teacher-oriented but a stage for interaction. When the stage is open for the questions, the students can be open to ask questions and learn. I am quite interested in the study of chimpanzees. It is generally recognized that we have the same ancestors. Similarly, it is reasonable to generalize that the study of primatology can inspire the study of anthropology. What surprised me most is how the professor treats those chimpanzees. They treat them like human beings, give them respect as to human beings and set tests as for human beings. It seems that he has confused the "strict" rules between human beings and other similar species. Without doubt, when one creature behaves extremely like human beings, attitudes towards them should be like those to human beings as much as possible. However, years of experience has told us that human beings are different from other species, and usually better than others. This kind of settled prejudice gives human beings a superior feeling in the animal experiment. I am quite impressed by Professor Tetsuro Matsuzawa's attitude towards those chimpanzees, as he realizes me of the saying, "all beings are equal".

The content of the program, as well as my aim in this program, is to experience. It is not only about experiencing Kyoto and Kyoto University, but also about experiencing building up relationship with people from other countries. I felt free to talk with students from different cities of China and students from other countries. I tried my best to use both my oral and body language to make myself understood. Even though I have learnt Japanese for one year, I was just like a primary school student when speaking to Japanese students. However, the language barrier is no obstacle at all, because when people want to talk, the pure willing of communicating and listening will enable people to express and understand by every means that they can think of.

It is this program that makes me realize that the precious study in the university is not only about knowledge, but also about how to learn knowledge. This understanding is based on a well-grounded service society in reduction of laws and legislations, from which the mutual trust is raised. In my final presentation, I talked about safety and mutual trust on this topic. With grey zones in laws and legislations and the lack of validity in them, mutual trust can be a good way to build up spiritual standard and establish a better and harmonious society. As I have said in my presentation, laws and legislations are far less than enough, they are not unimportant, but we can also refer to mutual trust.

Kyoto Summer School

Meng Shuoyang, Peking University

It is such a great honor and pleasure for us to visit Kyoto – the cultural capital of Japan – and study in Kyoto University. I really appreciated everyone who has put great efforts in this program.

First of all, I must say the lectures are really impressive for they cover the researches of various areas and we can see that every lecturer has got fully prepared for their speech. Kyoto University and Peking University are both top universities in own country. Recently, Peking University launched reform of the education of undergraduate students and those policy-makers attached great importance to liberal arts education, by which the university can produce elites with all-round qualities. As for Kyodai, 国際高等教育院 is the institution responsible for 教養教育 which is Japanese version of liberal arts education. The lectures at Kyodai have shown how mature the liberal arts education is there since every course (speech) is enlightening and they have broadened my horizons and provided me with different perspectives of academic research. It is necessary for Peking University to learn from Kyodai.

I am also deeply impressed by the spirit of freedom. One of the most important missions of higher education institution is to explore unknown knowledge. It does take a lot, including time and money, obviously. Nowadays, most of the higher education institutions around the world are paying too much attention to the ranking, which is mainly measured by publishment of academic research but, it is doubtful whether the numbers of publishment and ranking are tricky, since academic research may take very long time to be fully accomplished. At this point, Kyodai just gives the researchers the freedom to conduct the researches they are really interested in and let them take time to be devoted to their studies, just like the research of chimpanzee. I deeply believe this is one of the key factors that lead to the success of Kyodai. In addition, the students also got the spirit of freedom.

I have lived in Kyoto only for a week but I have inevitably fallen in love with this city. The life is not hurry here and the people are very warm-hearted. I was born in Japan and have been to some cities in Japan, but obviously Kyoto is the city where I want to spend the rest of my life. As for my future, I am going to continue doctoral degree study at Peking University and I am also considering applying for Kyodai in the future. My major is higher education and I have noticed the advanced concept of Japan in many areas, like higher education. I plan to study the higher education of Japan, including issues of governance and finance, and conduct comparative studies.

Again, I extend my sincere gratitude to both Kyoto University and Peking University for this unforgettable summer.

Reflection on U-Kyoto Experience

Miao Shujin, Peking University

I am now a student majoring in Politics and International Relations aiming to work in NGO or be a professor in the future. The trip to Kyoto University was amazing and impressing, where I encountered a group of able talents who provoked me to think. The Japanese students were so kind that it makes me feel more deeply that East-Asian people belong together: we are neighbors and we are families. Here I want to thank deeply for those students who accompanied us and helped us as we needed. Our trip in Japan cannot be so satisfying were it not them being there.

My experiences at Kyoto university were wonderful. I went to its special canteen with the “bocchi” seats, met friends from Seoul, Thailand, Singapore and other areas of the world. We had a full discussion both in an academic and personal level. Moreover, the lectures in Kyoto

University were absolutely edifying and refreshing. Here I really want to say thank you to my Advanced Japanese language teacher who was supposed to teach only South-East Asian countries. She was so kind and willing to help, not only ready to answer my endless “silly questions” but also contributing a lot for the revision of my final Japanese presentation. I still feel so grateful for encountering such a responsible and zestful teacher!

Now I would like to have a chronologically retrospective reflection on our U-Kyoto program in this summer. On the very first day, we made the courtesy visit to the Kyoto Prefectural vice-governor Yamauchi at Kyoto Prefectural Government office, where we heard a lecture of Kyoto prefectural administration. Then we visited the Kyoto Prefectural Assembly hall where we had a great experience, after which we listened to the lecture of “Human mind viewed from the study of chimpanzees”. It was an edifying class. It showed to me that persistence makes a difference and inspired me to be emboldened to do the things I love.

Next day we attended the lecture of “Current situation and prospects of researches and technologies on food, environment, and life in the world” and “Educational and research activities in Kyoto University”. I was deeply owed by the uprightness of the academic spirit here in Kyoto University.

Moreover, The Aesthetics and Sensitivities of the Japanese as seen through Classical Japanese Literature class impressed me a lot. Here are some notes I have taken:

A field of mustard blossoms

In the east the rising moon

To the west the setting sun

Are we to look a cherry blossoms only in full bloom, the moon only when it is cloudless?

To long for the moon while looking on the rain, to lower the blinds and be aware of the passing of spring—these are even more deeply moving. Branches about to blossom or gardens strewn with faded flowers are worthier of our admiration.

In this class, we also learned the names for different moons in Japanese language which seem very intriguing to me. Even more poetic was the “appreciation of the incomplete, the imperfect, and the unfulfilled.”

“...The most valued bowls for the tea ceremony are irregularly shaped, and some have gold patches here and there, accentuating (rather than concealing) damage suffered at the hands of long-ago owners. Asymmetry and irregularity allow the possibility of growth. But perfection chokes the imagination.”

It greatly refreshed my memory/sense of appreciation of ephemeral beauty and fragile beauty instead of chasing for eternity and endurance.

The lecture of Space and Politics: Politician’s Private Villas in modern Japan was in a way unexpected and did open a new door for me to understand politics. According to the lecturer, in modern Japanese political history, research focus has been on policy-making processes and political leadership. Few researchers have paid attention to politician’s private houses that have functioned as venues for policy-making. So the professor’s focus on the research of private villas sounds indeed innovative for me.

Additionally, we shared some amazing culture exchange activity and company tour with our Japanese students: we tried making Japanese-style sweets at Shichijo-kanshundo. It was a very caring trip that made me appreciate and admire Japanese aesthetics and meticulousness more.

Another unforgettable experience to note is the Nabel company field trip. Founded in 1964, Nabel was said to own employees of 152, and it boasts of annual sales of 5.8 billion yen. It not only has a head office in Kyoto with 5 domestic subsidiaries but also 2 abroad in Malaysia and Shanghai. More importantly, the egg grading and packing system as well as the nondestructive inspection system for eggs developed by the company intrigued me a lot. Most importantly, I received some precious words from the president of Nabel:

*A mountain is noble not because it is high
But because it has trees
A man is noble not because he is wealthy
But because he is wise
A man who won't learn is without wisdom
Without wisdom he is a fool
The wise loves the wise
The fool loves the wealthy*

I also think highly of his version of basic values of a Japanese Smaller Company's President:

*Early riser, the first to come to the office.
Thinking intensely about the happiness of the employees.
Sticking to the core business
Clear distinction of Public/Private*

All in all, I think Nabel is a strong and gentle company, as is said by its president "Business without morality is a crime. Morality without business is a daydream."

Last but not least, about the impact of the program on my career plans, I sincerely would like to be a professor in the future and to be able to work in an amiable and academic environment as Kyoto University.

Curiosity Matters

Yilin Shao, Peking University

The participation in this program gives me a deeper understanding of what academic freedom is really about. It means your research is out of the control of both political interference and economic pressure. Sometimes researchers may choose a certain area to study for professional purposes since more papers lead to tenures. But interestingly, Kyoto University chooses the other way. In my opinion, the ultimate and strongest motivation for a researcher is his or her pure curiosity. In fact, it is curiosity that drives human to explore fields that do not have much to do with our daily life. Utility-driven researches may achieve considerable profits in the short term, but their contributions seem little when viewed from a long period of time. We cannot deny that these researches may improve people's lives greatly, but the most fundamental discoveries and breakthroughs are usually motivated by curiosity of the secrets of the nature and universal laws.

Therefore, an essential role of a university is to cultivate and nurture that initial curiosity at the bottom of the heart of each student. Professor Matsuzawa can act as a perfect example. He himself has devoted to the research of chimpanzees and leads a team of researchers to continue the exploration. I, who only have the most general sense of chimpanzees, after listening to the lecture, find the study of chimpanzee truly fascinating. Merely igniting students' interest is far from enough. As far as I know, Kyoto University students don't have any compulsory courses. This means that they can choose the courses that really interest them. Now that Peking University has been promoting the education reform, students can gain access to courses of other departments. This can be a big step to pursue one's interest without the boundaries of subjects.

Even though the program only lasts 14 days, but we have built a strong relationship with the Japanese students who have generously helped us. Through the communication with them, I found there are lots of misunderstandings between the Chinese and Japanese. As we all know, China-Japan relationship has been very fragile and tense from history till recent times. But to smoothen the tense, the efforts of the governments are far from enough. Besides, political conflicts should not interfere

with non-governmental communication and academic exchange. As a student of international studies, I realize that international relations include various dimensions in addition to the state level communication.

This realization seems unimportant, but it has a great impact on my career plans. Once I thought being an ambassador is the most effective way to put what I have learned into practice. However, there exists a huge gap between the government and the public. The public can be easily misled by the government. Therefore, to convey comprehensive and objective information to the public plays an important role in the international society. As a result, I would like to prepare myself as a journalist of international news. This way, I will be able to walk around the world and to see what is actually happening, and the public can gain a closer look at other countries through my accounts.

Our experience at Kyoto University mainly consists of seven lectures and basic Japanese. These lectures are enlightening and cover a wide range of topics, from agriculture to classical Japanese literature, from history and culture of Kyoto to space and politics. Through these lectures, I get a sense of traditional Japanese culture from a comparative perspective. Japan has shared much aesthetic values with ancient China, but also developed its own culture to establish Japan's own identity. And I also learned the most advanced technology applied in Japan and that's where China needs to learn in the modern times. Besides, the professors' patience and generosity impressed me. They are willing to teach and are good at it. They have truly taken on the responsibility of a university professor to spread knowledge and wisdom.

The program covers a range of interesting activities, including experiencing Japan both in the ancient times and the modern times. Besides its content, the program also provides different forms to experience Japan. We have listened to inspiring lectures, and seen the historic sights with our own eyes. The following will briefly introduce the program schedule. On 8/1, we made a courtesy visit to the Kyoto Prefectural vice-governor Yamauchi at Kyoto Prefectural Government Office and listened to the lecture of Tomorrow's Kyoto, gaining a basic knowledge of Kyoto and its administration goals. We also made two company tours and did cultural exchange activities with Japanese students in the following days. On 8/9, we visited Miyama, whose beauty impressed us all. Besides, we had a great time harvesting and cooking vegetables by ourselves.

To conclude, the Kyoto University summer program has made a huge impact on me, for the process of knowing something new is also a journey of self discovery.

A rewarding experience

Yuchen Xie, Peking University

Since I came back to China, memories in Kyoto university have been in unbridled spread.

This program is composed of enlightening lectures, unforgettable visits to companies and institutions and great experiences with students from Kyoto university. Organized by the professors of Kyoto university, the lectures are of great diversity and each professor's research is the acme of their own fields. What's more, the great passion and enthusiasm towards education can be sensed in their lectures. Teaching students, instead of making a fame, is their first priority. And that's partly why Kyoto university can be the cradle of so many prestigious scientists and generates tons of salt of the earth. Besides that, Kyoto university is always the supporter of academic freedom, and I have heard many stories told by professors and students which strongly manifested this point. I was so lucky to experience the education here which deeply impressed me. The lecture about gorilla opened another door for me. Much as I may have watched documentaries about gorilla before, but I have never taken any interests of them. However, after this lecture, I find it very rewarding and fascinating to have a deeper understanding of gorilla. Based on what professor had found during his study, gorillas are in possession of many unbelievable capacities which we hardly noticed before. By observing and testing

them, we may know more about their brains, even know more about ourselves and our ancestors. Moreover, in another lecture, the professor led us to enjoy the beauty of ancient Japanese literature, which is extremely engaging. After this lecture, I was profoundly aware of the amazement of Japanese itself and make up my mind to nail it in the future. I hope one day I can read those poems without any handicap. Before this program, I have only a sketchy knowledge of Japanese. But after Japanese courses in this program, I was quite familiar with some basic daily expressions. And most importantly, I find it quite interesting to learn Japanese, thanks to the professor's teaching. During my visit in Kyoto prefectural government, a trivial detail captured my eyes. As our group of students and teachers walked into the meeting hall, we are greeted with the bows and greetings of the officers--everyone at the same time dropped the work in the hands and gave us a warm welcome. I felt a sincere respect at that time which left me with a deep impression. Moreover, we even have a precious opportunity to take pictures in the hall where the voting took place. When the Kyoto prefecture want to put the picture of us on their website, even if our face didn't appeared on it, they still sent us an email to ensure that we are agree with the exposure. By that I mean, those people are fully aware of the importance of the law and most importantly, it has been implemented strictly.

During my stay in Japan, I was totally impressed by the humanized design which can be spotted everywhere. For an instance, the toilets are equipped with the most advanced and considerate functions. It is no exaggeration to say that it is an enjoyment to use it.

With the students from Kyoto university, we paid a visit to the Kyoto art museum at the weekend. At that time, it happened to be a Dali exhibition in that museum which, undoubtedly, attracted many citizens. We seemed to be the only foreigners there. There was a line in front of the works. Everyone moved orderly and quietly alongside the line. Photo taking and eating were prohibited, and everyone obeyed it stringently.

Besides, this program offered us a great opportunity to experience the harvesting in the countryside. We harvested vegetables then cooked them by ourselves. At last we attack our meal with gusto. During this process, from their expressions and words, we can sense that the farmers are truly passionate about their work and focused on every detail.

This program not only provided me a great opportunity to know more about Japanese culture, society and education, but also motivated me to work harder in pursuit of my ambition. Only with the arduous work and the craftsmen spirit can we reach the perfection. In the future career path, I will treat my occupation with a humble heart and spare no efforts to pursue the excellence in every detail. Besides that, I also deeply impressed by the students of Kyoto university who accompanied us. They were being so responsible that they were always there when we need them. They were nothing less than warm-hearted friends and at the same time, competent tour guides.

Kyoto Summer Program 2016

Zhang Yixuan, Peking University

As a student majoring in foreign languages (Spanish Language and Literature), I've always been interested in international studies and joined programs to enhance understanding through personal contact in a social context, including Jing Forum (a joint program hosted by Peking University and Tokyo University students starting from 2005), Top China program (Chinese students and Brazilian students interchange program sponsored by Banco Santander), worked as a main organizer of the Syrian Refugee Children Art Exhibition in Peking University, and serve as the vice director of Public Relations Department in SICA (Student International Communication Association) in Peking University. Especially, I have a particular interest in Japan, partly because of the geopolitical importance of Japan to China, with deep-down attraction and influence of its culture as I grow up all these years.

Participation in this program is an excellent chance for me to gain a deeper understanding of Japanese society through multi-faceted, thought-provoking experience. Especially, we've been really lucky to attend inter-disciplinary lectures well-presented by Kyoto University professors and gain access to Kyoto University library resources. With information absorbed from books and lectures, combined with first-hand information gathered from daily observation and participation, not only can I get to construct the panorama of Japan, but more importantly, I feel deeply touched by some minute and subtle details in daily routines which strictly link to the core of Japanese spirit. When that happens, in the street, on the road, under the roof, I can feel an intoxicant moment where I can break through the ambiguity of the abstract, and set up firm linkage between the "sayings" and the "facts", with personal emotional factors involved, as company of the rational, scrupulous academic analyses. That is the moment where I get to shake off prejudices, presumptions and dogma, bravely go out of the comfort zone and make new discoveries. Breathing the same air as the locals, and experiencing every path as they do, I feel like something precious that I've neglected or taken for granted before start to show their values. That's the invaluable treasure from international exchange programs and I would sincerely thank the faculty of Kyoto University, especially professors and students in this program, for making it happen.

The program includes lectures on biology, literature, arts, history and political studies in the research fields of Kyoto University professors. After enjoying a whole lecture fully and absorbedly, we would later join the spirited discussion with professor and other students. My final presentation was about the aesthetic principle in Japanese Arts, which was under the influence and inspiration of Assoc. Prof. Shikiko Yukawa's lecture: The Aesthetic and Sensitivities of the Japanese as seen through Classical Japanese Literature. In my understanding, aesthetics means the deep appreciation and indulgence in space and time, a glorious and persistent attempt to fix the transient and live the moment to the fullest. The charms of arts are never directly related to the purpose of life, or the rational direction we set for ourselves moving forward for the seemingly "greater good", which most of us need to gain a sense of security or mundane happiness. The life force constantly catches us up and thrusts us back into the whirlpool of want and need, the normal routines and guidance that we've been accustomed to. But we all need a sense of sublimation for our souls. We need to feel something that not only makes us away, though for a short period of time, from the burning self-consciousness and exhausting desires, but more importantly, provides us with what seems "larger than life".

We also have elementary Japanese language class for six hours and practice oral ability after class. The study of language is quite important to the enhancement of aesthetic appreciation of literature and a step further, the understanding of Japanese distinctive cultural identity.

We have the great pleasure of joining the well-organized field trips, to the Prefectural Assembly, to the sweets shop, to innovative companies, etc. During our free days, we were lucky enough to have the company of our Japanese counterparts to enjoy what the city has to offer. We shared great moments with students from Taipei, Hong Kong and Seoul. Together with our Japanese counterparts, we examine our mutual perceptions of each other in a vivid context, to provoke insights and refresh our own medieval, distorted opinions, as we know that actions must be founded on accurate knowledge about one another. As university students endowed with rich educational resources, we are obligated to cherish the opportunities, improve our thinking, and try to exert influence on people we can reach, as part of the grand common goal of boosting understanding and trust in Northeastern Asia.

This program further helps me build up confidence, follow my own passion and be consistent with it. I've long hoped to study the law, in a JD program, for my graduate studies. International law would be my pursuit, so this experience would be the start of a new chapter as it helps increase ability in this regard. During my stay, I read a book borrowed from Kyoto University library: the Making of Northeast Asia.

"If the Northeast Asian trio (China, Japan, Korea) actively collaborate, they could become the catalyst for a new global order-one of the few potential challenges to US global hegemony. If the trio finds itself in conflict, its struggles could destabilize Asia, and perhaps the world. "Northeast Asia

holds, in short, a potential to reshape the world as we know it that is matched only by uncertainties in the Middle East.” I will continue taking effort the related field with the well-cherished memories from 2016 Kyoto University Summer Program.

I believe a summer program like this one would provide fantastic multi-directional learning experience for the study of the corresponding regions. To examine theory in a proper context and let the flow of useful, nutrient information enrich our souls, it’s important to cherish the opportunities of discussing with professors in their lectures, enjoying the library resources as well as spending quality time with participants with other regions. It is a form of experiential learning, with deep reflection and introspection. Through total immersion and active reflections, we can enjoy the enhanced acumen of observation and self-empowerment. Thus I will always bear the mind and savor the fulfillment of turning pages of books in the blissful tranquility of the morning, walking carefree and content along the river bank, and the beautiful dusk on the way back from school.

AMAZING DAYS, AMAZING GAIN

ZHAO TONG, Peking University

The two weeks in Kyoto is one of my best experiences ever. Thanks to Kyoto University, we took five very interesting lectures, we visited Kyoto Prefectural Office and Kyoto Prefectural Assembly hall, we went to basic Japanese classes, and we had company tours and a very nice field trip.

During this summer program, one of the most amazing parts is the wonderful lectures given by professors from Kyoto University. To be honest, I really hope there could be more. I think all of us are totally impressed by Professor Matsuzawa and his study of Chimpanzees. First, I’m really moved by his great enthusiasm for his study. He loves his research not because it can bring him big benefit, but because he has huge interest in it. That’s the spirit of academy that I learn. Second, his research methods are very special and original. Typically, researchers make experiments in lab and observations in field. Professor Matsuzawa, however, does some laboratory experiments and participant observations. Like, he did some participant observations of the chimpanzees in his laboratory in the assistance of the mother, instead of isolating the baby chimpanzee. That’s the innovative research methodology that I learn. As for the outcome, I start to know that chimpanzees live in the world of here and now, which means they are not anxious about the future, so they never become desperate. We humans do have anxiety, but we can have hopes too. That’s one of the biggest differences between chimpanzees and humans, which makes me appreciate all the emotions we can have.

Other lecture that makes a deep impression for me is The Aesthetics and Sensitivities of the Japanese as seen through Classical Japanese Literature by Associate Professor Yukawa. From her lecture, I learn some basic knowledge about Japanese poetry and aesthetics. I was told that wind, flowers, the moon and birds are the four main themes of ancient Japanese poetries. Because at that time, agriculture was the center of life, so everything about climate played a vital role. By reading some beautiful poetries, I learnt to appreciate the unparticipative, incomplete and ephemeral beauty. In another lecture, Kyoto: History and Tradition, I learnt a new approach to understand traditions. Associate Professor Niels van Steenpaal taught us about invented traditions, which are invented to serve the Nation-state. He also pointed out that a city doesn’t have to be modern to be successful, which I totally agree with.

Not only the lectures and the Japanese classes, but also my after-class experience in Japan arouses my interests in Japanese culture. There’s one I really want to share. Once I went to Nijo Castle in Kyoto in the afternoon between two classes. There I knew that it was Tokugawa Shogunate’s residence in Kyoto and also where The Tokugawa family gave power back to the emperor. And a few days later, when I visited Osaka Castle which Toyotomi Hideyoshi built and lived in, I found that it was the Tokugawa that killed the Toyotomi and got the power. Thus, the two separate points in Japanese

history are connected in a line and this line is the first vein of my Japanese history knowledge. I truly like this way to discover and study something new, by exploring the museum and historical site.

All these above made me very interested in Japanese culture and history. Since next academic year will be my last school year and I have already taken all the credits required, I can select some courses not related to my major but with my interests in. So I plan to take some courses about Japanese literature or history. What's more, Public Japanese class is always very popular in Peking University. Maybe I should also go to this class in order to keep studying Japanese.

The other parts of this program are also very amazing. We visited this small local company namely NABEL. Their service is about automatic egg packing. Now they are very successful and rank No.2 in this area of world. Instead of extending their business range, they put their focus on what they are actually good at and make unremitting efforts to pursue first. Their CEO also told us that Japan has most companies with history of 2000 years or more in the world. The spirit of concentration of Japanese companies impressed me a lot. It reminds me of my own career choice. Actually for a long while I'm kind of confused about what kind of job I should do. These days, more and more people choose to work in an investment bank or a private equity fund, where they can get really good pay. But my major is law, so being a lawyer after graduation is more suitable for me. Should I have a quick learn about finance and apply for jobs about this or insist in my own major and try my best to be a good lawyer? From what I learn from NABEL, one should insist in their strength and pursue excellence. Like they say, a mountain is noble not because it is high, but because it has trees. One should do or learn things as better as he can, not as much as he can. So I think, when the next semester comes, which by the way is just in a few days, I would apply for jobs regarding law and stick to this road.

My gain from this program is way more than these. I don't think I can list them all even if more words are allowed, because many of them are invisible. They are deep in my heart, shown in my behaviors and reflected in my mind. I cannot express my appreciation enough to Kyoto University, all the teachers and friends I know during those days. I could never have imagined a summer program like this. It's really amazing days and I got really amazing gain.

Impressed by Kyoto

Zheng Jiarui, Peking University

It's a great honor to have the chance to take part in Kyoto University's Summer Program. We spent unforgettable two weeks in Kyoto and explored the beautiful city with new friends. There were a lot of things that touched me deeply and motivated me to think and change. And all the people I met, all the streets I went along and all the books I read gave me better understanding of the country and myself.

During the program, we had basic Japanese class, listened to lectures and visited the government and companies.

I am so lucky to have listened to the lectures about Japan's history, culture, literature and politics given by great professors, from which I learned more about how Japanese people understand their past. But among all the lectures, the one that shocked me most is that given by professor Tetsuro Matsuzawa about chimpanzees. As nowadays fewer and fewer people have the enthusiasm to devote their full life to the field they love both in and out of universities, professor Tetsuro Matsuzawa showed us his insistence and academic pursuit. It is easy to get to know a chimpanzee, but how about treating them like family members for one year, ten years and even for the full life? There is nothing about SCIENCE or NATURE papers, nothing about fame or money. It's only because the beauty of nature always attracts people. I can feel my tears in eyes when he howled like a chimpanzee. He taught me how to be a good researcher and how to stick to my initial dream and never be lured.

An important reason why I came to Kyoto is that the city, as the ancient capital of Japan, always attracts me for its unique history and culture. As I major in human geography and urban planning, I am always curious about how ancient city grows as time passes by, how the image of city changes during years and how planners balance culture protection and the city's development. Besides architecture and construction, I am more interested in the city plans, the laws and the procedure to decide the future of the city. Its publicly accessible traditions found increasingly recognition as an important resource. Yet, the modern development of a city of nearly one and a half million inhabitants is also required. It seems to face the similar challenges as the city of Beijing and Xi'an in China, which worth talking about.

Thus, I think it is important for me to make full use of this chance to learn more about Kyoto's historical protection, urban planning and industrial organization. After reading the materials in the library and talking with professors in Kyoto University, I got some points about the protection and reconstruction of ancient cities. I think Kyoto do well in some parts. Which impressed me most is that people seem to live in their history and traditional culture. Kyoto is not a tourism destination but their own life. Then what should we learn? First, being respect to traditional culture means having it in your daily life. It's always a trade-off of modern lifestyle and historical heritage. Second, it's better to let the residents decide their environment. They need more than personal memories or tourism cites for the old time. Third, community is the unit for urban planning. We should combine "history", "environment", "people" and "culture".

After I came back to my hometown, Xi'an, Shaanxi province, I interned in a project of Tongguan ancient town reconstruction. The town used to be one of the most important pass in Chinese history but was ruined in the 20th century. During which I got better understanding about what I experienced in Japan. Even though it is designed and constructed by real estate company, the core of the town is culture. I think it is duty for us, urban planners, to do research and help keep our past. I hope I can devote myself to the career one day.

To be honor, I fell in love with Kyoto when I first met the city. It is clean and clear everywhere. No litter on the street even though only a few trash bins can be found. People are so polite to each other that I say "thank you" and bow many times every day. Bus drivers will say "thank you" to every one when they get off. The waiters always smile brightly. People would like to come out of their way to help as long as you need. The respect and kindness of people really impressed me.

We built good relationship with students from Kyoto University, National Taiwan University, Chinese University of Hong Kong and Yonsei University. The program provided a chance for us to get to know people from different places and background. We talk about our academic research, our campus life and share our feeling about the new journey. The friendship will last for long.

Thanks to Kyoto University and the professors, the summer program will be a great treasure in my life. It influenced me in many aspects and opened up more doors for my future.

My Kyoto Adventure

ZHENG YUAN, Peking University

Having finished my two-week study in Kyoto University, I still remembered the first day I landed on the field nearly without any sense of the unknown journey later on. Everything around seemed unfamiliar but was anyhow what I needed to deal with by myself. Since we were given the schedule on the first campus day, I was surprised by the variety of lessons arranged for us foreign students at that time. There were even some topics I have never heard about before just like research on chimpanzees, the effect of politicians' private villas on political decisions and so on. Therefore, my heart was full of curiosity as well as expectancy at the very beginning, looking forwards to learning something new through those lessons.

However, what I experienced the deepest after finishing the lessons was professors' devoted attitude towards academy life rather than some specific research knowledge. For instance, I couldn't even imagine someone like Prof. Tetsuro Matsuzawa spending most of his lifetime with groups of chimpanzees in order to know more about the species before. More importantly, Prof. Matsuzawa treated chimpanzees as his friends rather than experimental observation objects, even raising baby chimpanzees as if they were his own children. It was unforgettable that at the end of lecture, Prof. Matsuzawa simulated the howls of chimpanzees then and there, transforming the timbre and the pitch continuously to express different kinds of emotions. So devoted and vivid his imitation was that everyone in the class clapped wildly for him. After then, Professor Han told us that comparing to be a veterinary in Japan, it was seemingly not worth spending time in lab as an animal researcher because of the heavy burden without equivalent financial income. According to Professor Han, it was the enthusiasm towards academy life that motivated them to remain in campus and devote themselves entirely to science without hesitation. I was also moved by the spirit of pursuing one's own interest and developing it into career, which demonstrated that the relationship between interest and career isn't always contradictory. Therefore, no matter what job we are going to do in the future, only by catching it according to our own favor and enjoying the job itself could we gain the sense of happiness rather than psychological imbalance from meaningless comparisons with others. I think this is what changed me most on the attitudes towards my life and study.

What's more, the special experience of studying abroad also improved my understandings towards relationship between class study and life practice. Before my trip here, my recognition of Japanese culture mostly came from literature works I have read as well as cartoons and films I have watched. Since my own major study requires a large amount of readings on worldwide literature works, my former knowledge even imagination on Kyoto city was influenced deeply by 古都 written by 川端康成 as well as 金閣寺 written by 三島由紀夫. In those works, Kyoto was described as a city storing traditional Japanese culture since there was a long history for Kyoto to serve as the capital city. At the same time, however, authors also felt confused about the gradual disappearance of some customs ever existing in Kyoto. From then on, I have been looking forwards to experiencing the city "clipped between tradition and modernization" by myself. During my study here, contact with local students did change my mind and give me a new inner image of Kyoto, even Japan. To begin with, people here were all friendly as well as warm-hearted. No matter when and where we met difficulties, we would get hands from strangers despite the language barrier between us and the local. Afterwards, Japanese people valued the dignity of strictly obeying social orders thus making everything well-organized. However, we couldn't view the situation as a symbol of loss of vitality since it reflected the common respect towards individuals and could be concluded into "care about human" which was always praised highly in Japanese society. Finally, Kyoto was truly the city where traditional heritage and modern lifestyle combined together, however, nearly without any contradiction. Life in Kyoto comforted residents well even those coming for a short stay would easily fall in love with the convenient life here. Besides convenient traffic system and highly-developed service industries, we were supposed to notice the historical heritages which were protected well in Kyoto. We took a round visit to temples and shrines located at every corner of Kyoto and even participated in a local traditional festival. When seeing boys and girls in kimonos wondering around the well-reserved ancient architectures, we could also feel the vitality and accessibility of spiritual traditions. I learned about a city from literary descriptions, but only when visiting it by myself could I come close to the true face of it.

Since I have originally decided to transform my major to Journalism and Communication in my future study, what I learned here encourages me to chase my academic interest even career planning bravely especially when most of my families doubt my dream of being a journalist. The happy face of Prof. Matsuzawa when simulating a chimpanzee impressed me a lot and I recognized that was the kind of appreciation rooted deeply in his heart. Besides, if possible, I would like to be an international journalist in the future since only the experience itself gives someone sense of reality towards the world he is living in. Learning from books is always unable to replace the practice in real life and I am eager to explore the unknown by myself.

At the time I applied for the summer program, I was confused if it was worth spending a two-week vacation in a foreign country especially when facing the pressure of entering a higher school. But now, thanks to my persistence at that time, I know what I learned here deserves all the efforts I have made.

My Unforgettable Experience in Kyoto University

Sit Man, the Chinese University of Hong Kong

This fantastic program has taught me a lot. It not only makes me know more about the international relationship and the cultural differences from countries to countries but also enriches my understanding of Japan in political, social, cultural and academic aspects.

In the second day, we visited Kyoto Prefectural Office and the assembly hall there. I found that the structure of the hall was so similar to the legislative council of Hong Kong but the aim of the office is so different from Hong Kong's one. The previous one hopes to construct a Kyoto city for everyone's happiness but the latter one still stagnates at power struggle and wealth disparity issue. It means Hong Kong comparing to Kyoto has a longer path directing to a comfortable city for everyone.

Then we had a lecture called "Human mind viewed from the study of chimpanzees" provided by Professor Tetsuro Matsuzawa, a very famous researcher in chimpanzee study. This lecture made me re-think the relationship between animals and human beings and I was surprised by the special ability of chimpanzees. But what impressed me the most is the professor's research life that was only supported by his enthusiasm.

In the third day, we had a lecture called "Current situation and prospects of researches and technologies on food, environment, and life in the world" provided by professor Naoshi Kondo. Again, I was surprised by Japanese technologies and their effort to pursuit perfection.

However, on the fourth day, I changed my mind as another scholar called Professor Shikiko Yukawa introduced the aesthetics and sensitivities of Japanese to us and told us that the Japanese also pursuit imperfection, she also rose some classical Japanese poetry such as waka and haiku as evidence supporting her idea.

In the fifth and sixth days, the professors introduced the history and culture of Kyoto and analyzed the relation between politician's private villas and their political contribution respectively. This broadened my views and reminded that Japanese government really put lots of effort to preserve the cultural heritages and these heritages also support the researchers' work nowadays.

We also had four Basic Japanese lessons. As I haven't learned Japanese before, it was very difficult for me to remember the pronunciation of the words and sentences. This really depressed me and on the other hand, it aroused my interest in learning the Japanese language.

Apart from the lectures and language course arranged by the University, I also visited many temples and shrines in Kyoto. To be frank, as a Christian, I have refused to visit these places. However, when I consider them as cultural heritages, I became so willing to visit them. I have visited so many temples and shrines such as Heian-Jingu shrine and Rokuonji temple. I tried my best to understand the histories of the architectural buildings and I was also interested by the different architectural styles between temples and shrines. And finally I got the reason, the ancient Japanese worshiped two kinds of creatures, one is Buddha and another one is the gods of Shinto religion which is local religion in Japan.

As a history student, I would not let myself miss the opportunity to visit the museums in Kyoto. Among several museums I have visited, the most impressive two are Kyoto National Museum and Kyoto Municipal Museum of School History. Visiting museum was an enjoyable activity to me, I can immerse myself into the historical events whole day. It let me substitute into different historical figures and think the reasons why they implement the policies. In Kyoto National Museum, I was amazed by many beautiful kimonos, they reminded me of the words said by Professor Shikiko Yukawa – "The Japanese elements are wind, moon, flower and bird", but for kimonos, according to the introduction of the machine, their elements include wind, flower, snow and moon. They are so similar and both of them represent Japanese culture.

Before I came to this university, I supposed the lecturers and students here should be aggressive and indifferent. However, I found I was totally wrong, they were so nice and considerate. They guided us to explore the university and Kyoto cities, to let us know the culture behind the architectures, to introduce the local conditions and customs, to remind me that what I confuse is more than what I learned.

This short but brilliant experience in Kyoto university will absolutely be the most unforgettable memory in my life, I hope I will have another chance to experience senior study here in the future because I clearly understand that Kyoto University provides the future bright stars with opportunities to embrace their differences, to share their lives, and thus to generate something new. Moreover, this program has strengthened my dream to be a secondary teacher who can inspire the students just like what the professors had done for us!

Re-exploring Kyoto

Chau Hoi Ching, The Chinese University of Hong Kong

Japan is often perceived as an ideal spot for tourism and vacations. Especially for Kyoto, it is a place that full of modern and historical architecture and fascinating designs. It is an open secret that people love to travel to Kyoto during their vacations. When I depart on July, I even did not know the exact location of Kyoto University. However, this trip provides various perspectives of Kyoto, which made me perceive Japan other than a tourist spot.

We had five lectures about liberal arts subjects in Kyoto University. The professors came from different departments, and they had their own fields and interests. We have attended an introductory lecture about chimpanzees from Professor Tetsuro Matsuzawa, lecture about food, environment and agriculture industry from Professor Naoshi Kondo. We also understood more about Kyoto from history, art and relations between space and politics from Professor Shikiko Yukawa, Professor Niels van Steenpaal and Professor Souchi Naraoka. I personally study history, meaning that these topics were new for me. Although the lectures were around two hours, they really inspired me to think how humans' lives can be improved in other ways. Professor Niels van Steenpaal's lecture talked about Kyoto's history and Japanese tradition. He argued that people should differentiate between tradition and memory. People often recognize Kyoto as a historical city with traditional rituals and architecture. Yet he argued that lots of so-called tradition were merely borrowed or invented due to environmental changes or commercial reasons. Eventually people took it as part of the history of Kyoto. The lecture prompted me that we should never judge history in a single way. Instead there are histories of the past, and we should evaluate the past in numerous ways.

On August 9, we went to visit Miyama Town. It was amazing to see the thatched houses in this ancient town. The tour guide told us that the roof of each thatched house is repaired every twenty years. Kyoto is long famous for its local vegetables, which is called Shojin-Ryori. We have picked spinach, carrot on our own. At last we even cooked them by ourselves. As being a girl grown up in a city, I would never imagine what a farmer's life is like. We also went to Shichijo-kanshundo (七條甘春堂), and made Japanese-style sweets with Kyoto university students. Once I started to pick up the sweets, I immediately understood that why Japanese sweets are expensive. Not only they were hand-made, but they also had detailed and qualified decorations. On other day we visited a local SME called Nabel company. I really appreciate by the fact that the CEO of Nabel company Kunio Nambu, actually welcomed us in person. He even gave a presentation about history and career plan of Nobel company. I am so surprised at the same time flattered, when he gave us his business cards, and thanked us to be here. Mr. Kunio once said that, "We are not trying to make the biggest company, but the best one."

One thing impressed me the most is Japanese's passion and persistence for their lives. Many people might enter universities just to seek a high-paid job. Some would choose a major in order to get a secure job, rather than seeking their dreams. Yet attending the Kyoto University's lectures, lots of professors really focus on their passions, instead of following others' paths. Professor Tetsuro Matsuzawa spent his whole life studying chimpanzees, not because it will bring him fortune but merely based on his personal interest. Professor Naoshi Kondo studies agriculture industry due to his family background and passions, and he hopes to contribute the local agriculture industry. In Hong Kong, we often achieve something for our own sake, but not for happiness of others. Yet for Japanese, their motives are simple and straightforward. They merely want to study what they love. Majority had done the same things, but only those persists succeed. I think this life philosophy is very inspiring for my future career.

Meanwhile, I particularly enjoyed cultural exchange between students of Hong Kong, Japan, Beijing, Taiwan and South Korea. We often talked about differences between each place and university. And it is surprising to know that most of us had a lot in common, in terms of campus life, youth culture and so on. I remembered I had conversation with students from Kyoto University, Peking University and National Taiwan University. We talked about our city, students' daily lives and even daily expenses. It was such a treasurable experience for me to comprehend their concepts of values, as well as stating my thoughts and doubts about them.

Although the summer school only lasts for fourteen days, it deepened my understanding of Kyoto and Japanese. I would like to take this opportunity to thank Kyoto University. It was such a treasurable and fruitful experience for me to explore Japanese culture. Not only had it provided a basic knowledge of Japanese, but also wide varieties of subjects I have never encountered before. I would also like to thank Kyoto university students for accompanying us throughout the trip. We even became friends, and still keep contact through social media. I will always cherish the time we spent together.

Invaluable experiences in Kyoto University

Kwok Ka Man, The Chinese University of Hong Kong

Participating in the two weeks summer program organized by the Kyoto University, I gained a lot of treasurable and unforgettable experiences and memories which influence my academic studies.

There were many different activities held during this program, including a variety of lectures and out-of-school activities. Attending the lecture, “Human mind viewed from the study of chimpanzees” provided by Professor Tetsuro Matsuzawa, I have learnt the differences and similarities between human beings and chimpanzees. I greatly admire Professor Matsuzawa, who is so enthusiastic to study chimpanzees that he pays a lot of efforts to learn how to communicate with them. It is so memorable to see the Professor imitating the sound of a chimpanzee. Not only did I enjoy the lecture of chimpanzees, but also the lectures on “Current situation and prospects of researches and technologies on food, environment, and life in the world” showing me many new and unprecedented technologies used on agriculture; and the lecture called “The Aesthetics and Sensitivities of the Japanese as seen through Classical Japanese Literature”, which grants me the first impression of classical Japanese literature. Motivated by these lectures, I would like to choose some subjects which are not related to my major, particularly science and literature, as I find them interesting and helpful to widen my horizon. Taking part in the lecture of “History and culture of Kyoto” giving me understanding on Japanese traditions and information on the modernization of Kyoto as well as the lecture named “Space and Politics: Politician’s Private Villas in modern Japan”, which provides me a chance to acquire knowledge on famous Japanese politicians and the developments and functions of their villas were the most enjoyable events for me, as a student studying history. I find Japanese history attractive after these two lectures. Yet, I only have some basic information on the history of modern Japan, so I would like to take the course teaching both ancient and modern Japanese history in my home university in order to develop a more comprehensive understanding on Japanese history. In addition, joining the basic Japanese class in most of the school days, I can simply introduce myself in Japanese and remember some Japanese vocabulary. However, it is quite difficult to memorize all the Japanese words in such a short time. If I get a chance, I really hope that I can continue studying Japanese in my home university so that I can chat with my Japanese friends I made during this program in Japanese. Moreover, after attending the lecture on the introduction of Kyoto University, I understand that academic freedom is of vital importance as it facilitates different kinds of research being developed not because of profits or any other aims, but because of the interests and motivation from the researchers.

Extra-curricular activities are also the focused part in this program so as to let student experience the Japanese culture. Thanks to this tour, I have done many things that I had never tried before I came to Kyoto. It was an absolutely impressive moment for my first time to make Japanese-style sweets and cook the tempura after harvesting. Additionally, learning to pound the mochi was also a haunting experience as I have only seen it through animation before.

This program becomes valuable in my life not only because of the academic lectures and the cultural exchange activities, but also the experiences I gained in Kyoto University. I recognized that many Japanese students participating in this program are determined to become a Master or a Doctor, whose attitude inspires me a lot. I have not decided whether I should receive postgraduate program after finishing my undergraduate studies at this moment. Nonetheless, positively influenced by their enthusiasm to learn, I started thinking of my future, especially on the issue of taking a postgraduate program.

Furthermore, the cultural differences I experienced in Kyoto University, which is also worth remembering. The western style campus is very appealing for me because almost none of the architecture was built in the style like Kyoto University in my home university. What is more, I got a special and funny experience as the campus is so big that my classmates and I were failed to reach our

location before one of the lectures. Although it is tired for us to walk around such a big campus under the hot weather, I enjoyed the atmosphere of the university very much. When I walk around the campus, I realize that bicycles were parked everywhere tidily. It is quite interesting to me as I travel around the campus by school bus in my home university, but Japanese students ride their bicycle for transportation, which is a big contrast for me. Last but not least, it is also an unforgettable experience to dine at the university canteen. The food sold at school is cheaper than that outside-school, it is blissful for me to spend only 400-500 yen to buy a tasty Japanese style lunch!

In conclusion, all the experiences I got during this summer program are extremely precious. I learnt more on Japanese culture and I made friends with Japanese these two weeks. This is an influential event in my university life as I have decided to have further studies on Japanese history and Japanese language. I am so thankful that I have got a chance to come to Kyoto University to join this summer program. I hope I will come to Kyoto again in the coming future!

Uniqueness in Kyoto University

Chang Shih-Lin, National Taiwan University

Kyoto is nothing short of wonderful in my second visit to this beautiful city. Visiting Kyoto as a participant of Kyoto University Summer Program is memorable which made me have a totally different vision on my college academic studying plan as well as life. During 2-week period, I took a couple of inspiring lectures. In the lecture “Human mind viewed from the study of chimpanzees” given by Professor Tetsuro Matsuzawa, not only did the highly-developed immediate image capturing ability of chimpanzees amazed me, but also Prof. Tetsuro Maturawa’s enthusiasm for chimpanzees set an example of pursuing dreams for me. After the presentation, I started to think what is the very thing that I love, and I am willing to spend a great deal of time, sacrifice lots of things without hesitation engaging in it just like Prof. Tetsuro Maturawa does.

On a free day, I traveled to Osaka. Near the Port of Osaka I ran into a street performer doing juggling. He is a young man at the age of about 25. The thing caught by my eyes was actually his sense of humor and concentration on performance. Through one-hour performance, he never repeated the same tricks. Also, his concentration brought out his confidence which made the show exceedingly entertaining. I had never seen street entertainer like this before. Both Professor Tetsuro Maturawa and the street performer taught me a precious lesson about passion and determination. Therefore, as the summer program finished, I promised to myself that I will find the thing that I truly love. Apparently, it wouldn’t be accounting, so I chose various subjects that I was interested in, inclusive of architectural construction, economic history, general biology and linear algebra, in the course enrollment so as to dig out my enthusiasm. This is the biggest difference I made after the program. I was delighted to have a broader and deeper view on my future life.

Another thing that impressed me a lot was the freedom of speech in Kyoto University. It was not so long for me to realize that Kyoto University is quite a character. The freedom in Kyoto University was anything but superficial, so professors don’t have to publish papers periodically, and the spirit of the school is to help people to pursue what they really want. As a result of the atmosphere, I think students and professor in Kyoto University tend to have more independent thinking without interference of worldly norms. To be honest, during my first year of college, I didn’t have much motivation to gain knowledge. I didn’t know what I need and I really want, and I even hadn’t deeply contemplated upon thesis issues. Mostly, I blindly followed others steps to take courses, but it was in fact so dangerous and a waste of time. Listening to some people’s life stories in Kyoto, I had made up my mind to turn around.

In addition, students from China, Korea, Hong Kong attracted my attention a lot. In the classes, they were not afraid of raising questions, and some students even “fought to ask questions” immediately after the professor opened to questions.

According to all kinds of questions they brought in, I could imagine the different thinking systems of each individuals, and that, indeed, surprised me. Some classmates’ language proficiency was amazing as well. The girl from Singapore and is studying in Yonsei University now was capable of speaking fluent English, Mandarin, Japanese, Korean, Malay, Singapore-style Chinese, Singapore-style English which greatly shocked me. Many of participants could also speak 3~4 languages, and that was quite interesting to me. Mastering a language is the easiest but most important way to understand a culture, so I was so jealous of them and set a goal for myself to learn Japanese hard in order to understand Japanese culture more. We had lots of fun by sharing mother languages of each person during the meals. What even more interesting is that people came from different part of China spoke different dialects. Some dialects sound just like a foreign language for other Chinese students. To give an example, I live in Taiwan, so when I spoke Taiwanese to students from China and Hong Kong, they almost couldn’t understand any words I said. It was such a big impact on me, and reminded me of how wide the world is. I shouldn’t confine myself on the little island, because there are always fresh things to discover in the world.

There were more unique experiences in Kyoto University Summer Program. For the first time in my life, I pulled out carrots and cooked them on my own. It was a special kind of carrot that is thinner and more strong-tasted compared to the common one in Taiwan; furthermore, I was deeply touched by the concept of “beauty of incomplete” lectured by Prof. Shikiko Yukawa, and know much more about aesthetic perception and background of haiku; I learned Japan is actually not a nation that put much emphasis on statism as well. All the people, lessons, scenes in Kyoto were new as well as meaningful to me. They pushed me to embrace my life and make it more colorful.

My Life in Kyoto

Chen Chih-Kang, National Taiwan University

I feel really glad to join the summer program this time in the city of Kyoto.

Among all the encounters in Kyoto, I will take those friends I made the most precious experience during these two weeks.

I met the students from the Chinese University of Hong Kong soon after I arrived at the Kansai Airport. On the way together to the hotel and the two weeks afterwards, we had a lot of conversation. We talked about our school, our life, our environment, and the history of our hometown. We even tried to learn each other’s local languages, Cantonese and Taiwanese. It is an amazing experience to know Hong Kong more deeply in a foreign city, Kyoto.

Since that most of the students in this program speak Chinese, the two students from Korea became obvious. One of them speaks great English, good Japanese and no Chinese, while he could be the one I talked the most with in all the students. Sometimes, with one or two students from Peking University, we discuss about the situation on Korean Peninsula, the relationship between Taiwan and China, and our politic and society. After all, we are all glad to represent our country, and enjoying the chance like this to communicate with the friends from different cultures.

Due to the fact that the number of the students from Peking University is more than the total number of the other three universities, there seemed to be an invisible wall between us and them, at least in the first few days. Some of us from Taiwan even hold an emotion as a kind of wariness toward Chinese students for some complicated political reasons. However, during these few weeks, when we were chatting with each other, it seemed that we have been worried too much about it. We even find there is

somewhat a big difference between how we imagined each other's life and how we describe our experience by ourselves. Even the two countries and their government might take each other as a potential opponent, it does not mean that the students from these two countries couldn't try to understand each other. In my personal opinion, it is really a good experience to have a chance to communicate with the students from Peking University.

On the other hand, there are dozens of local students from Kyoto University joining with us in this program. They not only perform as the supporters in the lessons, on the holidays, they act as our friends and guides leading us to discover the colorful history and the dynamic nature in Kyoto area. We chat a lot in these days, despite the culture backgrounds, I am surprised by the similarity between us. We both hold an indistinct objection toward the future, while we both share a same, deep concern on the human society. Some of them come from Niigata or other places in Japan, there are even students lived in Osaka and taking train to Kyoto every day. However, they still come to us almost everyday, attending our class and arranging the interesting events for us. In my opinion, without these classmates from Kyoto University, Kyoto couldn't become such a beautiful city like the one I experienced during the past few weeks.

On the lessons and the life in Kyoto University, I am impressed by the lectures provided by the Kyoto University, especially on the subjects about Japanese literature and the history of Kyoto. That is a different and unique experience to learn these things related to Japan in exactly Japan. In addition, beside the lectures, I also enjoy the short talk with Professor Niels van Steenpaal and Professor Yukawa Shikiko after the lecture. On the other hand, I major in history in National Taiwan University, I am interested in the East Asian history during nineteenth century to twentieth century, especially on the relationship between Japan, Ryukyu and Taiwan. Due to it, I have had a meeting with the Professor Komagome Takeshi, who research on the history of Taiwan under Japanese Empire rule. During the meeting, we discussed some interesting issues on the rule of the Japanese Empire on Taiwan and Korea. Despite I could only speak Japanese in the speed which is not fast, Professor Komagome was still so kind to discuss with me around his research topic and my interesting parts of the history. During these few weeks, I completely enjoyed the academic environment in Kyoto University. If I got a chance, it will be an honor and a very good choice to study here for me after I graduated from National Taiwan University.

Besides, not only the university, the life in Kyoto city also amazed me a lot. For example, sitting on the bank beside the Kamogawa River and chatting with friends, wandering around old temples like Toufukuji by oneself and reading novels there, or even go climbing the Inari mountain around Fushimi Inari Shrine with my friends at night, enjoying the night view from the 500-meter-high mountain and the comfortable gentle breeze in the autumn night. It seems that I have finally understand the reason why there were so many philosopher, poet and scholar in this city. In short, Kyoto is a good city for a person to think. To me, Kyoto is really one of the best places to study.

Finally, I would like to thank to Kyoto University and Kyoto Prefecture, provided us this amazing chance to experience this fantastic place and make these good friends. It is a unique experience for me to encounter different students around Eastern Asia, understand the difference and the same place between us.

When the five students gather again after return to Taiwan from Japan few days ago, talking about our trip in Kyoto, we all consider the two weeks life in Kyoto this summer must become one of the best memories in our university life.

The Days in Kyoto

CHOU KUAN-CHENG, National Taiwan University

Before visiting Kyoto University, I watched the movie KAMOGAWA HORUMO. In this movie I saw one of the dormitories, よしだりょう, in Kyoto University. It is my first impression of Kyoto and it is also one of my must-see spot in the campus. During my days in Kyoto University, I have found out some interesting things around the campus. First of all is the architecture in the campus, the design of Clock Tower Centennial Hall is similar to the architectures in my university, National Taiwan University. Both universities are imperial universities before World War II and most of the buildings in NTU build by the Japanese. I have a particular feeling when I saw such a familiar building in Japan. The second interesting thing I saw in Kyoto University is Japanese students care a lot about the academic freedom. In Taiwan, we care about the academic freedom, too. However, it is impossible for my university students to put banners everywhere. It is really a special experience for me to visit a university full of freedom. The last but not the least interesting thing is about the researches by Japanese professors. Professor Han told us that Japanese professors can do any researches they are interested in, no matter it is meaningful or not. It is totally different from the education industry in Taiwan. In Taiwan, professors are forced to publish a certain amount of papers in a year. It is a pity that some of them can't do researches they are interested in, which may cost a long time to finish.

We took lots of different courses in this summer program. School trip courses impressed me the most. We visited NABEL which is a company famous for its egg packing system in Japan. I have learned a lot when the company CEO told us his concept of management is to make the company become a big family. He also told us that he wants to specialize only on his egg packing system and make it become the best around the world, instead of developing lots of different systems. I totally understood why he could succeed in Japan. Another interesting school trip course is held by the Kyoto Prefectural Office. I am majoring in Agronomy, so I was so happy that I could have a harvest experience and get in touch with Japan agriculture industry. I took the opportunity to talk with local farmers about The Trans-Pacific Partnership. TPP is the topic I am researching and the direct talk with farmers become my best martial. Besides school trip courses, we also have lectures in the liberal arts. Prof. Naoshi Kondo's lecture about agricultural machinery is the most appealing course to me. I have heard of Prof. Kondo for many times. During the lectures, I found out there are so many useful machines we could use. I was learning how to graft two weeks before visiting Kyoto. However, we don't need to learn anything with the help of grafting machine. Although we took lots of interesting courses in the university, we still go to lots of historical spots in Kyoto during our free time. We visited a huge amount of shrines and temples. Most important of all is that we could ride the bicycle around Kyoto. It is really comfortable to experience this historic city by bicycle.

During this program, I met students from Peking University, Chinese University of Hong Kong, and Yonsei University. Although most of us are from East Asia, we have totally different culture and education background. The time I got along with them is the most precious thing during this program. I was surprised by the active attitude toward asking questions. Students in Taiwan are usually too shy to ask questions and passive learning is one of the big studying problems. I could see their desire of knowledges in every class. When talking with Korean students, Euichin, I realized that I am a person with limited outlook. He knows so much that I have never heard of, so I paid attention when he is talking about a new issue. We discussed a lot about Taiwanese and Korean totally different attitude toward Japan after the two countries colonized by Japan for a long time. I am so happy that I could have culture exchange and more international outstanding with these twenty-four outstanding classmates.

After these two week summer program, I knew the importance of language ability. Some of my classmates could speak more than three languages, so they could easily communicate with all the people in this program, even students from Southeast Asia. Therefore, I have made up my mind to enhance my English skills and begin to learn basic Japanese. Going to America for graduate school has been always my top choice. However, I think coming to Japan might be another good choice after this program. In the program I have a good grasp of Kyoto University. I met one of my senior in school who is studying Agronomy Science in Kyoto University. He briefly introduces the education system and the university to me. Most important of all, I have deeply fallen in love with this city. I could say that it will not be the last time I come to Kyoto.

These two weeks in Kyoto truly make my life much more wonderful and colorful and my classmates show me a correct attitude toward learning. I have to show my thankfulness to all the professors and students in Kyoto University. Thanks for giving me a wonderful experience.

What I learn during the summer program in Kyoto University in 2016 summer

Fan Lin, National Taiwan University

Through the summer program in Kyoto University in 2016, I learned lots of things, not just some information about politics, history, but had some further influences on my attitude toward travel, life, and world around me.

As a medical student, all the lectures besides Human mind viewed from the study of chimpanzees from Prof. Tetsuro Matsuzawa seem quite different from my major. Also, I used to be someone who had little interests in those things like history, liberal arts, or politics. However, I saw the different sides, the beauty of these things, the beauty or the culture in Kyoto.

In this generation, we used to pretend to know everything, we edit and exaggerate, crave addition, we pretend not to notice the social isolation, yet when we step away from the device of delusion, we are awoken to see a world without connection, most of us lose the connection with the place, the people around me, or even the fact that I study in biology, which seems to care much about the lives.

If you ask what I get through the summer program, I can answer you that nothing but everything. Because what I got is something that cannot be written into a report or paper, but something that I am very sure it would have profound influences in every steps, every decision I will make in the future in my life. The most important thing I learned is how to be humble. Every professor who gave the lecture during the two weeks, or the supporters giving us the best memories in Kyoto, everything, everyone in Kyoto taught me the true meaning of being humble. The professors deeply love the things they are doing, they don't seek reward, they have a clear mind, so they have been able to see more things than others, they are the observers of the nature, the culture, the world, they might be so small compared with the nature. But their humbleness and smallness make them see more things and have the clearest eyes, that's why I see the humbleness is great.

Second, those students with us during the two weeks, also taught me a lot. There is a saying in Taiwan, the most beautiful things are the people. The quote best describe how I felt during these days. People in Japan are the best memories in 2016 summer and in my mind. The Assoc. Prof. Shikiko Yukawa who gave the lecture about The Aesthetics and Sensitivities of the Japanese as seen through Classical Japanese Literature 「日本古典文学に見る日本人の美意識」 once said that beauty is the appreciation of the incomplete, the imperfect, and the unfulfilled. Something not very complete, not glory, things not perfect, indirect, they don't complete the 100% of the meaning, hidden inside the hearts, humble but still simple and charming. Not necessarily attainable, but imaginable; not necessarily visible, but participated. We might seem to be very tiny in front of the whirlpool of the long history of the big culture in Kyoto. But it is just these tiny moments, tiny people, tiny memories that contributed to the eternity of the place and the human culture. And it is also the connection and the beauty that we can share with the ancient people, the place and the world. I deeply learned that beauty is not necessarily something we know very well, or something we get many information from its depth, but it is the emptiness of our heart which would be filled with the wisdom from the real world, i.e. mother nature.

Deciding to sign up for the program this summer was one of the greatest decisions I made during my life. In the past year during the freshman year in national Taiwan University, I lost my way in dealing with the people around me, and lost my way in the path to my dream to become someone who can help people in the world, and even almost lost my dreams. But, I recharged myself during the two weeks. I found the way to my dreams and found the way to treat people wholeheartedly and have the clearest eyes and the humble heart to see the world, also my major.

Two weeks might seem to be very small compared to a person's whole life, but these unique moments in the two weeks, accompanied with the people I love so much, with such gorgeous place, Kyoto, Japan. It would become one of the most beautiful snapshots in my mind, which I would always cherish during my life, and would show the wisdom, the place and people gave me during these two weeks in every path, every decision I made, and every smile on my face. And, spare no effort to my dream, to become someone who makes people in the world more happy.

Thank you Kyoto, thank you Kyoto University, and thank you National Taiwan University and Taiwan!!

Report of Two-Week Kyoto Summer Program

Xiao-Ting Lu, National Taiwan University

Before I joined this summer program, I know little about Japan and Kyoto. The reason why I want to join this summer program is to grasp the chance to communicate internationally. I was interested in topics in Japanese and East Asian studies ever since I came to Taiwan. I want to know about the most advanced studies by this chance.

This summer program gave me a comprehensive and easy-to-understand introduction of Kyoto and Kyoto University. Also I had the chance to learn Japanese. I found Kyoto is an old city with many beautiful stories and the culture here is worthy to be explored more deeply. During this two-week summer program, I benefit a lot from the scholarly excellence at Kyoto University. We had some English-taught excellent lectures on a variety of topics in Japanese and East Asian studies including: the lecture of Kyoto prefectural administration, human mind viewed from the study of chimpanzees, current situation and prospects of researches and technologies on food, environment, and life in the world, educational and research activities in Kyoto University, the Aesthetics and Sensitivities of the Japanese as seen through Classical Japanese Literature, History and culture of Kyoto, and Politician's Private Villas in modern Japan.

As for me, the most interesting lecture is the "human mind viewed from the study of chimpanzees" by professor Tetsuro Matsuzawa. From the lecture, Matsuzawa introduced his study on chimpanzee both in the laboratory and in the wild. The laboratory work is known as "Ai-project" in the Primate Research Institute of Kyoto University since 1976. A female chimpanzee named Ai learned to use Arabic numerals to represent the number. The field work has been carried out in Bossou-Nimba, Guinea, since 1986, focusing on the tool use in the wild. Matsuzawa tries to synthesize the field and the lab work to understand the mind of chimpanzees, to know the evolutionary origins of human mind. He published the books such as "Primate origins of human cognition and behavior", "Cognitive development in chimpanzees", "The chimpanzees of Bossou and Nimba". I was moved by Professor Tetsuro Matsuzawa's passion and his love to chimpanzees. He treated chimpanzees as his family and tried his best to be family with chimpanzees. He even learned the language of chimpanzees which impressed me most.

From the lectures I found that Kyoto University generated world-class knowledge through freedom and autonomy in research that conforms with high ethical standards. In Kyoto University, students can get lots of learning resource from the university and can learn whatever they are interested. Teachers and students can do the research they interested in and the research filed will not be limited. If I was a student of Kyoto University, I would be very proud. The most valuable thing for the Kyoto University is that students can make a stand freely if they want. That will not happen in universities in China or Taiwan. The universities in China or Taiwan should learn from Kyoto University.

Beside excellent lectures, we also experienced many other interesting activities: campus tour, visit to Kyoto Prefectural Office, making Japanese-style sweets "wagashi", Nabel company field trip, Harvesting Experience, Suntory Beer Factory tour and so on. These experiences made me know more about the culture in Japan. My favorite part is making Japanese-style sweets "wagashi". Wagashi are traditional Japanese confections that are often served with tea, especially the types made of mochi, anko (azuki bean paste), and fruits. Wagashi are typically made from plant ingredients. In Japan the word for sweets, kashi, originally referred to fruits and nuts. China learned from India how to produce sugar and began trading it to Japan. The trade increased and sugar became a common seasoning by the end of the Muromachi period. Influenced by the introduction of tea and China's confectionery and dim sum, the creation of wagashi took off during the Edo period in Japan.

The biggest gain from this summer program is friendship. I got to know many friends from Kyoto University, Peking University, National Taiwan University, Chinese University of Hong Kong, and Yonsei University. I had a great time with them. I should thank the students from Kyoto University most. They treat us so good and so warm-hearted. We got a lot of help from them. Thanks for their help, we got used to the life in Kyoto quickly and had a good memory with them.

Besides all mentioned before, I love the food in Japan very much. Even the food in the canteen of Kyoto University is very good. There are many ready-to-eat foods such as salad, sushi, sashimi and so on. But there are no serious food safety problems, especially problems caused by microorganisms. That may because of the food cooling system in Japan is good enough. Ready-to-eat foods are stored well in low temperature which can prevent the growth of microorganisms.

In a word, I love Kyoto and I want to know more about it.

第二部

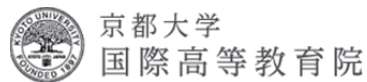
アセアン諸大学

「京都サマープログラム二〇一六」

《主催》



《共催》



《共催》

日本語・日本文化教育センター

《共催》

京都府庁

《共催》

公益財団法人 京都府国際センター

1 アセアン諸大学「京都サマープログラム二〇一六」

1.1 設立の経緯と目的

国際的に活躍できる人材の育成と大学教育の展開力の強化を目的として、平成23年度から大学の世界展開力強化事業がおこなわれている。この事業の焦点は、(1) 日本人大学生の海外留学、および(2) 外国人大学生の戦略的受入にかかわる国際的・大学間連携に置かれている。「京都サマープログラム二〇一六」は、上記の(2)のタイプに属しており、アジアの諸大学の学生を大学間連携に基づいて受け入れる事業である。

平成24年度、京都大学アジア研究教育ユニット(以下、「KUASU」)による《「開かれたASEAN+6」による日本再発見—SENDを核とした国際連携人材育成》が、数ある世界展開力強化事業の中の1つの事業として文部科学省によって採択された。平成25年度より、京都大学国際交流センター(現国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センター)とKUASUが「共催」のかたちをとり、これまでにさまざまな派遣プログラムおよび受入プログラムを実施してきた。受入プログラムは、当時、国際交流センター長であった森真理子教授とアジア研究教育ユニットの佐々木幸喜特定助教によって平成26年度に第一回目が実施され、平成27年度の第二回目(主担当:河合淳子教授、稲垣和也特定助教)を経て、今回の「京都サマープログラム二〇一六」を第三回目とする。

受入プログラムの位置付けは、アセアン諸大学への学生派遣事業、即ち上記の世界展開威力強化事業の(1)のタイプを視野に入れることでより明らかとなる。受入と派遣の二つの事業を両翼に喩えると、受入プログラムは、京都大学—アセアン諸大学間の双方向的な関係強化の一翼を担う。もちろん派遣プログラムも同様である。両プログラムとも、京都大学—アセアン諸大学間におけるより良い国際的連携・協力の蓄積に寄与することが期待される。

受入プログラムの目的は、世界展開力強化事業の目的に準じており、日本とアセアンの間で国際的に活躍できる外国人/日本人大学生を育成することである。加えて、KUASUが掲げる3つのミッション、すなわち(i) 国際的学際的協働による世界最高峰のアジア研究拠点の形成、(ii) 国際連携大学院プログラムによるグローバル人材育成、(iii) 相互理解と問題解決のための現代アジア研究の国際共通基盤構築にも準じている。この三点に基づくと、本プログラムの主眼は、(i) 世界最高基準の日本研究の統合・体系化を見据えた日本語・日本文化教育の実践、(iii) 日本—アセアンが互いに抱える諸問題の共有・解決を見据えた共同学習の実践にあると言ってよい。

1.2 「京都サマープログラム二〇一六」概要

1.2.1 プログラム内容

本プログラムの内容/カリキュラムは、表1のようにまとめることができ、大きく分けて4つのパートから成ると言える。すなわち、(A) 日本語学習、(B) 学術的学習、(C) 学内外文化学習、(D) 共同学習の4つである。文化講座の「書道」における講義を(B)に、実践を(C)に分類すると、A・B・C・Dの配分は概ね10:7:10:7となる。

表1 本プログラムのカリキュラムの概要

分類	項目	コマ数	割合	内容
日本語学習	日本語講義	10	29%	3クラス (基礎中心、聴解中心、読解中心)
学術的学習	科学講義	1	3%	霊長類学
	人文学講義	5	15%	地域政策学、日本古典文学、歴史文化学、教育社会学、日本語学
	文化講座	1	3%	書道の理論
学内外 文化学習		1	3%	書道の実践
	学外研修	9	26%	関西史跡・文化財見学、関西交通事情視察、京都丹波農業体験
共同学習	学生交流・討議	7	21%	言語交換、文化紹介、発表準備、発表
計		34	100%	

1.1 節で言及した通り、本プログラムは国際的に活躍できる外国人／日本人大学生の育成を目的としている。双方向型の学生の受入－派遣をより円滑にするため、学生間の交流が最も盛んとなる「共同学習：学生交流・討議」に重点を置いている。

表2 本プログラムの科目名および担当者所属／協力団体名

分類	科目名		所属／団体名
日本語学習	日本語講義	日本語Ⅰ	京都大学
		日本語Ⅱ	
		日本語Ⅲ	
学術的学習	科学講義	“Human mind viewed from the study of chimpanzees”	京都府政策企画部
	人文学講義	「京都府総合計画「明日の京都」による府政マネジメント」	京都大学
		“The Aesthetics and Sensitivities of the Japanese as seen through Classical Japanese Literature”	
		“History and culture of Kyoto”	
		「学校教育にみる日本文化の諸相」	
	文化講座	書道	私立英明高等学校
学内外 文化学習	学外研修	関西史跡・文化財見学	—
		関西交通事情視察	—
		京都丹波農業体験プログラム	京都府国際課 京都府国際センター
共同学習	学生交流・討議	言語交換・発表準備	京都大学

表2は、上記のカリキュラム(表1)について、科目名や講義等担当者の所属や協力団体の点からまとめた一覧である。

1.2.2 実施体制と教員確保

教務関連の運営では、KUASU ユニット長の伊藤公雄教授および同事務局長の平田昌司教授のもと、国際高等教育院の河合淳子教授(KUASU 運営協議会委員)、同じく国際高等教育院の韓立友准教授、KUASU の稲垣和也特定助教が中心となって、全体のカリキュラムを企画・実施した。京都府庁訪問をはじめとするカリキュラムにおいては、京都府国際課の高橋和男課長と石塚健一留学生政策担当課長の指揮のもと、同国際課の玉木千絵企画・留学生担当副課長と伊達圭子氏の協力を得て、学外研修(京都丹波農業体験)の企画・実施をおこなった。一方、事務関連の運営では、KUASU の西田充穂特定職員の協力を仰いだ。今回のプログラム(平成28年度)は、京都府庁訪問、科学講義、人文学講義等、いくつかの研修内容をアセアンと東アジアのプログラムで共有するという初の試みであった。

カリキュラムの準備段階で、京都大学所属の教員を中心に本研修の講師担当の打診をおこない、教員確保を進めた。国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センター、文学研究科、教育学研究科、経済学研究科、高等研究院/霊長類研究所の教員に講義を依頼した。全体的には、平成26、27年度とほぼ同様の講師陣から承諾が得られ、円滑な教員確保ができた。これまでの講義実績に基づき、各講義内容はより充実・洗練されたと考えられる。一方、学外研修としての関西史跡・文化財見学と関西交通事情視察では、チューターを務めた京都大学の学生18名の協力により、京都、大阪、奈良での学外文化学習が実現した。

本研修の参加対象大学は、インドネシア大学、シンガポール国立大学、チュラーロンコーン大学、ベトナム国家大学ハノイ校人文社会科学大学および外国語大学のアセアン5大学である。プログラム準備段階において、上記アセアン5大学に、(1)日本学関連領域(日本学、日本文学、日本史学等)を学ぶ、(2)学士課程または修士課程に在籍する、という参加条件で学生募集の依頼をおこなった。アセアン各大学の責任者をふくめた本研修の全体的な実施体制については、以下の第2節を参照されたい。

1.2.3 京都大学学生アシスタント(チューター)

1.1節で述べた「日本とアセアンの間で国際的に活躍できる外国人/日本人大学生の育成」という研修目的の達成のため、京都大学学生には、共同学習における発表準備等をはじめ、日本語学習・学術的学習・学内外文化学習における留学生(短期交流学生)に対するサポートが要求された。それだけでなく、空港での迎え入れ、京都大学キャンパスおよび宿泊施設周辺の案内、京都市内の交通案内、学外研修における引率、生活や修学にかかわる相談など、多岐にわたるサポートをおこなうためにも、京都大学学生の助力は不可欠であった。

上記の必要性から、実施体制の整備(1.2.2)と並行して、京都大学学生の募集をおこなった。次ページのポスターは募集時に用いたものである。募集・選考終了後、オリエンテーションをおこない、SEND プログラム、京都サマープログラム二〇一六の概要の説明、(1)教職員との、そして参加学生との連携、(2)京都大学学生としてサポートするとい

2016年8月、京都大学アジア研究教育ユニットでは日本語・日本文化
教育センターとの共催で「京都サマープログラム2016」を実施します。
このプログラムは、SEND双方向型教育プログラムとして企画され
た2週間の短期プログラムで、下記の大学の学生を対象としています。

国際高等教育院 河合 淳子
アジア研究教育ユニット 稲垣 和也
TEL : 075-753-5678
Email : asean-send.6 * mail2.adim.kyoto-u.ac.jp
(*を@に変更してください)

京都サマープログラム2016

写真：京都御苑塚西御門

文部科学省 大学の世界展開力強化事業 「『開かれたASEAN+6』による日本再発見—SENDを核とした国際連携人材育成」

研修
期間
2016.7.31 (Sun)
～8.13 (Sat)

募集対象大学

- ・(京都大学：協同学習・サポートにあたる京都大学学生約20名を募集します)
- ・ベトナム国家大学ハノイ校人文社会科学大学 ・インドネシア大学
- ・ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学 ・シンガポール国立大学
- ・チュラロンコン大学

研修内容

- ・日本語・日本文化講義の受講
- ・文化講座、文化体験
- ・学生交流、共同発表
- ・学外研修

う自覚・責任の必要性、(3) 研修参加学生とチューターという二つの立ち位置を意識すること等を確認した。その他、健康管理、安全管理、提出書類などについての説明もおこない、アセアン参加学生のためのサポートについて意見交換の場をもうけた。

京都大学からの参加学生の一覧については、以下の 3 節を参照されたい。

1.2.4 カリキュラムの特徴

本プログラムにおける主な教授言語は日本語である。ただし、学術的学習における媒介言語としての英語の重要性、そして今回初の試みとして東アジアとアセアンの学生達が合同で受講するため、表 2 に挙げた 3 つの講義の教授言語は英語であった（日本語運用能力は東アジア諸大学での募集要件には含まれていない）。また、京都府庁での人文学講義では東アジア諸大学学生に対する英語通訳もおこなわれた。その他、前節 1.2.3 で述べた京都大学学生による各種サポートにおいて、英語が用いられる場面も少なからずあったようである。

カリキュラム全体の特徴は、(A) 日本語学習、(B) 学術的学習、(C) 学内外文化学習、(D) 共同学習（1.2.1 節のプログラム内容を参照）を骨組みとする点である。そして、国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センター（旧国際交流センター）が蓄積してきた長年のプログラム実施実績と、KUASU が平成 24 年度から蓄積してきた実績がこの骨組みの基礎を築いている。本プログラムでは、これらの基礎があったからこそ、質の高い研修内容を提供できたのではないと思われる。

(A) の日本語学習においては、アセアン諸大学学生の多様な背景、学習歴、興味や志向を考慮し、学生 18 名を 3 つのグループに分けた。開講式後におこなった日本語の筆記試験の結果に基づいて翌日の授業間に学生全員と受講相談をおこない、日本語講義を担当した講師陣からの意見を集約したのち、クラス分けの最終決定をおこなった。

(D) の共同学習の際には、(A) とは異なるグループ分けをおこなった。昨年度はアセアン諸大学学生のみから成る 4 グループを作って最終プレゼンテーションに臨んだが、今年度は京都大学学生を含む 6 つの多国籍グループを編成した（表 3 参照）。したがって、今回は京都大学ーアセアン諸大学の共同学習を〈共同発表〉というかたちで完結させる形をとった。グループのメンバーである京都大学の学生は、1.2.1 節で言及した言語交換・発表準備においてのサポートだけでなく、発表資料作成や口頭発表内容を分担し、最終日の各発表では、聴講者（ないしコメント提供者）という役割をも果たした。

表3 共同学習における発表タイトルと発表者

1. 「舞台芸術での文化交流はできるのか？」 (＝国際的な協働に対する評価と提案)		
Ku Ka Leung (カーリョン)	シンガポール国立大学・M1	
Mutiara Rachmadini Effendi (ムムト)	インドネシア大学・B3	
Napassorn Tangtermsarp (ケーキ)	チュラーロンコーン大学・B1	
康村 博宣 (やすむら ひろのぶ)	京都大学法学研究科・M1	
木野 結 (きの ゆい)	京都大学文学部・B4	
皆木 香渚子 (みなき かなこ)	京都大学文学部・B2	
2. 「一緒に飲み会に行こう！」 (＝各国の食事文化の概観と比較)		
Nisky Khastanty Parisya (ニスキー)	インドネシア大学・B4	
Nguyễn Thị Ánh Tuyết (トウイェット)	ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学・B2	
Monlanee Srirakul (キム)	チュラーロンコーン大学・B1	
横畑 里美 (よこはた さとみ)	京都大学大学院農学研究科・M2	
中川 友希 (なかがわ ゆき)	京都大学法学部・B4	
押村 亜沙美 (おしむら あさみ)	京都大学農学部・B3	
3. 「シンガポール、インドネシア、ベトナムにおける寿司の人気度の差の原因」 (＝日本食から見た文化接触)		
Nia Septiani (ニア)	インドネシア大学・B4	
Đâu Thị Việt Kiều (キエウ)	ベトナム国家大学ハノイ校人文社会科学大学・B2	
Lee Naomi (ナオミ)	シンガポール国立大学・B1	
山岡 翔 (やまおか しょう)	京都大学文学研究科・M1	
喜多 祐介 (きた ゆうすけ)	京都大学農学部・B3	
4. 「日常生活」 (＝各国の日常から見た諸問題)		
Yasmin Mohammad Nadjib (ヤスミン)	インドネシア大学・B4	
Hoàng Thị Thuỳ (トウイ)	ベトナム国家大学ハノイ校人文社会科学大学・B2	
Panukarn Kongborwornkiat (ジーン)	チュラーロンコーン大学・B1	
伊藤 勇太 (いとう ゆうた)	京都大学経済学部・B4	
山淵 あいり (やまぶち あいり)	京都大学文学部・B2	
5. 「3国比較から見る日本の時間感覚」 (＝各国の時間をめぐる歴史・文化)		
Bùi Khánh Linh (ブイ・リン)	ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学・B3	
Nguyễn Phương Uyên (ウェン)	ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学・B3	
Manee Thosuwonjinda (ジューン)	チュラーロンコーン大学・B1	
深谷 拓未 (ふかや たくみ)	京都大学総合人間学部・B3	
市橋 爽介 (いちはし そうすけ)	京都大学工学部・B1	
6. 「各都市の交通事情：バンコク、ハノイ、ジャカルタ、京都」 (＝各国の交通事情の概観と比較)		
Ajeng Putri Pratiwi (アジュン)	インドネシア大学・B4	
Trần Thị Khánh Linh (チャン・リン)	ベトナム国家大学ハノイ校人文社会科学大学・B2	
Panumat Rujinanon (ポス)	チュラーロンコーン大学・B1	
小山 徹 (こやま とおる)	京都大学大学院工学研究科・M1	
牟禮 あゆみ (むれ あゆみ)	京都大学理学部・B3	
野中 柚希 (のなか ゆき)	京都大学総合人間学部・B2	

1.2.5 実施時期および期間

平成26～27年度、本プログラムの前身にあたる研修プログラムは2月（冬）の第二週目から実施されていた。今年度は実施時期を大きく変更し、開始を8月（夏）の第一週とした。両日程に共通しているのは、京都大学学生アシスタントによるサポートを活かすため、京都大学の期末試験期間の後にプログラムを実施している点である。

今年度のプログラム実施が夏に変更となった経緯として、いくつかの理由を挙げることができる。第一の理由は、東アジア諸大学の受け入れ事業とアセアン諸大学のそれとを合同で行い、より高い教育効果を得ることにあつた。第二・第三の理由は、昨年度2月実施の受入プログラムに見られた、実施時期に関する下記の2つの欠点を改善するためであつた。

1. 冬季の実施期間は、ベトナムの最も重要な休日である旧正月とかさなっており、ベトナムからの参加学生が旧正月を自国で過ごせない
2. 熱帯気候の地域から冬季に来日するため、気温差が最も大きくなってしまい、気候への順応が難しく体調を崩しやすい

これら二点については、8月上旬の実施に変更したことによって概ね改善することができた。

また、冬季の実施の場合、アセアン5大学では授業実施期間中（学期初め）であるため、参加学生が自大学の授業を欠席しなければならないという欠点もあつた。これについても、8月上旬が授業実施期間外であるインドネシア大学およびベトナム国家大学ハノイ校人文社会科学大学／外国語大学の学生にとっては自大学での欠席の必要がなくなった。ただし、チャーロンコーン大学およびシンガポール国立大学の学期初めが8月第二週目であつたため、この二校については本プログラムの後半と授業実施期間が重なることになり、残念ながら上記の欠点を完全に改善することはかなわなかつた。

実施期間の週数を2週間にしている理由は、（これまでの短期派遣／受入の期間に準じ）参加学生のメンタルヘルスの観点に依拠するところが大きい。ただし、費用面やその他さまざまな面も総合的に考慮した。大半の参加学生が初めて来日することを考慮に入れると、修学・生活・観光を初めて体験する期間として、2週間という長さは適度な期間であるように思われる。プログラム終了後のアンケート結果では、8割以上の参加学生が、2週間は本プログラムの週数として適切と回答していた。

1.3 今後の課題

今後の課題としては、前節で指摘した実施時期の問題が挙げられる。アセアン諸大学に依頼した当初の募集人数の20名に対し実際の参加人数は18名となり、参加人数が大幅に減少するのは免れた。これは、アセアン各大学の担当教員の尽力に拠るところが大きい。特に、授業実施期間が重なるチャーロンコーン大学とシンガポール国立大学については、それぞれの募集予定人数の6名・3名に対し、各々5名・2名を選抜していただいた。

実施時期の問題については、しかしながら、今年度以上の改善を見込むのは現段階では困難である。質の高い短期受入プログラムを目指し、京都大学の学年暦における休業期間（夏

季／春季)にプログラム実施をおこなってきたわけだが、この休業期間内でアセアン諸大学の休業期間と(できるだけ)重なるとともに前年度の欠点(1.2.5 節参照)を改善できるのは、8月初旬の2週間のみだからである。

他の課題に、物価および費用補助の問題がある。日本の物価は、シンガポールを除くアセアン諸国の物価に比べてかなり高いと言える。本プログラムで学費や渡航費・宿泊費が補助されたとはいえ、海外旅行保険費・生活費・交通費・医療費、その他考えられるさまざまな負担によって、アセアン諸大学学生の参加を足踏みさせてしまったかもしれないという点は否めない。事実、JASSO 奨学金用のアンケートによると、奨学金無しでも参加意思があったと回答したのは全体の2割に満たなかった(16.7%)。渡航費の補助がなかった昨年度は、8割以上の参加学生が、受給した奨学金金額では(幾分)足りないという回答していた。一方、今年度は渡航費を補助でまかなったこともあり、奨学金金額が足りないという回答はほぼ無く、生活面でも困難を感じていた参加学生はいなかったと思われる。

(文責：稲垣和也)

2 実施体制

アセアン諸大学

ベトナム国家大学ハノイ校人文社会科学大学
東洋学部・講師

Võ Minh Vũ (ヴォ ミン ヴ)

ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学
東洋言語文化学部・講師

Lê Thi Tinh (レ・ティ・ティン)

チュラーロンコーン大学文学部・助教授

ผศ.ดร.ชมนาด สีติสาร

Chomnard Setisarn (チョムナード シティサーン)

シンガポール国立大学人文社会科学部・准教授、
日本研究学科長

Thang Leng Leng (汤玲玲：タン・レン レン)

インドネシア大学人文科学部・講師

Himawan Pratama (ヒマワン・プラタマ)

京都大学

実施責任者

文学研究科/アジア研究教育ユニット長・教授

伊藤 公雄

(ITO Kimio)

文学研究科/アジア研究教育ユニット事務局長・教授

平田 昌司

(HIRATA Shoji)

担当教職員

国際高等教育院・教授

河合 淳子

(KAWAI Junko)

国際高等教育院・准教授

家本 太郎

(IEMOTO Taro)

国際高等教育院・准教授

韓 立友

(HAN Liyou)

アジア研究教育ユニット・特定助教

稲垣 和也

(INAGAKI Kazuya)

アジア研究教育ユニット・特定職員

西田 充穂

(NISHIDA Mitsuho)

(京都大学：続き)

協力教職員

国際高等教育院・教授	パリハワダナ・ルチラ (PALIHAWADANA Ruchira)
国際高等教育院・准教授	湯川 志貴子 (YUKAWA Shikiko)
日本語・日本文化教育センター・非常勤講師	下橋 美和 (SHIMOHASHI Miwa)
日本語・日本文化教育センター・非常勤講師	浦木 貴和 (URAKI Norikazu)
日本語・日本文化教育センター・非常勤講師	白方 佳果 (SHIRAKATA Yoshika)
高等研究院／霊長類研究所・特別教授	松沢 哲郎 (MATSUZAWA Tetsuro)
教育学研究科・准教授	ニールス ファン ステンパール (Niels van Steenpaal)
私立英明高等学校・常勤講師	北山 聡佳 (KITAYAMA Satoka)
アジア研究教育ユニット・特定職員	浜 亜希 (HAMA Aki)

京都府

国際課・課長	高橋 和男 (TAKAHASHI Kazuo)
留学生政策担当・課長	石塚 健一 (ISHIZUKA Kenichi)
企画・留学生担当・副課長	玉木 千絵 (TAMAKI Chie)
企画・留学生担当	伊達 圭子 (DATE Keiko)
政策企画部計画推進課・課長	岩田 高明 (IWATA Takaaki)
議会事務局総務課・主事	渡邊 康之 (WATANABE Yasushi)
公益財団法人 京都府国際センター・常務理事	三田 康明 (MITA Yasuaki)

3 参加学生一覧

	名 前	大 学	学部・研究科	学年
1	Hoàng Thị Thuỳ (トウイ)	ベトナム国家大学 ハノイ校 人文社会科学大学	東洋学部	B2
2	Đậu Thị Việt Kiều (キエウ)		東洋学部	B2
3	Trần Thị Khánh Linh (チャン・リン)		東洋学部	B2
4	Bùi Khánh Linh (ブイ・リン)	ベトナム国家大学 ハノイ校 外国語大学	東洋言語文化学部	B3
5	Nguyễn Phương Uyên (ウエン)		東洋言語文化学部	B3
6	Nguyễn Thị ánh Tuyết (トウイエット)		東洋言語文化学部	B2

7	Panumat Rujinanon (ボス)	チュラーロンコーン大学	文学部	B1
8	Manee Thosuwonjinda (ジューン)		文学部	B1
9	Napassorn Tangtermsarp (ケーキ)		文学部	B1
10	Monlane Sritrakul (キム)		文学部	B1
11	Panukarn Kongborwornkiat (ジーン)		文学部	B1
12	Yasmin Mohammad Nadjib (ヤスミン)	インドネシア大学	人文科学部	B4
13	Ajeng Putri Pratiwi (アジュン)		人文科学部	B4
14	Nisky Khastanty Parisya (ニスキー)		人文科学部	B4
15	Nia Septiani (ニア)		人文科学部	B4
16	Mutiara Rachmadini Effendi (ムムト)		人文科学部	B3
17	Ku Ka Leung (カー リョン)	シンガポール国立大学	人文社会科学部	M1
18	Lee Naomi (ナオミ)		人文社会科学部	B1
19	伊藤 勇太 (いとう ゆうた)	京都大学	経済学部	B4
20	深谷 拓未 (ふかや たくみ)		総合人間学部	B3
21	押村 亜沙美 (おしむら あさみ)		農学部	B3
22	山淵 あいり (やまぶち あいり)		文学部	B2
23	中川 友希 (なかがわ ゆき)		法学部	B4
24	小山 徹 (こやま とおる)		工学研究科	M1
25	市橋 爽介 (いちはし そうすけ)		工学部	B1
26	野中 柚希 (のなか ゆき)		総合人間学部	B2
27	山岡 翔 (やまおか しょう)		文学研究科	M1
28	横畑 里美 (よこはた さとみ)		農学研究科	M2
29	牟禮 あゆみ (むれ あゆみ)		理学部	B3
30	康村 博宣 (やすむら ひろのぶ)		法学研究科	M1
31	木野 結 (きの ゆい)		文学部	B4
32	喜多 祐介 (きた ゆうすけ)		農学部	B3
33	皆木 香渚子 (みなき かなこ)		文学部	B2
34	米倉 美咲 (よねくら みさき)		文学部	B2
35	清島 優花 (きよしま ゆか)		農学部	B4
36	加田 真央奈 (かだ まおな)		教育学部	B4

4 研修日程

7月31日(日) 短期交流学生入国、参加学生顔合わせ			
時間	カリキュラム/イベント	教職員	場所
6:40	到着(ベトナム:VN330便)	【アジア研究教育ユニット】 稲垣和也(いながき かずや) 特定助教	関西国際空港(6名)
7:00	到着(タイ:TG622便)		関西国際空港(5名)
8:15	到着(インドネシア:GA888便)		関西国際空港(5名)
9:00	到着(シンガポール:SQ618便)		関西国際空港(1名)
11:00	到着連絡、京都市内へ移動		空港-京都市(全員)
	到着(シンガポール)		京都駅(1名)
15:00	ホテルチェックイン		エコノイン京都

8月1日(月) 開講式、オリエンテーション、クラス分けテスト、京都府庁表敬訪問、科学講義			
時間	カリキュラム/イベント	教職員	場所
9:00-9:30	開講式	【国際高等教育院】 河合淳子教授、家本太郎准教授 【アジア研究教育ユニット】 伊藤公雄教授、平田昌司教授、 稲垣和也特定助教、西田充穂特定職員	京都大学 (吉田南キャンパス) 吉田国際交流会館 南講義室4
9:30-10:00	オリエンテーション、物品受領、 JASSO 提出用在籍確認	稲垣和也特定助教	
10:00-10:50	クラス分けテスト		
11:00-12:30	キャンパスツアー、昼食		京都大学周辺
13:00	京都大学正門前集合、バス移動		京都大学 → 京都府庁
13:30-14:00	京都府副知事表敬	河合淳子教授、韓立友准教授、 稲垣和也特定助教	
14:15-15:15	人文学講義(使用言語:日本語) 「京都府総合計画「明日の京都」 による府政マネジメント」	【京都府 政策企画部 計画推進課】 岩田高明(いわた たかあき) 課長 (明日の京都担当課)	京都府庁 (住所:京都市上京区 下立売通新町 西入藪ノ内町)
15:30-16:15	京都府議場見学	【京都府議会事務局 総務課】 渡邊康之(わたなべ やすし) 主事 (広報広聴係)	
16:20-16:45	移動		京都府庁 → 京都大学
17:00-19:00	科学講義(使用言語:英語) "Human mind viewed from the study of chimpanzees"	【高等研究院、霊長類研究所】 松沢哲郎(まつざわ てつろう) 教授	(吉田南) 南講義室5/6

8月2日(火) 日本語講義、クラス分け面談、京都大学紹介			
時間	カリキュラム/イベント	教職員	場所
8:45-10:15	日本語Ⅰ(1)	下橋美和(しもはし みわ) 講師	(吉田南) 南講義室 1
	日本語Ⅱ(1)	浦木貴和(うらき のりかず) 講	(吉田南) 南講義室 2
	日本語Ⅲ(1)	白方佳果(しらかた よしか) 講	(吉田南) 南講義室 4
10:30-12:00	クラス分け面談	稲垣和也特定助教	南講義室 1
13:00-14:30	日本語Ⅰ(2)	下橋美和講師	南講義室 1
	日本語Ⅱ(2)	浦木貴和講師	南講義室 2
	日本語Ⅲ(2)	白方佳果講師	南講義室 4
14:45-16:15	京都大学紹介	稲垣和也特定助教	南講義室 4

8月3日(水) 日本語講義、人文学講義、言語交換・発表準備 (SEND)			
時間	カリキュラム/イベント	教職員	場所
8:45-10:15	日本語Ⅰ(3)	下橋美和講師	南講義室 1
	日本語Ⅱ(3)	浦木貴和講師	南講義室 2
	日本語Ⅲ(3)	白方佳果講師	南講義室 3
10:30-12:00	日本語Ⅰ(4)	下橋美和講師	南講義室 1
	日本語Ⅱ(4)	浦木貴和講師	南講義室 2
	日本語Ⅲ(4)	白方佳果講師	南講義室 3
13:00-14:30	人文学講義(使用言語:英語) "The Aesthetics and Sensitivities of the Japanese as seen through Classical Japanese Literature"	【日本語・日本文化教育センター】 湯川志貴子(ゆかわ しきこ) 准教授	(吉田キャンパス) KUINEP 講義室
14:45-16:15	言語交換・発表準備	稲垣和也特定助教	(吉田南) 南講義室 5/6

8月4日(木) 日本語講義、人文学講義			
時間	カリキュラム/イベント	教職員	場所
8:45-10:15	日本語Ⅰ(5)	下橋美和講師	南講義室 1
	日本語Ⅱ(5)	浦木貴和講師	南講義室 2
	日本語Ⅲ(5)	白方佳果講師	南講義室 3
10:30-12:00	日本語Ⅰ(6)	下橋美和講師	南講義室 1
	日本語Ⅱ(6)	浦木貴和講師	南講義室 2
	日本語Ⅲ(6)	白方佳果講師	南講義室 3
13:00-14:30	人文学講義(使用言語:英語) "History and culture of Kyoto"	【大学院教育学研究科・教育学部】 Niels van Steenpaal 准教授 (ニールス ファン ステンパール)	(吉田キャンパス) KUINEP 講義室

8月5日(金) 人文学講義、日本文化講座(書道)			
時間	カリキュラム/イベント	教職員	場所
8:45-10:15	人文学講義(使用言語:日本語) 「学校教育にみる日本文化の諸相」	【日本語・日本文化教育センター】 河合淳子(かわい じゅんこ)教授	南講義室 6
10:30-12:00	人文学講義(使用言語:日本語) 「日本語のウチとソト」	【日本語・日本文化教育センター】 パリハワダナ・ルチラ教授	南講義室 6
13:00-14:30	日本文化講座(書道:理論)	北山聡佳(きたやま さとか)講師	南講義室 5/6
14:45-16:15	日本文化講座(書道:実践)	北山聡佳講師	南講義室 5/6

8月6日(土) 日-アセアン学生間交流			
時間	カリキュラム/イベント	教職員	場所
終日	関西史跡・文化財見学		京都市近郊

8月7日(日) 日-アセアン学生間交流			
時間	カリキュラム/イベント	教職員	場所
終日	関西交通事情視察		京都市近郊

8月8日(月) 学外文化学習			
時間	カリキュラム/イベント	教職員	場所
8:00-9:30	京丹波へ移動	【京都大学】	エコノイン京都 →
9:40-10:15	京野菜収穫体験	稲垣和也特定助教	京都府京丹波町
10:30-12:10	京野菜調理体験、昼食	【京都府国際課】	三の宮基幹集落センター
12:15-13:30	美山へ移動	玉木千絵(たまき ちえ)副課長	→
13:30-15:30	かやぶきの里ツアー、餅つき体験	(企画・留学生担当)	美山かやぶきの里
15:40-17:40	帰京	伊達圭子(だて けいこ)様	→ エコノイン京都

8月9日(火) 日本語講義、JASSO 奨学金受領			
時間	カリキュラム/イベント	教職員	場所
8:45-10:15	日本語Ⅰ(7)	下橋美和講師	南講義室 1
	日本語Ⅱ(7)	浦木貴和講師	南講義室 2
	日本語Ⅲ(7)	白方佳果講師	南講義室 3
10:30-12:00	日本語Ⅰ(8)	下橋美和講師	南講義室 1
	日本語Ⅱ(8)	浦木貴和講師	南講義室 2
	日本語Ⅲ(8)	白方佳果講師	南講義室 3
12:00-12:30	JASSO 奨学金受領	稲垣和也特定助教 【アジア研究教育ユニット経済分室】 浜亜希(はま あき)特定職員	南講義室 4

8月10日(水) 日本語講義、研究発表聴講・議論参加			
時間	カリキュラム/イベント	教職員	場所
8:45-10:15	日本語Ⅰ(9)	下橋美和講師	南講義室1
	日本語Ⅱ(9)	浦木貴和講師	南講義室2
	日本語Ⅲ(9)	白方佳果講師	南講義室3
10:30-12:00	日本語Ⅰ(10)	下橋美和講師	南講義室1
	日本語Ⅱ(10)	浦木貴和講師	南講義室2
	日本語Ⅲ(10)	白方佳果講師	南講義室3
15:00-17:00	京都サマープログラム2016 東アジア短期交流学生による 研究内容発表の聴講・議論参加	【国際高等教育院】 河合淳子教授、湯川志貴子准教授、 韓立友准教授、稲垣和也特定助教	南講義室5/6

8月11日(木) 言語交換・発表準備(SEND)			
時間	カリキュラム/イベント	教職員	場所
13:00-16:00	言語交換・発表準備	稲垣和也特定助教	南講義室5/6

8月12日(金) 言語交換・発表準備(SEND)、発表、修了式、歓送会			
時間	カリキュラム/イベント	教職員	場所
8:45-12:00	言語交換・発表準備	稲垣和也特定助教	南講義室5/6
13:00-17:00	発表、講評	【日本語・日本文化教育センター】 河合淳子教授、家本太郎准教授、 稲垣和也特定助教、下橋美和講師、 浦木貴和講師、白方佳果講師	南講義室5/6
17:00-17:30	修了式 写真撮影	【アジア研究教育ユニット】 伊藤公雄教授、平田昌司教授、 稲垣和也特定助教、西田充穂特定職員 【日本語・日本文化教育センター】 河合淳子教授、家本太郎准教授 下橋美和講師、浦木貴和講師、 白方佳果講師	南講義室5/6
18:00-20:00	歓送会	伊藤公雄教授、平田昌司教授、 河合淳子教授、家本太郎准教授、 稲垣和也特定助教、下橋美和講師、 浦木貴和講師、白方佳果講師、 西田充穂特定職員 【京都府 国際課】 高橋和男(たかはし かずお) 課長 【京都府国際センター】 三田康明(みた やすあき) 常務理事	カンフォーラ

8月13日(土) 短期交流学生帰国			
時間	カリキュラム/イベント	教職員	場所
早朝	ホテルチェックアウト		エコノイン京都
6:00-	出発(シンガポール:SQ619便;フライト10:55)		関西国際空港(1名)
7:30-	出発(タイ:TG623便;フライト11:45)		関西国際空港(5名)
7:30-	出発(インドネシア:GA889便;フライト12:00)		関西国際空港(5名)
7:30-	出発(ベトナム:VN331便;フライト12:30)		関西国際空港(6名)
15:00-	出発(シンガポール:SQ615便;フライト23:30)		関西国際空港(1名)

4.1 日本語 I

科目名 Title	にほんごいち 日本語 I	講師 Instructor	しもはし みわ 下橋 美和 (Miwa Shimohashi)	
講義室 Classroom	よしだこくさいこうりゅうかいかん みなみこうぎしついち 吉田国際交流会館 南講義室 1			
〔授業の進め方 Content of the class〕				
かい 回	がつび ようび 月日 (曜日)	じげん 時限	じゅぎょうないよう 授業内容	びこう 備考
1	8月2日 (火)	1限	きそ 誘う、ことわる	
2		3限	しょたいめん ひと はなす 初対面のひとと話す	京大生 4～5名
3	8月3日 (水)	1限	いらい 依頼	
4		2限	メールを書く	京大生 4～5名
5	8月4日 (木)	1限	きよかをえ 許可を得る	
6		2限	いっぶんスピーチ、さんぶんスピーチ 1分スピーチ、3分スピーチ	京大生 4～5名
7	8月9日 (火)	1限	まとまったぶんしょうをよむ (1) まとまった文章を読む (1)	
8		2限	はなあう、1分/3分スピーチ (2) 話し合う、1分/3分スピーチ (2)	京大生 4～5名
9	8月10日 (水)	1限	まとまったぶんしょうをよむ (2) まとまった文章を読む (2)	
10		2限	話し合う、1分/3分スピーチ (3) 話し合う、1分/3分スピーチ (3)	京大生 4～5名
〔教科書 Textbook〕 必要な資料を配布する。 参考テキスト：『会話に挑戦！中級前期からの日本語ロールプレイ』（スリーエーネットワーク）				
〔その他の注意 Miscellaneous〕				

1限 = 8:45～10:15

2限 = 10:30～12:00

3限 = 13:00～14:30



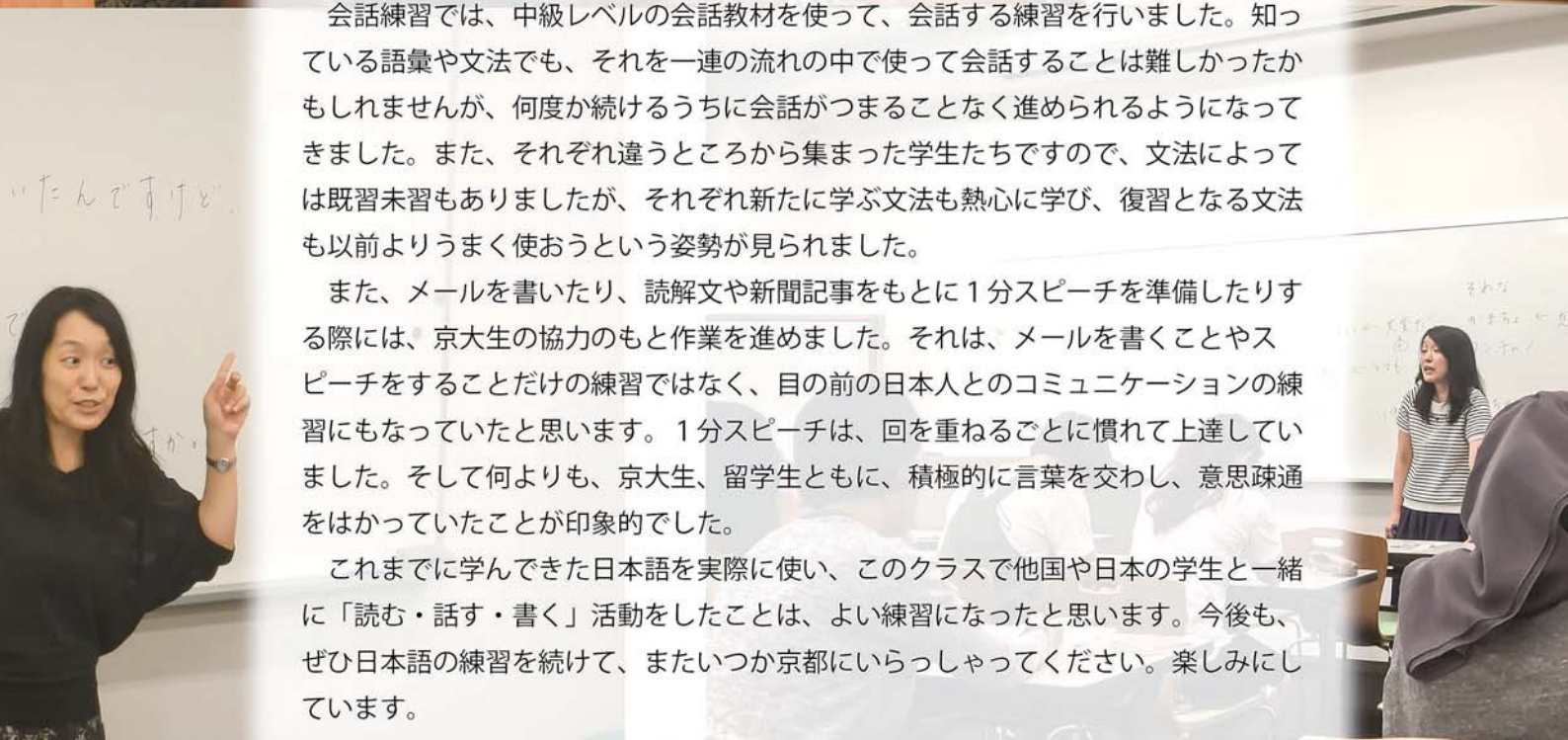
このクラスでは、教材を用いた会話練習と、京大生と一緒に「読む・書く・話す」などの活動を行いました。

会話練習では、中級レベルの会話教材を使って、会話する練習を行いました。知っている語彙や文法でも、それを一連の流れの中で使って会話することは難しかったかもしれませんが、何度か続けるうちに会話がつまることなく進められるようになってきました。また、それぞれ違うところから集まった学生たちですので、文法によっては既習未習もありましたが、それぞれ新たに学ぶ文法も熱心に学び、復習となる文法も以前よりうまく使おうという姿勢が見られました。

また、メールを書いたり、読解文や新聞記事をもとに1分スピーチを準備したりする際には、京大生の協力のもと作業を進めました。それは、メールを書くことやスピーチをすることだけの練習ではなく、目の前の日本人とのコミュニケーションの練習にもなっていたと思います。1分スピーチは、回を重ねることに慣れて上達していました。そして何よりも、京大生、留学生ともに、積極的に言葉を交わし、意思疎通をはかっていたことが印象的でした。

これまでに学んできた日本語を実際に使い、このクラスで他国や日本の学生と一緒に「読む・話す・書く」活動をしたことは、よい練習になったと思います。今後も、ぜひ日本語の練習を続けて、またいつか京都にいらっしゃってください。楽しみにしています。

下橋美和



4.2 日本語Ⅱ

科目名 Title	日本語Ⅱ		講師 Instructor	浦木 貴和 (Norikazu Uraki)
講義室 Classroom	吉田国際交流会館 南講義室2			
〔授業の進め方 Content of the class〕				
回	月日 (曜日)	時限	授業内容	備考
1	8月2日 (火)	1限	マンガ『サザエさん』で学ぶ日本語①	
2		3限	マンガ『サザエさん』で学ぶ日本語②	
3	8月3日 (水)	1限	マンガ『サザエさん』で学ぶ日本語③	
4		2限	マンガ『サザエさん』で学ぶ日本語④	
5	8月4日 (木)	1限	マンガ『サザエさん』で学ぶ日本語⑤	
6		2限	マンガ『サザエさん』で学ぶ日本語⑥	京大生3～4名
7	8月9日 (火)	1限	サイレント映画の会話を作る①	
8		2限	サイレント映画の会話を作る②	京大生3～4名
9	8月10日 (水)	1限	サイレント映画の会話を作る③	
10		2限	サイレント映画の会話を作る④	京大生3～4名
〔教科書 Textbook〕 映像資料を使用する予定				
〔その他の注意 Miscellaneous〕				

1限 = 8:45～10:15

2限 = 10:30～12:00

3限 = 13:00～14:30

当プログラムにおいて、私は日本語Ⅱのクラスを担当しました。今回は7名の学生が受講してくれました。

私のクラスでは、アニメ「サザエさん」を題材に、聴き取りと文法、語彙を中心に授業を行いました。また日本の古いサイレント映画『腰弁頑張れ』を鑑賞しながら、セリフを考えてもらい、シナリオを完成しました。これらは日本語の勉強というだけに止まらず、日本の文化や社会を自国のそれと比較し考えてもらう良い機会になったと思います。

今回の学生は日本語学習歴が2～3年程度で日本に来るのも初めてということもあり、最初の2日ほどはナチュラルスピードでの会話の聴き取りに苦労していました。しかし3日目になると、だんだん他のクラスメートとも打ち解け、少しずつではありますが、聴き取れるようになりました。これは、授業のやり方に慣れてきたということもありますが、各国の大学生たちと一緒に日本文化体験やスピーチ準備をする中で総合的な日本語の能力が上がってきたからであると思います。改めて生の日本語に触れる機会の重要性を認識させられました。

外国語を学ぶということは単に文法や語彙の知識を習得するだけでは十分ではありません。様々な文化的社会的な接触を通して考え方や認識のしかたを学ぶことも不可欠です。

参加した学生たちは今回のプログラムで経験したことや出会いを大切に、世界に貢献できる、本当の意味での国際人に育ってほしいと思います。

浦木貴和



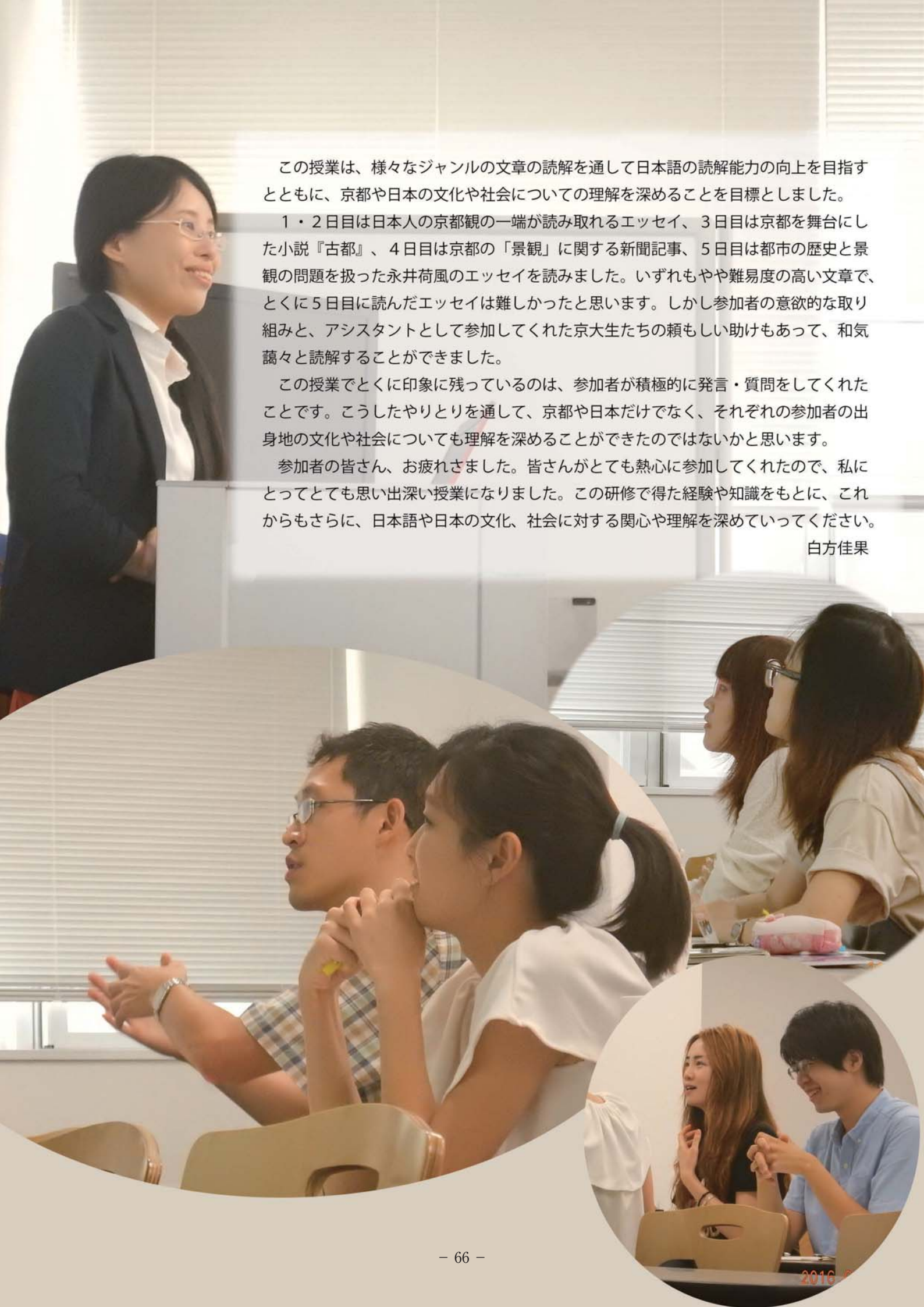
4.3 日本語Ⅲ

科目名 Title	にほんごさん 日本語Ⅲ		講師 Instructor	しらかた よしか 白方 佳果 (Yoshika Shirakata)
講義室 Classroom	よしだこくさいこうりゅうかいかん みなみこうぎしつよんさん 吉田国際交流会館 南講義室4/3			
〔授業の進め方 Content of the class〕				
かい 回	がつび ようび 月日 (曜日)	じげん 時限	じゅぎょうないよう 授業内容	びこう 備考
1	8月2日 (火)	1限	きょうと かん 京都に関するエッセイを読む (1)	
2		3限	京都に関するエッセイを読む (2)	
3	8月3日 (水)	1限	京都に関するエッセイを読む (3)	
4		2限	京都に関するエッセイを読む (4)	
5	8月4日 (木)	1限	きょうと ふたい 京都を舞台にした文学作品を読む (1)	
6		2限	京都を舞台にした文学作品を読む (2)	
7	8月9日 (火)	1限	きょうと じんぶんきじ 京都に関する新聞記事などを読む (1)	
8		2限	京都に関する新聞記事などを読む (2)	
9	8月10日 (水)	1限	きょうだいせい 京大生と京大の入試問題に挑戦する (1)	京大生約4名
10		2限	京大生と京大の入試問題に挑戦する (2)	
〔教科書 Textbook〕 ひつよう しりよう はいふ 必要な資料を配布する。				
〔その他の注意 Miscellaneous〕				

1限 = 8:45~10:15

2限 = 10:30~12:00

3限 = 13:00~14:30



この授業は、様々なジャンルの文章の読解を通して日本語の読解能力の向上を目指すとともに、京都や日本の文化や社会についての理解を深めることを目標としました。

1・2日目は日本人の京都観の一端が読み取れるエッセイ、3日目は京都を舞台にした小説『古都』、4日目は京都の「景観」に関する新聞記事、5日目は都市の歴史と景観の問題を扱った永井荷風のエッセイを読みました。いずれもやや難易度の高い文章で、とくに5日目に読んだエッセイは難しかったと思います。しかし参加者の意欲的な取り組みと、アシスタントとして参加してくれた京大生たちの頼もしい助けもあって、和気藹々と読解することができました。

この授業でとくに印象に残っているのは、参加者が積極的に発言・質問をしてくれたことです。こうしたやりとりを通して、京都や日本だけでなく、それぞれの参加者の出身地の文化や社会についても理解を深めることができたのではないかと思います。

参加者の皆さん、お疲れさました。皆さんがとても熱心に参加してくれたので、私にとってとても思い出深い授業になりました。この研修で得た経験や知識をもとに、これからもさらに、日本語や日本の文化、社会に対する関心や理解を深めていってください。

白方佳果

4.4 書道

科目名 Title	書道	講師 Instructor	北山 聡佳 (Satoka Kitayama)	
講義室 Classroom	吉田国際交流会館 南講義室5/6			
〔授業の進め方 Content of the class〕				
回	がっぴ 月日 (曜日)	しげん 時限	じゅぎょうないよう 授業内容	びこう 備考
1	8月5日 (金)	3 限	「書道について」 文字や書道芸術の歴史について学ぶ	終わり次第、作品 制作に取りかかる
2		4 限	「作品制作」 書道の作品を実際に制作する	用具用材についても 簡単に学ぶ
〔教科書 Textbook〕 必要な資料を適宜提示する				
〔その他の注意 Miscellaneous〕 墨などで汚れてもよい服装（エプロンなど）で参加する ウエットティッシュまたは濡れタオル（おしぼり）があることが望ましい				

3限 = 13:00~14:30 4限 = 14:45~16:15



京都らしい酷暑の中、この度のプログラムにおいて、留学生の皆さんとともに書道について学びました。

まず導入として、書道で使われる文字について紹介しました。大陸から文字が伝わり、そこからどのように日本独自の文字が生まれ、今に至ったのかについてお話ししました。その過程でできた文字を、実際に解説するにあたり、たくさんの意見が出され、日本人にはないユニークな思考に驚かされました。文字は様々な情報を持っています。その書かれた内容だけでなく、文字の形や歴史から様々な情報を得ることができ、さらに今回は、留学生の皆さんの文字に対する意識が垣間見られたようで、私も大変興味深く皆さんの意見を聞きました。

その後、色紙に漢字一字の作品を作りました。文字の意味や形にとらわれず、自由に造形を工夫している姿が見られました。作品はどれも漢字を普段使っていない人が書いたものとは思えないほどのものでした。留学生の皆さんには、自信を持って作品を持ち帰り、文字について伝えてほしいと思います。

最後になりましたが、この度様々なご指導をいただきました稲垣先生をはじめ諸先生方、並びに本学学生の皆様には、心より感謝申し上げます。

北山聡佳



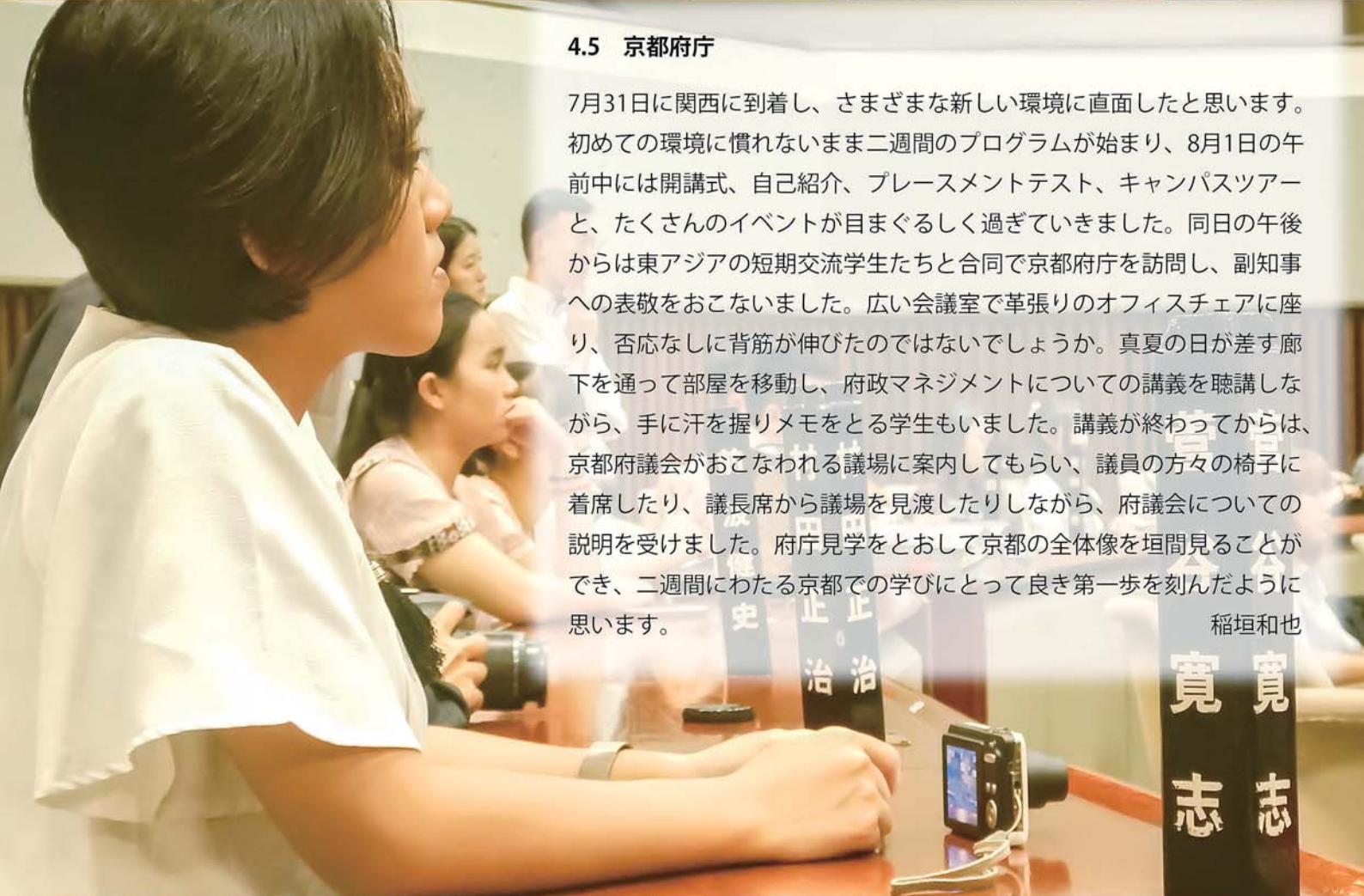


4.5 京都府庁

7月31日に関西に到着し、さまざまな新しい環境に直面したと思います。初めての環境に慣れないまま二週間のプログラムが始まり、8月1日の午前中には開講式、自己紹介、プレースメントテスト、キャンパスツアーと、たくさんのイベントが目まぐるしく過ぎていきました。同日の午後からは東アジアの短期交流学生たちと合同で京都府庁を訪問し、副知事への表敬をおこないました。広い会議室で革張りのオフィスチェアに座り、否応なしに背筋が伸びたのではないのでしょうか。真夏の日が差す廊下を通して部屋を移動し、府政マネジメントについての講義を聴講しながら、手に汗を握りメモをとる学生もいました。講義が終わってからは、京都府議会がおこなわれる議場に案内してもらい、議員の方々の椅子に着席したり、議長席から議場を見渡したりしながら、府議会についての説明を受けました。府庁見学をとおして京都の全体像を垣間見ることができ、二週間にわたる京都での学びにとって良き第一歩を刻んだように思います。

稲垣和也

寛
志
寛
志



4.6 科学講義

“The evolutionary origins of human mind viewed from the study of chimpanzees”

I aimed to compare the cognitive function in humans with that of chimpanzees. The laboratory study is known as Ai project since 1977, and the field study has been carried out in Bossou-Nimba, Guinea-Conakry, since 1986. Humans and chimpanzees are largely similar at early developmental stages, however, there remain several crucial differences. In comparison to humans, chimpanzees are poor in the social referencing ability and have been very rarely observed to engage in general imitation and active teaching. Young chimpanzees possess exceptional working memory capacities often superior to those of human adults. In contrast, their ability to learn the meaning of symbols is relatively poor. Human infants are typically raised by more than one adult, not only the mother, but also the father, siblings, grandparents, and the other members of the community. The human infant is characterized by the stable supine posture of the neonate that enables face-to-face communication via facial expressions, vocal exchange, manual gestures, and object manipulation because both hands are free. The stable supine posture makes us human. The development of social cognition in humans may be integrally linked to this mother-infant relationship and the species-specific way of rearing the children. In sum, based on the parallel effort of the fieldwork and the laboratory work of chimpanzees, I present possible evolutionary and ontogenetic explanations for aspects of cognition that are uniquely human.

Tetsuro Matsuzawa





4.7 人文学講義 "The Aesthetics and Sensitivities of the Japanese as seen through Classical Japanese Literature"

As I write this, snow is falling outside my office window. The hills surrounding Kyoto are glistening white and the air is brisk. The weather is certainly a far cry from the summer heat that enveloped the city when you visited Kyoto University and took part in the 2016 Summer School Program.

I enjoyed having an opportunity to speak to you about Japanese aesthetic sensitivities to seasonal change and their natural surroundings. I hope that the lecture offered you a chance to consider the many different and subtle ways in which the Japanese perceive beauty, whether it be the bright mid-autumn harvest moon on a cloudless night, or the moon long-anticipated yet not seen for the rain, cherry blossoms in full bloom at the height of spring, or petals delicately scattered on the water's surface.

After returning to your country and reflecting upon your experiences in Kyoto, you may have discovered that you perceive Japan, its culture and its people in a different light. And in the process perhaps you have been able to gain a new perspective of your own country and yourself as well. Best of luck to each of you for a bright and successful future.

Shikiko Yukawa





4.8 人文学講義 “History and culture of Kyoto”

In order to allow you to make the most out of your visit to Kyoto, this lecture aimed to provide you with the conceptual tools to appreciate these surroundings on a meta-level. That is, the goal was not to give a dry overview of the long history of the city of Kyoto, its people, architecture, or culture, but rather to offer a framework through which to understand all of these disparate elements as a whole.

The framework presented was that of “invented traditions”, a concept that highlights the many different ways in which nation states have utilized matters like clothing, food, ritual, and architecture in order to create a shared historical identity amongst its people. After explaining this concept through the examples of Shinto-style weddings, Bushido, and Sumo wrestling, we then moved on to suggest how it relates to the reimagining of the city of Kyoto in modern times.

Despite the fact that we only had limited time and that history as such might not be your specific area of interest, I nonetheless hope that the idea of invented traditions and the skeptical approach to historical claims it represents will be of use to you in your future studies and lives.

Niels VAN STEENPAAL





4.9 人文学講義「学校教育に見る日本文化の諸相」

日本の教育の特徴について、皆さんと一緒に考察していきました。映像を二本見てもらいました。一つは日本と米国の小学校二年生の学校生活の様子、もう一つは日本の高校で高校生たちが部活動に励む日々を描いたものでした。皆さんが真剣に食い入るように見てくれたのが印象的でした。

「教育」は誰でも受けた経験があり、簡単に話題にできる身近な現象です。だからこそ、その特徴を客観的に捉えるのは簡単ではありません。そこで、考察を助ける概念を学ぶこと、そして比較の視点を持つことが大切になってくるのです。

考察を助ける概念として、教育の社会的機能について説明しました。それらは、社会化、文化伝達、社会統制、選抜・配分、正当化等ですが、この授業では特に文化伝達に注目し、日本の学校教育でどのような文化（考え方、価値観を含む）が伝えられているかについて見ていきました。

京都大学学生も含めて、多様な文化的背景をもつ皆さんが共に学ぶことを通して、比較の視点の有効性が体感できたと思います。さらに、相違点だけでなく、共感できる価値観に触れて、日本理解はもちろん自分自身が身につけている文化について、何か気がつくことがあったならうれしく思います。

河合淳子



4.10 人文学講義「日本語のウチとソト」

僅かな時間でしたが、皆さんと一緒に日本語の一つの特徴について考えてみる機会が得られたことを嬉しく思います。

この講義では、家族の住む場所である「家」が、象徴的には玄関を境界として「外」と区別され、その境界線の内側の<一体的>空間が<心理的ウチ>へと発展していく過程、更には<心理的ウチ>の応用によって<社会的ウチ>が生まれる過程について取り挙げました。

そして、ウチ・ソト概念の日本語における現れについて人称表現、授受表現、謙讓表現などのいくつかの具体例を示しながら紹介しました。出発点の空間的特徴から性格付けられるウチ・ソトのグループアイデンティティとその特徴の一つである<相対性>についても上記の例を基に考察しました。

最後に日本語を媒介して物事を捉える<視点>についてウチ・ソトを例に少し考えてみました。

ウチ・ソトの概念を通して日本語の奥ゆかしさを感じて頂けたでしょうか。言語に映し出される様々な<視点>について皆さんの母語とも対比しながら観察してみてください。

パリハワダナ・ルチラ



4.11 学外研修：関西史跡・文化財・交通事情視察



4.12 学外研修：京丹波・南丹

関西にやってきてからちょうど一週間がたった8月8日に学外研修の日をむかえました。貸し切りバスに乗って京都市から40～50キロメートル北西にある京丹波町と南丹市・美山を訪ね、古き良き日本を伝える里で、主に3つのイベント、(1)京野菜の収穫・調理、(2)茅葺き屋根の見学、(3)餅つき体験・試食をおこないました。暑いビニールハウスの中で、元気よく育ったホウレンソウを収穫し、生のままその場で食べましたね。そのときに感じた甘さは今でも記憶に残っていることでしょう。他にもサラダ／天ぷら調理のための京野菜を収穫し、初めてのおにぎりを握り、それらを昼食としていただきました。自然の恵みを大いに実感できたと思います。美山に移動し、偶然にも茅葺き屋根の葺き替えを見学することもできました。さらに、餅つきの文化や方法についてお話を伺い、何人かの学生は初めて餅をつきました。きな粉をまぶしたつきたての餅は絶品だったはずですよ。この学外研修から、日本の文化や生活についての知識を増やすことができ、有意義な一日になったのではないのでしょうか。

稲垣和也

①



②



③





4.13 SEND共同発表

プログラム最終日に控えた共同プレゼンテーションのため、前もって6つの多国籍グループを編成しました。各グループは、5時限分の授業時間に加え、自由時間をもその準備・ディスカッションに費やしてきました。準備の中で、メンバー同士の意見の集約や発表の方向付け等にさまざまな困難を感じながらも、なんらかの解決策を探り当てたことでしょう。全てのグループが発表内容をうまくまとめており、メンバー間の連携がうかがえました。さらに、インドネシア、シンガポール、タイ、ベトナムからの短期交流学生たちは、全員、日本語での口頭発表をよく練習していたようで、日本人学生に引けを取らない話しぶりを披露してくれました。ディスカッションに重きを置いた発表もあれば、学術性に重きを置いた発表もあり、互いの発表からも多くのことを学ぶことができました。

日本という共通項を携えて集ったメンバーが一つの発表を共に作り上げたことは、日本についての学修と国際交流を目的とした今回の京都サマープログラムの最高潮だったと思います。この経験を活かし、近い将来、国際的な橋渡し役を担ってくれることを願っています。

稲垣和也



4.14 修了式



5 参加学生報告

京都サマープログラム二〇一六

Napassorn Tangtermsarp

SEND プログラムの主要な目的には二つあり、日本の文化について視野を広めることと語学力を向上させることがそれにあたります。一つ目の文化については、そのより良い理解のため、講義だけではなく実際に様々な活動と見学の機会が提供されました。例えば、京都の歴史や日本の学校教育から見た日本文化についての講義などです。印象に残っているのは、野球というスポーツ教育の場に表れる、チームからの精神的な援助と協力です。これは日本文化の特徴の一つだと感じました。また、特に興味深いと感じたのは、俳句に反映される日本の美的観点に関する講義内容でした。講義に加え、書道という伝統芸術に触れ、自分で選んだ漢字を書いて作品を作りました。学外研修として、伏見稲荷や平等院をはじめとする京都にある文化財の見学と、和菓子作りの体験をおこない、さらに様々な寺社を訪れました。また、京都府内の美しい農作地の見学、野菜収穫体験、餅つき体験などもおこないました。二つ目にあたる、日本語の語学力向上のパートについては、アニメの中に現れるキャラクターの発話を聞き取る練習を主におこないました。さらに、日本語に見られるウチとソトという特徴についての講義、共同発表の場などが提供されました。

日常生活の中で日本語を使っていたため、習ったことを実際に使う機会が多くありました。タイ語と日本語の間には単語の並べ方に関してたくさんの相違点があるため、話す際には、頭の中で言いたい内容の順番を全て整えなければならず、当初はうまく話せませんでした。しかし、会話の機会を重ねるにつれ、以前よりも日本語の運用に慣れてきたことを実感しました。また日本語学を専門とする先生方に教わったおかげで、たくさんの新しい単語や表現を習得することができました。

さらに、今回は初めての来日なので、見学や講義以外に、日常的な出来事も勉強になり、良い経験になりました。例えば、神社に行った際、最初はお祈りの方法がわかりませんでした。日本人学生の友人に教えてもらうことができました。一年に一回だけ行われる花火大会では、浴衣を着た人が大勢いて混雑していましたが、美しい花火を見ながら日本の夏の雰囲気を楽しむことができました。また、異文化について考えさせられました。自分の国ではごく普通のことでも、日本であればタブーになってしまうことがあります。このような異文化体験を頼りに、異なる文化を理解することは重要だと感じています。

このプログラムに参加し経験したことは、将来非常に役立つと思います。このプログラムに参加することで、自分の希望を確かめることができました。二週間という期間は短いのですが、この短期間のあいだ、日本での生活に長期間置かれた仮の自分を想像し、日本語に飽き飽きするかどうか観察していました。しかしながら、全くそのようなことはなく、日本語学科での進学という今後の進路については、迷いが一切無くなりました。

京都サマープログラム二〇一六

Kongborwornkiat Panukarn

このプログラムは、2週間京都で暮らしながら日本の様々な伝統的・現代的な文化および習慣などを学ぶプログラムである。教室で日本語を勉強することだけでなく、京都大学の先生達の講義を聴きながら色々な観点から京都の歴史や文化、そして日本人の考え方を学ぶことができる。例えば、日本の学校教育、文学、言葉使い等から日本の社会について考察する機会を得た。さらに、大学の外でも日本文化を学ぶことができる。このプログラムは、日本人（京大生）も参加しているので、日本人と直接意見を交換しながら自分の日本語能力、特に聴解と会話の能力を磨くことができるという側面を持っている。さらに、自分の国と日本、さらには共に参加している東南アジアの大学生達との交流を通してアジア諸国間での関係を築き得るという側面も持っており、これらを兼ね備えた留学プログラムだと言える。

このプログラムは2週間だけだが、初めての来日だったため、色々なことを学ぶことができた。日本語の能力の向上だけでなく、珍しい京都の話を知ることができた。このプログラムにおける日本語クラスは各人の能力に合うよう、クラス分けされており、短期間にもかかわらず、各人が自分に合ったペースで日本語のスキルを上達させることができる。私が受講した日本語クラスでは、文法や表現を覚えるだけでなく、京都をテーマとした文章を読むことで、日本語を学習しながら京都人の考え方や京都の珍しい歴史について理解を深めることができた。特に「洛中と洛外」についての回は大変興味深いと感じた。このようなテーマの話題は相当の予備学習がないと理解が追いつかない事態が予想されるが、京都で京都のことを学ぶことで理解が比較的容易であったように思う。さらに、特別講義においても様々な日本の習慣について学ぶことができた。例えば日本の教育や京都大学の「チンパンジー」についての研究から日本人と外国人の考え方を知ることができた。

学外学習として、京都の観光地をいくつか訪れた。京都のことに詳しい京都大学の学生達と一緒に行くことで、観光客の立場では知り得ない日本の習慣やマナー、現代の日本語表現等について学習することができた。例えば、正しい箸の使い方、餅や生和菓子の作り方、レストランでの注文マナー、公共交通手段における優先座席、食事の際の席順など、単なる観光では学ぶことができないはずだ。初めは、習慣の違いから、うっかり失礼なことをすることもあったが、失敗したからこそ、身に染みつき、忘れにくくなっているだろう。

この2週間京都に滞在し、私の日本に対する考え方が変わった。特に、日本人の性格に対する理解が変わった。日本に来る前は、日本人はとても厳しい性格であり、今考えるよりもずっと声をかけにくいと思っていた。しかし、日本に来て京都大学の学生達に出会い、日本人にも色々な性格の人がいて、とても明るくてフレンドリーな性格の人や、すごくユニークな人も少なくないことに気づいた。

このプログラムの日本語クラスを受講し、色々な京都にまつわる文章を読むことができた。そのため、日本の文学について興味を持ち始めた。特に「京都嫌い」というエッセイが印象的だった。これからも、日本の歴史や文化についての知識を身につけるために、日本についての文章を積極的に読みたいと思っている。そして、これまでに得た京都の知識を活用し、かねてから興味を持っていた「京都とドラマツールズム」についてさらに勉強しようと考えている。

忘れられない思い出

Monlanee Sritrakul

SEND プログラムでは、東南アジアの留学生が日本で日本語や日本文化を習う機会を得ることができます。これはとても良いプログラムだと思います。二週間、留学生が京大生と色々な活動を共同でおこないました。例えば、京都府議場を見学したり、平等院や伏見稲荷を見学したり、和菓子の作り方を勉強したりしました。全員が日本語で話しているので、良い練習の機会でもあり、たいへん勉強になりました。

今回の留学で、日本の社会の中で暮らし、日本の文化やマナーをよりよく理解することができました。タイでは常にスプーンとフォークを使うため、当初、私は箸でご飯を食べることが苦手でした。2週間がたち、ようやく慣れてきたので、これからは自信を持って箸で食事できると思います。また、日本語Ⅱのクラスを受講し、「サザエさん」というアニメを使って聴解の練習をしました。タイでは、日本語の聴解を練習する機会があまりなかったため、たいへん有益な授業だったと感じています。

このプログラムに参加したことで、責任感が育まれました。日本では、時間にとっても厳しく、バスや電車の来る時間が正確でした。常に時間を守らなければなりません。また、様々な国の外国人と共に勉強し、新しい友達が出来ました。私は京都と大阪で文化財などを見学したのですが、京都のほうが静かな町で魅力を感じています。さらに、京丹波町を訪れ、ニンジンやハウレンソウを収穫し、それらの天ぷらを食べたのですが、野菜好きでない私でも、これらの野菜がとても甘く感じ、たくさん食べることができました。美山かやぶきの里で餅つきの体験もしました。京丹波町では、素晴らしい景色も堪能でき、心が洗われるようでした。その後、花火の鑑賞に出かけ、花火自体の美しさに加え、浴衣を着た日本人女性たちがとても綺麗で印象的でした。

このプログラムに参加した経験と知識は、自分の国に戻った後も活用しようと思っています。例えば、タイにおけるテクノロジーと伝統文化の共存について真剣に考えようと思います。将来、チャンスがあれば、京都大学に留学したいと思っています。日本とタイの間の良好な関係を保つことに貢献したいと思っています。

京都サマープログラム二〇一六

Thosuwonjinda Manee

SEND プログラムにはいろいろな役に立つアクティビティがありました。例えば、日本語クラスでの日本語学の勉強、日本文化についての講義の受講等、本当によかったと思います。たいへん興味深く学習できたと思います。それ以外にも、個人的な観光では経験できないアクティビティがたくさんありました。まず、来日2日目に京都府議場を見学しました。京都府副知事表敬では、多岐にわたる話を聞くことができ、勉強になりました。そして、土曜日には、伏見稲荷や平等院などの京都の有名な観光地へ行きました。和菓子作りも体験しました。さらに、京野菜収穫体験や餅つき等、とても良い経験でした。

このプログラムで日本語Ⅲのクラスを受講し、日本語の文章を読む能力が向上しました。やや難しく感じていましたが、少しずつ慣れていきました。先生の丁寧な指導のおかげで、様々な新出の表現や文法事項を習得することができました。講義自体も面白く、これまで聞いたことのない情報を得ることができました。また、さまざまな国の学生達から意見を聞くことができ、自分にとって良い勉強になりました。

それに加え、京都にあるさまざまな名所に行きました。祇園や清水寺のような文化的に有名な観光地も訪ねました。それぞれが美しく、日本らしさを感じることでできる場所でした。三条や四条といったモダンな所で買い物をする機会もありました。そして、伏見稲荷では和菓子作りを体験しました。できあがった和菓子はとてもおいしく、スタッフも優しくて、いろいろな話を聞くことができました。そして、京野菜収穫体験では、自分で野菜を獲って、それらを調理するという、本当に楽しい経験ができました。

京都では、これまでにない様々な事を体験し、勉強になりました。これまで、京都のイメージとして、静かな古都の風景を思い浮かべていましたが、実際には、もちろん古くて静かな面もありましたが、最新で賑やかな面もありました。伝統・文化的な側面を保ちつつも、町中にモダンな交通機関があり、日常生活に最新のテクノロジーがあるのです。このような二面性は私の将来にとって重要なポイントだと思います。このプログラムに参加することで、日本人、日本社会、日本のテクノロジーについて、理解が深まりました。その理解を基に、私は日本に関する仕事をしようと考えています。特に、母国であるタイが、京都のような素晴らしい二面性を兼ね備えられるよう貢献したいと思います。

京都サマープログラム二〇一六

Rujinanon Panumat

留学生にとって、このプログラムはとてもいいプログラムだと感じました。日本語を勉強するのはもちろんのことですが、私のクラスでは日本の古いマンガである「サザエさん」を題材として学ぶことができました。また、勉強だけではなく、京都について色々な経験ができました。たとえば、ずっと行きたいと思っていた伏見稲荷神社にも行くことができました。また、科学や人文学の講義などを受講し、文化財も見学しました。加えて、京都府議場を見学することもできました。これらは大変珍しい機会だったと思います。

このプログラムのおかげで、日本の文化、マナー、日本での暮らし方について勉強になりました。それから、二週間も日本に住み、日本人と日本語をつかって話す機会があったため、常用の単語や表現がかなり増えました。一週間経ったころ、日本の友達から「日本語がうまく話せていますね」と言われ、嬉しく思いました。同様に、毎日日本語を聞くことで、以前より日本語を聞き取れるようになりました。

日本に来てから、良い経験ばかりだったように思います。まず、和菓子作り体験はとても心に残っています。ご担当のおじいさんとおばあさんはとても優しく作り方を教えてくださいました。それから、朝早く清水寺に行く機会があり、人が少なく、天気もよかったため、十分に日本らしさを堪能できました。清水寺ではタイ語が話せる日本人に会いました。その人は親切に色々案内してくださいました。そのこともあり、多くの日本人はやはり親切だと感じました。最高のイベントは、花火大会でした。混雑しており大変でしたが、美しい花火を見ると、疲れを感じなくなりました。ここの花火は必見だと思いました。

日本で勉強するのはこれが初めてでした。初日の授業から、日本語がまだ苦手なのがよく分かりました。これに気づいたことで、私はもっと日本語の勉強を続けなければならないと感じました。特に、方言に興味を抱きました。京都大学はとても有名な大学であり、他の地方からこの大学に入学する学生がたくさんいます。そのため、関西弁をはじめ、関東弁にも触れることができました。将来は日本語の方言について勉強しようと思っています。

京都大学で日本文化を学ぶ、築かれていく絆

Ku Ka Leung

今回の京都サマープログラムで、ASEAN 地域の大学から来た留学生たちとともに日本語・日本文化についての講義を受講し、そのおかげで日本文化の特徴についての意見や感想を交換することができました。日本語の講義では、京都に関するエッセイや小説、新聞記事など、様々なジャンルの文章の読解を通して、京都についての知識や理解を深めると同時に、日本語の読解能力を向上させることができました。人文学講義では、日本古典文学に見る日本人の美意識や学校教育に見る日本文化の諸相などのテーマが扱われ、これらの講義を受けることによって日本文化の魅力を再発見できました。また、京都大学大学院経済学研究科の岡田先生から自分の研究に関わる抜き刷りの論文や最新の著作を頂き、その上自分の研究テーマである「災害復興のガバナンス」について大変貴重な助言を頂いたので、研究に励む糧を得ることもできました。

他方で、京都府議場を見学し、京都府による府政マネジメントについての講義を受けました。また、様々な文化体験（書道講座、京野菜収穫と調理、かやぶきの里ツアー、餅つき等）をさせて頂いて、京都の伝統文化を十分に堪能しました。

そして何よりも、今回の京都サマープログラムを通して、京都大学の先生だけでなく、何人かの学生たちと交流することができ、本当にうれしく思っています。ASEAN 地域の大学生たちと日本の大学生たちが交流を重ねることは、日本におけるアジアの理解の促進につながると信じています。そのため、今回の短期留学で出会った先生方や学生たちとは未永くお付き合いしたいと思っています。これからも研究や勉強に打ち込み、いつか京都大学の先生方とお互いに切磋琢磨しあえるような存在になりたいと思っています。

私は今、日本での災害復興の過去や現状を検討し、復興のあり方を探る研究をしています。特に「災害復興のガバナンス」という研究テーマ（復興の主体は誰か、復興には誰がどのように関わり、どういった手順が必要か）に大変興味を持っております。また、2000年以降、日本の過疎地域では大規模災害が多発しており、過疎地域における復興のあり方を考える上で地域再生（住民の生活再建及び産業の再建・振興）という視点を考察しなければならないと思っており、勉強を進めています。今回のプログラムを通して、災害復興の専門の先生と出会い、日本の大学院に所属すれば、より良い研究ができるかもしれないと考えるようになりました。修士課程修了後に博士課程に進学したいと思っていますが、ぜひ日本の大学院への進学を検討したいと思っています。

My Experience in Kyoto University

Lee Sue Ling, Naomi Hashimoto

この二週間の間に、日本語関連の専門的な授業が合計11コマありました。私は白方先生の日本語Ⅲを受講しました。白方先生から、エッセイ、小説、新聞記事など、様々なジャンルを通じて、京都について教わりました。その中で、京都についていろいろな視点から観察しました。京都が好きな作家もいれば、京都が嫌いという作家もいます。京都は日本の伝統の代表として、世界中の人々に「古都」として知られていますが、その古都らしい景観を守るために、どういう問題点が生じるのか、どんな規制が作られてきたのか等を学びました。京都では景観条例が定められており、建物の高さや、看板の大きさや色が決められています。しかし、看板を変更するには時間とお金を費やすため、多くの業者が規制に従わないことがありました。このように、「古都」の景観を保つことがいかに大変なことなのかを様々な面から知ることができました。これまで、インターネットや雑誌などで京都を表面的にしか見ていなかったのですが、このプログラムの、特に白方先生の授業を通して、京都についてより深く理解できたと思います。

他の東南アジア諸国から来た大学生、そしてこのプログラムをサポートしてくれた京大生と、毎日日本語で互いの国や文化について話し合いました。観光地等にも京大生に連れて行ってもらうことが多かったのですが、ときに一人京都の街並みを歩き、周囲の様子や街を歩いている人を観察しました。神社やお寺、あるいは京都の名所を訪ねる際に、写真の枚数を一、二枚にリミットし、カメラのレンズではなく、自分の目で周りの風景を切り取り、深く感じるよう努めていました。知らず知らずのうちに、日本での経験を心に刻まなければならないという念に駆られていたのだと思います。

このプログラムでほぼ毎日京都大学に通い、日本語の授業や講義を受けました。短期間でしたが、京都大学でのキャンパスライフを経験することができました。特に強く感じたのは、京都大学のにぎやかさと自由な環境です。ここなら、心配なく勉強できると、心から思いました。来年三年生になる時に留学するつもりなので、また京都大学に来たいと思います。

くだらないことかもしれませんが、初めて親から離れた私はこのプログラムのおかげで自立したように思います。初めて自らホテルにチェックインし、新幹線や飛行機、駅から空港に行くリムジンバスのチケットを予約したりと、以前よりも自分に自信を持つことができました。

京都で学ぶインドネシアと日本

Ajeng Putri Pratiwi

京都サマープログラム2016で様々なことを勉強しました。日本語クラスの中では、日本語の1分スピーチやメールの書き方について習いました。ほかにも、日本語、日本文化についての興味深い講義を受講しました。このプログラムでは、日本語だけでなく、日本文化や京都の歴史について学習する機会を得ることができました。他にも、日本文化講座として、書道の実践がありました。また、京都府庁では京都府政についての講義も受けました。学外研修として、京都府京丹波町に行き、参加メンバーと共に日本料理や餅を作る機会がありました。京都の文化だけでなく、大阪の文化についても勉強しました。学外研修で大阪に行った際、能を鑑賞し、花火を楽しむという貴重な機会を得ました。

日本での研修で学習を重ねるにつれ、日本の習慣や日本人の考え方について理解できるようになりました。また、日本語に関しては、適切な文法の使い方を学び、日本語をつかったやりとりに慣れてきたため、スムーズな会話ができるようになりました。そのほかにも、言い表すことができないほど素晴らしい経験をえました。

今回、日本に来ることかでき、大変貴重な経験、すなわち、日本社会、文化の中で直接日本人と日本語を使ってコミュニケーションをするという経験をすることができました。京都では様々な場所を訪れ、色々な体験ができました。

2週間という短期のサマープログラムでしたが、十分な学習ができました。京都は日本の文化の中心であり、多くの歴史的遺物を残していて、伝統的な物と現代的なものが混じり合っています。個人的には有名な文化財の多さに惹かれたので、今後、京都の伝統文化について研究したいと考えています。

京都でもらった経験

Mutiara Rachmadini Effendi

Kyoto Summer Program 2016 では日本についての講義を受けたり、日本文化を習ったり、日本の生活を経験したり、当然自分の日本語能力を試したりしました。特に、京都での生活や心得を身に染みて感じることができました。

全体としては、日本人学生や東南アジアの学生達と、徐々に日本語で会話ができるようになりました。流暢ではないのですが、これまでのように怖がることはなく、勇気をもって会話に臨むようになりました。そもそも、来日したばかりの頃は日本語での会話がどうなるのか、もしかすると全然だめかもしれない、と思っていました。しかし、先生方や京大生達は、たいていシンプルな日本語で留学生にしゃべりかけてくれたので、怖気づくことなく、「日本語で会話を練習しよう」と考えることができました。日本語以外にも、日本文化や日本人との付き合い方について多くのことを学習しました。

様々な講義の受講や見学・観光をしたのは、良い経験になりました。それぞれの経験は、自分にとって特別な意味をもっています。色々な日本料理を食べ、文化の点から観察をおこないました。また、私は宗教に興味をもっているので、八坂神社、伏見稲荷大社、市姫神社、東大寺、法隆寺など、多くの寺社を訪れました。

常に抱いている夢は、将来は心理学者になる、というのですが、現在は日本学科に在籍しています。「Kyoto Summer Program 2016」に参加して日本語・日本文化について見聞を深めることができ、本当に感謝しています。そのため、将来は日本語を使う仕事もやりたいと思い、これからも語学力を磨き、日本語でコミュニケーションができる友達を増やしたいと思います。また、京都大学の大学院の情報も調べ、大学院進学の計画を立てようと考えています。

このプログラムはすごく良いプログラムだと思います。様々な国同士が互いに交流し良好な関係を築くことができます。個人的には、非常に大切な経験になりました。他の学生にも是非勧めたいと考えています。

京都サマープログラム2016

Nia Septiani

日本語授業のクラスの中で動画を見ながら日本語を学習し、書道の授業では作品を制作したりしました。また、京都の歴史、文化、学校教育にみる日本文化、古典から見た日本人の美意識、日本語のウチとソトといったトピックについて学習しました。ほかにも色々なことを勉強しました。

このプログラムでは色々なことを学びました。日本語だけでなく、日本のことについて詳しい知識を身につけることができました。特に京都の言語、歴史、文化について学習しました。京都大学はたいへん便利だと感じました。教室は勉強しやすい環境が整っており、快適に学習することができました。

このプログラムに参加できたおかげで、日本の社会や文化について理解が深まりました。今回のプログラムでは、いろんなことを習い、いろんなことを体験しました。

期間は2週間でしたが、それよりも長期間、日本で修学したいと考えています。京都大学に進学したいと思います。これからも参加者の間で連絡を取り合いたいと思います。チャンスがあれば、また皆と日本で再会したいと思います。

二週間で見た日本

Nisky Khastanty Parisya

「京都サマープログラム2016」に参加することができたことを幸運に思います。日本語を使ってコミュニケーションをしたいという希望があり、このプログラムに参加しました。インドネシアでは、日本の文化、歴史、文学について学んできましたが、さらに深く学びたいと考えていました。幸運にもこのプログラムに参加することができ、多くのことを学びました。主に、日本語、文学や美的感覚、文化、歴史について学びました。日本語の授業では、メールの書き方、スピーチの構成の仕方、京都弁について教わりました。日本語の授業の中で、スピーチを構成するために、留学生と京大生が様々なトピックについて意見交換しました。たとえば、Pokemon Go と若者言葉などのトピックについて議論しました。教室での授業ばかりではなく、学外研修にも参加し、京丹波と大阪に行きました。京丹波では日本における農法を学び、野菜を収穫・調理しました。オーガニックな野菜で、たいへん美味でした。大阪では、能を鑑賞し、素晴らしい伝統文化に触れました。

「京都サマープログラム2016」では、たくさんを経験し、感謝の気持ちでいっぱいです。このプログラムで、日本、タイ、ベトナム、シンガポールの大学生たちと友達になりました。他のアジアの学生たちと知識を共有することは大変重要なことです。京都大学の学生は聡明で親切であるという印象を受けました。また、京都の街中では様々な事柄を観察しました。特に、京都の公共交通機関の分かりやすさに感銘を受けました。最も印象に残ったのは嵐山の風景で、今でも心に残っています。日本人との日本語をつかった会話の機会がたくさんあり、2週間という短期間ではありますが、日々積み重ねたおかげで、会話に対する自信ができました。インドネシアに帰国した後、卒業論文の執筆にとりかかりますが、その後、京都大学で修学を続けたいという希望を持っています。

「京都サマープログラム2016」は日本に興味を抱いている人にとって、素晴らしいプログラムだと思います。毎日、京都大学の学生たちが留学生たちのやる気を起こすように努力してくれました。本当に感謝しています。このプログラムで得た友人たちとは、ぜひ日本で再会したいので、これからも全員と連絡を取り合いたいと思います。

京都サマープログラム 2016

Yasmin Mohammad Nadjib

日本に来てから、日本語を使う機会が多く、会話にも聴解にもどんどん慣れていきました。日本社会に直に触れ、自分の大学で学ぶよりも日本文化を理解しやすいと思いました。日本人の友達を作り、一緒に勉強し、日本人の考え方、学び方、研究の仕方について理解が深まりました。日本に来る前とは違い、日本や日本人に対する見識が深まったと思います。

日本語以外にも、文化、社会、そして友達を作ることについても学びました。公共交通機関、Wi-Fi、自動販売機などは使い勝手が良く、便利です。京都にある施設は適切に維持されているので、生活のため、勉強のため、研究のための環境が整っていると思います。バスの運転手や食堂で働いている店員まで、皆が優しく、真面目に仕事を頑張っている姿に感動しました。自分の国でもこのような環境を作りたいと考えています。

本短期交流プログラムは京都大学で行われたサマープログラムです。このプログラムでは色々なことを学びました。日本語のクラスの中で相手を誘うこと、頼むこと、許可の仕方にかんする文法項目を簡単に学び、メールを書く方法やスピーチをする方法も教わりました。色んな話題について意見を伝える経験をしました。京大の学生に日本語を直してもらったりしました。また、京都の歴史、チンパンジーの研究、日本学校教育、日本語のウチとソトといったトピックについての講義も受講しました。学外研修として、京丹波、かやぶきの里に行く機会もありました。このプログラムを通じ、色々なことを学び、色々な経験をさせてもらって、色々な所へ行き、いろいろなものを見て、たくさん人に会いました。参加できたことを本当に嬉しく思います。グループの発表では、色々な国からきた参加者と友達になり、文化交流もできました。参加者は日本語・日本文化にかんする学科の学生なので、このプログラム中に学んだことを説明し、日本の生活に関する自分の意見を発表するのも良いと思いました。

私はこのプログラムに参加し、自分の意欲についてももう一度ちゃんと考えるべきだと思いました。夢を追いかけ、日本で学びたいという強い希望を持っています。そのあと、インドネシアの子供たちが自由に夢を追いかけられるように、国の教育システムの改善に貢献したいと思います。大きな夢ですが、日本人のように頑張りたいと思います。

The experience that I had during my course in Japan

Bùi Khánh Linh

今回、京都サマープログラム 2016 に参加できて嬉しく思う。授業では、先生の教え方は分かりやすく、京大生たちは親切だと感じ、そのお蔭で様々なことを学ぶことができた。最も楽しんだのはスピーチの授業だった。その授業では、作文の練習をすることができ、実際のスピーチ発表にも意欲的にのぞんだ。他にも、日本人の美意識や書道など、日本の文化についての講義や実践があった。

短期間の研修ではあったが、日本での滞在はたいへん楽しいものだった。日本語を使った会話を実践することができ、聴解や読解などの能力を向上させることができた。自信をもって短いスピーチをすることができた。

日本文化だけでなく、日本人の農業従事者の生活も体験した。他の参加者と共に野菜を収穫・調理し、昼ご飯を作った。特に、この学外研修を通して、メンバー同士の仲が強固になったように思う。

プログラム中、電車で携帯電話を落としてしまった。しかし、幸運にも翌日に携帯電話を受け取ることができた。誰かがそれを拾って、鉄道会社の窓口に届けてくれたのだ。たいへん感謝している。このこともあって、日本人は親切だと実感した。世界中を見ても日本の治安はかなり良いと思われる。

京都に滞在することで、日本人の生活について様々なことを理解することができた。私の日本語能力は高いとは言えないため、さらに勉強を続けなければならない。留学の希望があり、留学先としては京都が適していると考えている。

素晴らしい日本

Nguyễn Thị ánh Tuyết

このプログラムでは、いろいろなことを勉強した。私にとって最も興味深く、役に立つと思われたのは日本語クラスⅡの授業である。そのクラスでは、サザエさんのアニメを題材として聴解の練習をおこなった。そのため、サザエさんのアニメを通じて、日本語だけでなく日本文化についても学習することができた。また、日常会話に慣れ、日本語を聞き取る力が向上した。それだけでなく、日本語の授業ではいろいろなことわざを学んだ。

今回、日本人だけでなく、東南アジアの留学生とも交流でき、とても嬉しく思った。京都大学のキャンパスを案内してもらい、見学した。昼ごはんは食堂で食べた。素晴らしい食堂だと思った。そして、東南アジアの留学生や京大生と一緒に食事をし、自国について話しあった。とても楽しかった。

学内の授業以外では、日本の生活を経験した。学外研修として、野菜を収穫・調理し、ご飯を作った。そのうえ、餅つきを体験した。日本人の生活について色々なことが理解できた。

体調を崩した際に、先生や友人たちにお世話になった。今回、日本に来ることができ、とても感謝している。短期間の交流だったが、とても楽しんだ。今後、日本に留学したいと考えている。日本語についてはさらに勉強しなければならない。

京都サマープログラム二〇一六

Nguyễn Phương Uyên

日本人の学生と交流する機会を得たおかげで、日本語のコミュニケーション能力がますます向上した。これからは、もっと日本語を改善し続け、毎日「読む・書く・話す・聞く」の言語の4技能をそれぞれ伸ばしていきたい。特に、日本の文化や地理などについて多くの知識を蓄えていきたい。

京都大学における授業や学外での見学を体験したおかげで、言語と文化についての知識を効率的に集めることもできた。その上、日本人の学生たちの研究や学習の方法について学ぶこともできた。先生や学生たちと定期的なメール交換を通じて、メールの書き方や文章を工夫する技能が身に付いた。

日本人の学生および他の留学生とグループになり、共に共同発表を行ったことで、日本語をつかって発表することに自信を持つことができた。そして、アセアン諸国と日本について多くの知識を得た。

アニメと映画を見る授業を通じて、初めて役割語について学び、それを日常会話で使うことを覚えた。そして、サイレント映画の会話を作ったのは興味深い経験だった。

英語で行われた講義で、様々なテーマに関する議論を行うこともできた。学生たちとの意見交換に積極的に貢献できた。しかしながら、未知の事柄が多かったため、これからもさらなる情報収集に努めたい。

学外文化学習の授業もあった。それを通して、日本人の生活についての理解が深まった。京野菜収穫と京野菜調理を行うことで、労働力の価値について体験することができ、同時に、農家の方々に尊敬の念を抱いた。

「京都サマープログラム 2016」で、私はアニメと映画を通じて日本語を学習し、文化講座を通じて日本の文化について学ぶことができた。また、学外研修のおかげで、日本の文化や歴史、日本人の習慣に触れ、それらを実際に体験する機会を得た。例えば、京野菜収穫体験やかやぶきの里ツアー、餅つき体験等である。その上、京都大学について紹介を聞き、京都市の歴史について学ぶ機会もあった。英語でおこなわれた授業もあった。そして、日本人の学生および他の留学生と交流し、共に共同発表をおこなった。

現在、日本語教育を専攻しており、これについて学んでいる。将来日本語の教師になりたいと考えている。これは、日本に興味や関心を寄せる人に日本語と日本の文化を教えたいという希望があるからである。今回のプログラムでの経験は大いに自分の将来に役立つだろう。このプログラムに参加できたおかげで、日本語をつかって会話することに十分自信が持てたと思う。

Kyoto 2016

Đậu Thị Việt Kiều

今回、私は京都サマープログラム 2016 に参加でき、とても嬉しく思います。このプログラムは、様々なことを学ぶための格好の機会でした。

このプログラムおかげで、私は日本語をじゅうぶん勉強することができました。日本語の独特の言い回しなどを知りました。私はたくさんのトピックについてスピーチし、自信をもって短いスピーチをすることができました。これらを通して、私の日本語能力は向上しました。毎日私は日本人の学生たちと話し、会話を練習しました。また、伝統的な観光地に行き、日本の文化に触れました。2週間の日本での滞在で、私はだんだんと日本の生活に慣れていきました。お餅の作り方を教わり、お餅をつく体験をしました。買い物に行ったり、レストランで日本食を食べたりしました。さまざまな便利なサービスを利用し、毎日バスか電車で通学しました。京大生の生活について議論したりしました。

このプログラムは2週間、日本について勉強するプログラムです。学外でも、京都のお寺、神社に行くといった機会がありました。京大生とともに綺麗な景色を見に行くこともありました。また、農園の見学にも行きました。自分で野菜を収穫して、皆とそれを料理しました。最終日には、日本人学生と共に日本や他の国の問題について発表しました。全体を通して、特に京都について詳しく知ることができたように思います。

このプログラムを通して、私は自分の日本語能力を知ることができました。さらに日本語の勉強を続けたいといけません。日本で勉強したいので、もっと頑張りたいと思います。将来、日本の文化について研究したいと思っています。

京都サマープログラム二〇一六

Trần Thị Khánh Linh

京都サマープログラム 2016 に参加することができたということが、これまでの大学生時代の一番忘れられない思い出となりました。二週間のあいだ、たくさんの素晴らしい経験をすることができました。

先生方と京大生達が様々な面から援助してくれたことに感動しました。その援助のおかげで、皆と楽しい時間を過ごすことができました。私はまだまだ日本語が上手とは言えませんが、今回のプログラムを通じて日本語のスキルを向上させることができました。特に、会話の能力が向上したと感じています。他にも、プログラムにおいて提供された講義や学外研修によって、日本の文化についての理解が深まりました。

特に印象深かったのは、日本人の働き方・取り組み方でした。その中心にあったのは、時間を大切にするという意識でした。これまで日本について学習してきたことや今回のプログラムを通して、なぜ日本が成功しているのかということが理解できてきたように思います。この点に関して、ベトナム人にとって学ぶことは多いと思います。

プログラム期間の二週間、日本語や日本の文化について多くのことを勉強しました。日本語の授業を受けて日本語を集中的に勉強したり、日本の文化について教わったりしました。学外では、京都の名所へ行きました。さらに、京丹波町では、京野菜を収穫したり、自分で昼ご飯を作ったり、もちつきを体験したりしました。これらの学びの場だけでなく、日本での日常生活も大いに楽しみました。

机に向かって何かを勉強することは、それを自分で経験することとは全く違います。このことを意識し、これからも一生懸命日本語の勉強を続けようと思います。将来、日本の文化について研究しようと思っています。留学の機会があるなら、京都での修学が一番の希望です。

京都サマープログラム二〇一六

Hoàng Thị Thuỳ

私にとって、本当に忘れられない体験でした。いろいろなことが新しく、貴重なことを学習したのだと思います。

東アジア、東南アジア各国の学生、および京大生と共に、日本の文化、古典文学、京都の歴史と将来、日本語について見識を深め、諸大学の学生間で各自の国が抱える問題について議論しました。また、学外では、京都府庁を訪問して、京都府政について学びました。さらに、関西の多くの名所、たとえば、清水寺、東大寺、奈良公園を見学し、歴史について理解を深めました。また、京丹波町では、野菜の育て方、山村での生活、日本料理について学ぶことができました。

上記の学習内容に加え、様々なことを習いました。日本、インドネシア、シンガポール、タイの学生たちと共に議論し、意見交換することができました。それはアジア諸国について、そして日本について知るための貴重な機会だったと思います。特に、これら諸外国の友達ができただことは、私にとって本当に素晴らしいことです。勉強方法についても互いに意見交換し、多くのことを学びました。私にとっては、彼らの勉強方法がとても先進的に思われ、良い刺激になりました。

このプログラムは、2週間の期間、日本について学を深めるというものです。私は日本語会話を中心とした授業を受講しました。また、京都でいくつかの寺社を訪ね、日本の文化について理解を深めました。さらに、京大生と素晴らしい景色を見に行く機会があり、京都の素晴らしさの一部を知ることができました。学外研修では、農園に行き、自らの手で野菜を刈り取り、それらを調理する体験をしました。最後のグループ発表では、日本および東南アジア各国の問題について発表をおこない、かけがえのない友達ことができました。

私は将来、京都の伝統的な文化の保存や情報発信の方法を学び、実践したいと考えています。今回のプログラムに参加できたことは、そのためにも非常に貴重な体験になりました。また、この2週間のあいだに、日本人の生活の一部を見る機会がありました。このことは今後役に立つと思います。このプログラムでの2週間は、私にとってすばらしい思い出です。

SEND プログラム 2016 年度受入実施報告書
「京都サマープログラム二〇一六」

平成 29 (2017) 年 3 月発行

編集・発行 京都大学アジア研究教育ユニット (KUASU)
京都大学国際高等教育院 (ILAS)

〒606-8501 京都市左京区吉田本町
電話 (075) 753-5678

印刷・製本 株式会社 田中プリント
電話 (075) 343-0006